

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 11

東京大学本郷構内の遺跡

総合研究博物館新館地点

2012

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 11

東京大学本郷構内の遺跡

総合研究博物館新館地点

2012

東京大学埋蔵文化財調査室



昭和 11 年 本郷キャンパス南西部 (東京大学大学史史料室所蔵)



調査区全景

例 言

1. 本報告は、東京大学本郷構内の総合研究博物館新館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 総合研究博物館新館地点は、調査、整理時において、「総合研究資料館地点（略称「TUM」）」と称していた地点であり、既出の年報、論文などには「総合研究資料館地点」と記載されている。本報告の作成にあたり、現在の施設名称である「総合研究博物館新館地点（略称「TUM」）」に改称した。
3. 本地点は、東京都文京区本郷7-3-1 東京大学本郷構内に所在している。
4. 本地点は、東京都遺跡地図「文京区 No.47 本郷台遺跡群（本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平]住居・[近]礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣[旧][縄][弥][古][平][近]）」内に位置している。
5. 本地点の調査面積は、670㎡である。
6. 調査・整理期間は以下の通りである。

事前調査	1994年2月14日～4月8日
整理作業	2009年3月18日～4月13日（遺物実測）
	2009年7月15日～7月27日、11月6日～11月20日（写真撮影）
	2010年4月19日～6月4日（遺物図版作成）
	2011年4月4日～6月24日（遺構図版作成）
報告書編集	2011年12月12日～2012年4月27日
7. 本地点の発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査担当者は堀内秀樹である。
8. 本報告の編集は、堀内秀樹・小林照子が行った。
9. 執筆分担は以下の通りである

第I章、第II章、第III章、第V章	堀内秀樹
第IV章第1節、大貫浩子、石井龍太（瓦）	
第IV章第2節	阿部常樹
10. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が、駒場Ⅱリサーチキャンパス、茨城県石岡市柿岡414 東京大学工学部・工学系研究科柿岡教育研究施設内において、

運用、保存、管理している。

11. 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の方々からご教示を得た。記して感謝を表したい。(敬称略、五十音順)

池田悦夫、大貫静夫、小川 望、木下直之、佐藤宏之、藤井恵介、宮崎勝美

東京大学人文社会系研究科文学部考古学研究室、東京大学総合研究博物館、東京大学施設部、株式会社 三浦工業

12. 発掘調査・整理作業参加者

発掘調査

三浦大司、飯田浩子、大島美智子、鷺信弘、佐藤一男、佐藤正身、四家英道、鈴木行雄、高根五郎、立川信夫、銅家弘道、成田竹夫、西川高雄、野口記子、長谷川一哉、(株式会社 三浦工業)

整理作業

青山正昭、安芸毬子、石井龍太、今井雅子、大貫浩子、加藤理香、香取祐一、小林照子、坂野貞子、田中美奈子、山田くりか、渡辺法彦(埋蔵文化財調査室)

凡 例

1. 本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。

SD：溝 SE：井戸 SK：土坑 SP：ピット SU：地下室

2. 本報告の実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物図版の縮尺は基本的に 1/3 である。

3. 出土遺物の写真は、基本的に添付した CD-ROM に JPEG 形式で記録しており、遺物番号は本文・挿図・観察表・CD-ROM の写真で共通の番号を使用している。

4. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。

- ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
- ・┌─┐は、口唇部の口銹を表している。
- ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
- ・— —は、断面を表している。
- ・播鉢の┌─┐は、体部播目の範囲を表している。
- ・口唇部の┌─┐は、敲打痕を表している。

5. 本文中に記載した陶磁器・土器の分類は、『東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊東京大学構内 遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)』に準拠している。

本地点からは、コンテナ箱にして 64 箱の遺物が出土している。これは調査時に取り上げが必要と判断されたもの、瓦の細片、礎石や石垣などに使用された石やその後込めの割石、壁土、漆喰、炭化物、火山灰あるいは取り上げる際に崩壊するようなものを除外した出土遺物の総量である。この中には、胎質別に陶磁器・土器類、人形・ミニチュア、瓦、金属製品、石製品、木製品、骨角製品、ガラス製品、自然遺物等が含まれる。本報告では自然遺物については人工遺物と分けて記述を行った。人工遺物については遺構別に遺構番号降順に記載した。実測図は、出土遺物全てを行うことは量的に不可能であり、本報告では出土遺構ごとにその年代や性格などを代表すると判断される遺物を中心に、完形率、希少性などを含めて図化選択を行った。遺物観察表は、全て添付の CD-ROM に xlsx 形式にて、保存・記録している。

遺物写真は、掲載遺物各個について写真撮影を行い、これを 1280 × 850 ピクセルで jpeg 形式に圧縮し、添付の CD-ROM に保存・記録している。

6. グリッドは、本調査区全域にかかるように 10 × 10m に設定した。グリッドは東から西へアルファベット、北から南へアラビア数字で表し、その交点を A1、A2・・・とし、交点の南西区画を A1 区、A2 区と呼称した。グリッド軸は、世界測地系に対し N-14° 44' 35" -W 振れている。また、本調査地において設けたグリッドの座標値は、世界測地系（測地成果 2000、震災補正後）のデータで、B3 (X=-32335.680、Y=-6507.164)、C5 (X=-32357.393、Y=-6512.506) である。

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器	E - 備前系
A1 景德鎮窯系	F - 志戸呂系
A2 漳州窯系	G - 常滑系
A3 徳化窯系	H - 萩系
A4 龍泉窯系	I - 萬古系
A5 宜興窯系	J - 大堀・相馬系
A6 朝鮮	K - 丹波系
A7 ベトナム	L - 堺系
A8 ヨーロッパ	M - 益子・笠間系
B - 肥前系	N - 九谷系
C - 瀬戸・美濃系	O - 壺屋系
D - 京都・信楽系	P - 淡路系
	Z - 不明

○器種

1. 碗	2. 皿	3. 大皿	4. 爛徳利	5. 鉢
6. 坏	7. 猪口	8. 仏飯器	9. 香炉・火入れ	10. 瓶
11. 御神酒徳利	12. 油壺	13. 蓋物	14. 筆立て	15. 壺・甕
16. 急須	17. 燗鍋	18. 合子	19. 水滴	20. 蓮華
21. 植木鉢	22. 花生	23. 片口鉢	24. 灰落し	25. 鬢水入れ
26. 茶入れ	27. 水注	28. 澁瓶	29. 搦鉢	30. 餌入
31. 火鉢	32. 柄杓	33. 鍋	34. 土瓶	35. 戸車
36. ちろり	37. 薬研	38. 手焙り	39. おろし皿	40. 油受け皿
41. 油徳利	42. 行平鍋	43. 十能	44. ひょうそく	45. 瓦燈
46. カンテラ	47. ほうろく	48. 七輪	49. 涼炉	50. 五徳
51. 塩壺	52. 燭台	53. 蒸し器	54. 懐炉	00. 蓋

○胎質

J:磁器(磁質) T:陶器(陶質) D:土器(土師質) R:瓦(瓦質)

○産地

A:輸入陶磁 B:肥前系 C:瀬戸・美濃系 D:京都・信楽系 E:備前系 Q:江戸在地系 Z:不明

○器種

1000 人形

1100 ひと形

1101 天神	1102 恵比寿	1103 大黒	1104 福祿寿・寿老人	1105 布袋
1106 不動明王	1107 地藏菩薩	1108 狸々	1109 西行	1110 袴人形
1111 力士	1112 朝鮮通信使	1113 蹴鞠人形	1114 坊主人形	1115 虚無僧
1116 狛師	1117 猿曳き	1118 福助	1119 笛吹き	1120 若衆
1121 姉様	1122 太夫・花魁	1123 お多福	1124 三味線弾き	1125 裸婦
1126 おぼこ・禿	1127 唐子	1128 ぶら人形	1129 這子	1130 狛抱き童子
1131 亀乗り童子	1132 狛乗り童子	1133 面持ち童子	1134 金太郎	1135 桃持ち童子
1136 獅子舞	1137 鯛抱き童子			

1200 動物形

1201 狛犬	1202 獅子	1203 猿	1204 犬	1205 馬
1206 狐	1207 牛	1208 猫	1209 兎	1210 鼠
1211 狸	1212 虎	1213 象	1214 鳩	1215 鶏
1216 鶯鶯	1217 木菟	1218 亀	1219 蛙	1220 鯉
1221 鯛・鯛車	1222 金魚	1223 蟬		

1300 その他(1100・1200以外)

1301 達磨	1302 首人形	1303 獅子頭	1304 面	1305 陽物
---------	----------	----------	--------	---------

2000 器物

2001 碗	2002 皿	2003 鉢	2004 銚子	2005 瓶
2006 壺	2007 片口鉢	2008 急須	2009 土瓶	2010 鍋
2011 釜・茶釜	2012 搦鉢	2013 蓋	2014 七厘・焜炉	2015 石臼
2016 竈	2017 器台	2018 硯	2019 水滴	2020 銭貨
2021 五銚鈴	2022 袖でんぼ	2023 香炉・風炉		

3000 建造物

3001 祠	3002 塔	3003 城郭	3004 橋	3005 塀・袖垣・石段
3006 民家・庵	3007 灯籠	3008 鳥居	3009 御輿	3010 舟
3011 庭園・背景	3012 仕切り盤			

4000 遊具

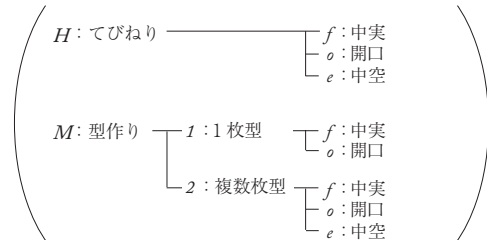
4001 土鈴	4002 独楽	4003 笛	4004 碁石状製品	4005 面模
4006 泥面子・芥子面	4007 土王	4008 円盤状製品	4009 車輪状製品	

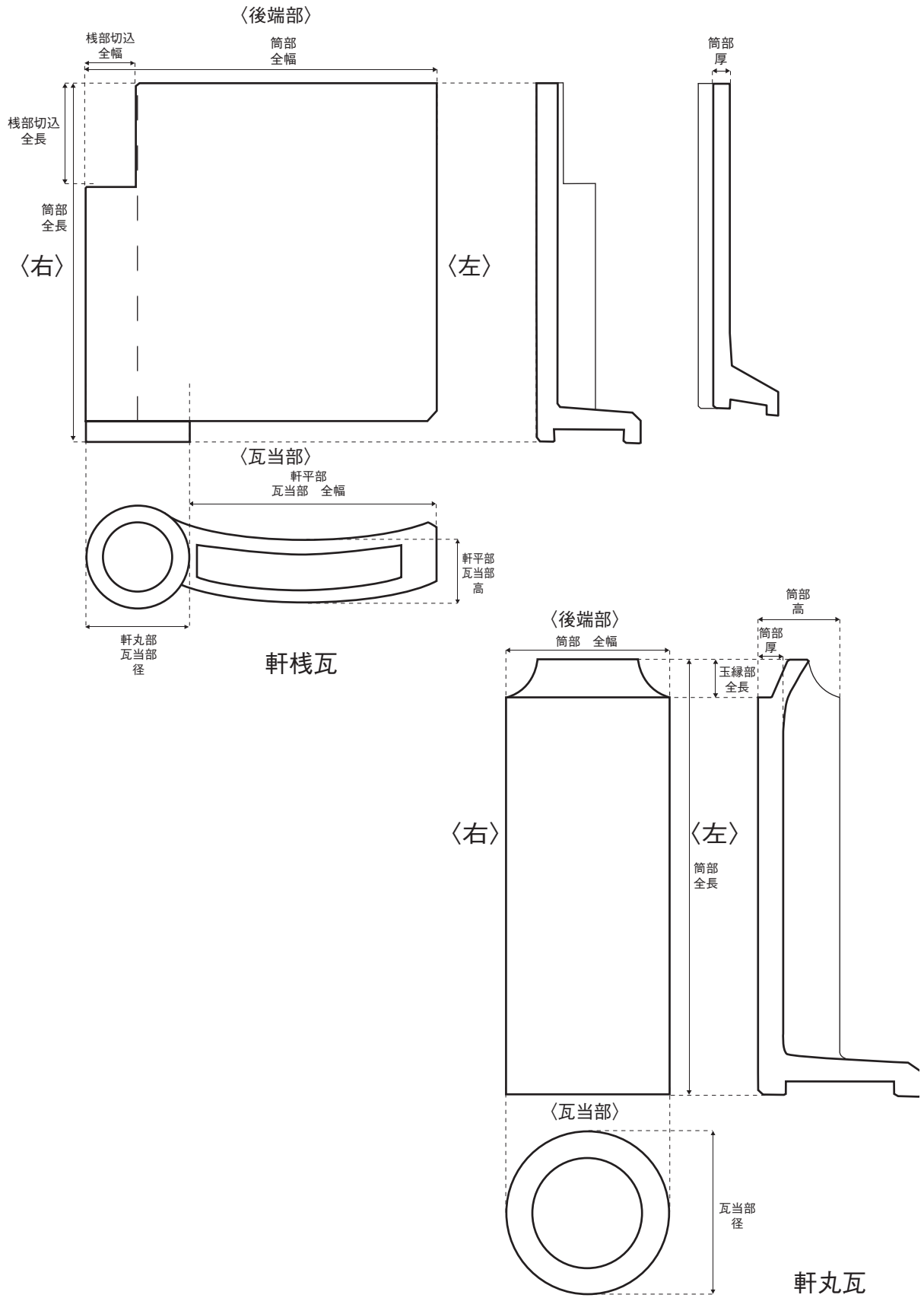
9000 不明

○技法

H:てびねり
M:型作り
W:ろくろ
B:板作り
A:加撃

*1000:人形





東京大学本郷構内の遺跡
総合研究博物館新館地点発掘調査報告

目 次

例 言
凡 例
目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置	1
第2節 遺跡の地理的・歴史的環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	4

第Ⅱ章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯	6
第2節 調査の方法と経過	6
第3節 調査の概要	9
第4節 基本層序	9

第Ⅲ章 遺構

第1節 江戸時代の遺構	13
第2節 近代（懐徳館関連）の遺構	27

第Ⅳ章 遺物

第1節 人工遺物	51
第2節 動物遺体	68

第Ⅴ章 考察

第1節 総合研究博物館新館地点の土地利用の変遷	72
-------------------------	----

参考文献
報告書抄録

第 I 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置

調査地点は、東京都文京区本郷 7-3-1、東京大学本郷キャンパス南西隅にある東京大学総合研究博物館（旧東京大学総合研究資料館）、東洋文化財研究所に接する位置にある。

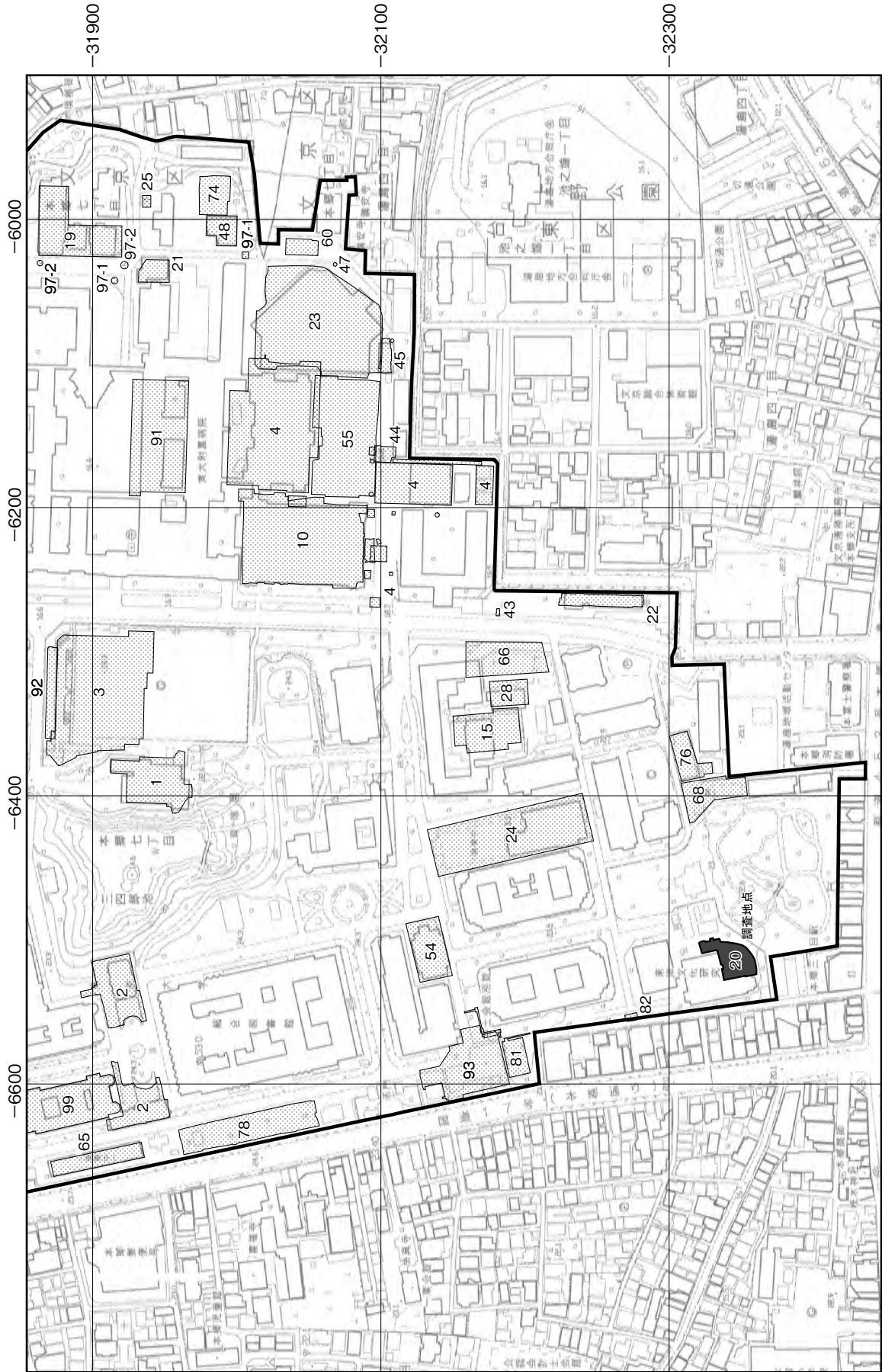
東京大学本郷構内は、全域を「文京区 No.47 本郷台遺跡群」、一部を「文京区 28 弥生町遺跡群」として周知の遺跡として登録されている。埋蔵文化財調査室では 1983 年以降、事前調査、試掘調査、立会調査など含め、継続的に埋蔵文化財発掘調査を行っている。本地点が位置する本郷キャンパス南側周辺では、15 薬学部新館地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1997）、22 山上会館龍岡門別館地点（同 2004）、24 医学部教育研究棟地点（同 1999）、28 薬学部資料館地点（同 1997）、54 総合研究棟（文・経・教・社研）地点（同 2002）、66 薬学系総合研究棟地点（同 2006b）、68 インキュベーション施設地点（同 2004）、76 ベンチャープラザ地点（同 2008）、81 経済学研究科学術交流棟地点（同 2012）、82 懷徳門地点（同 2011b）、93 伊藤国際学術交流センター（未報告）などの調査が行われ、江戸時代加賀藩本郷邸、本郷六丁目町屋などの状況が次第に明らかになっている（I-1 図）。これらについての詳細は上記の報告書、年報を参考にされたい（I-1 表）。

第 2 節 遺跡の地理的・歴史的環境

（1）地理的環境

本郷キャンパスの地理的様相については、これまで理学部 7 号館地点の報告（鈴木 1989）、浅野地区 I の報告（橋本 2009）などに触れられており、詳細は参照されたい。これらと江戸期における改変を略述すると本郷キャンパス内は武蔵野台地の東端、南北に延びる本郷台地（神田台）上の M2 面上に存在する。このうち標高約 20～22m の上位面と 15～17m の下位面とが存在するが、このうち本地点は上位面に位置する。本郷台地の東は上野台地を挟んで、滝野川、千駄木、根津、湯島と南流する旧石神井川によって開折された谷が存在する。旧石神井川は、従来不忍池からさらに南流して江戸湾に注ぐものであったが、江戸幕府の水利政策により加賀藩下屋敷のある滝野川付近より人為的に東流させ、隅田川に流入するように改変されている。また、台地東斜面は小河川による谷が複雑に入り込んでおり、この状況は、東京大学本郷構内の発掘調査によっても確認されている（東京大学遺跡調査室 1990b、東京大学埋蔵文化財調査室 2005a など）。

調査区付近は、本郷台地のほぼ中央に位置しており、調査地点内の立川ローム層上面はほぼフラットであった。しかし、近隣の地形を俯瞰すると本郷通りは、本調査区より南側、現在の菊坂上付近が最も標高が低い（I-4 図）。この明治 16 年陸軍参謀本部による「東京府武蔵國本郷區本郷本富士町近傍」では、本郷四丁目（西側町）裏は現在の菊坂に沿って西流する小河川が存在し、等高線からも本郷四丁目町屋付近が最も低くなっていることが判る。



世界測地系

I-1 図 本郷地区南側調査地点

第 I 章 遺跡の位置と環境

地区	番号	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)
本郷	1	山上会館(U)	事前	1984.3.7 ~ 86.7.17	1500
本郷	2	法学部4号館(法)・文学部3号館(文)	事前	1984.4.1 ~ 85.3.31	2500
本郷	3	御殿下記念館(G)	事前	1985.7.29 ~ 87.6.30	6000
本郷	4	医学部附属病院中央診療棟(病中)・設備管理棟(エネセン)・給水設備棟(給水)・共同溝(共同溝)	事前	1984.10.1 ~ 87.3.31	7700
本郷	10	医学部附属病院外来診療棟(HG)	事前	1990.6.27 ~ 91.2.21	5500
本郷	15	薬学部新館(YS)	事前	1992.10.21 ~ 12.18	1300
本郷	19	医学部附属病院看護師宿舎(HN)	事前	1993.8.4 ~ 94.1.17	746
本郷	20	総合研究博物館新館(TUM)	事前	1994.2.14 ~ 4.8	670
本郷	21	医学部附属病院MRI-CT棟(MRI)	事前	1994.1.18 ~ 3.12	400
本郷	22	山上会館龍岡門別館(HF)	事前	1994.8.17 ~ 10.17	593
本郷	23	医学部附属病院病棟(HW)	事前	1994.4.21 ~ 11.16 1995.1.31 ~ 96.5.31	6096
本郷	24	医学部教育研究棟(医研)	事前	1994.11.17 ~ 95.4.28 1997.3.10 ~ 4.25 1998.11.2 ~ 12.25 2002.9.3 ~ 12.25	2415
本郷	25	医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場(HND)	事前	1995.1.30 ~ 3.3	45
本郷	28	薬学部資料館(FPS)	事前	1995.7.24 ~ 9.1	600
本郷	35	経済学部前路面陥没	立会	1993.9.28 1994.5.14	-
本郷	45	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK3)	事前	1996.5.20 ~ 6.28	179
本郷	47	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK4)	事前	1996.5.20 ~ 6.28	3
本郷	48	医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期(HNⅡ)	事前	1996.11.5 ~ 97.1.31	525
本郷	54	総合研究棟(文・経・教・社研)(HES99)	事前	1999.5.24 ~ 11.2	1000
本郷	55	医学部附属病院第2中央診療棟(2中)	事前	1999.10.12 ~ 00.2.25 2001.7.23 ~ 02.12.19	4017
本郷	60	医学部附属病院基幹整備外構施設等(HWK6)	事前	2000.9.21 ~ 11.14	200
本郷	65	法学系総合研究棟(LS03)	事前	2003.2.17 ~ 4.18	946
本郷	66	薬学系総合研究棟1期(YGS01)	事前	2002.8.1 ~ 03.2.28	1260
本郷	66	薬学系総合研究棟2期(YGS04)	事前	2004.7.26 ~ 8.4 2004.11.17 ~ 05.2.4	540
本郷	68	インキュベーション施設(INC)	事前	2003.3.6 ~ 6.7	1051
本郷	74	医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期(HHN308)	事前	2008.4.1 ~ 8.1	550
本郷	76	ベンチャープラザ(HVP06)	事前	2006.3.6 ~ 5.16	760
本郷	78	情報学環・福武ホール(HJF06)	事前	2006.6.5 ~ 12.8 2007.2.5 ~ 23	1766
本郷	81	経済学研究科学術交流棟(HEA07)	事前	2008.3.17 ~ 7.11、9.11 ~ 24、 2009.2.2 ~ 10	433
本郷	82	懐徳門(HKM07)	事前	2007.6.20 ~ 7.20	34
本郷	91	医学部附属病院立体駐車場(HHP09)	事前	2009.12.13 ~ 2010.2.25	3033.8
本郷	92	学生支援センター(HGG09)	事前	2009.7.21 ~ 7.30	440
本郷	93	伊藤国際学術交流センター(H7109)	事前	2009.7.30 ~ 2010.2.12 2010.5.17 ~ 5.31	1710
本郷	97	基幹整備(流域⑧排水)工事(HKS09)	事前	2010.3.3 ~ 3.19 2010.11.29 ~ 12.6	67.6
本郷	99	法学部3号館増築工事(HLS10-1・2)	事前	2010.7.20 ~ 8.23 2011.1.18 ~ 26	328

I-1表 調査地点一覧

『本郷區史』には、太田道灌の領地境の橋の存在が『改撰江戸志』（原本失）に、『新撰東京名所図会』には「別れの橋」として記載されている。これによると「別れの橋趾、本郷四丁目通街、勸業場本郷館の辺、今の燕楽軒辺、は地層やや低く、弓形に凹みを印す。その凹める所一條の小渠、上に橋を架し、別れの橋といひきとぞ、橋北五丁目の通りを見返り坂と呼び、橋南三丁目の通りを見送り坂と唱へしとか…」と橋および小川（その後、下水となっている）が記録されている（本郷區役所 1937）。

（2）歴史的環境

発掘調査で出土した遺構、遺物は、近代～江戸時代にかけて構築、使用、廃棄されたものであったため、当該期における本地点の歴史的環境について略説したい。

江戸時代

当該地点を描いた最も早い絵図は、寛永 19～20（1642～43）年に描かれた『寛永江戸全図』（白杵市教育委員会蔵）、正保元（1644）年に描かれた『正保江戸図』であるが、両者ともほぼ同様に描かれている。現在の本郷三丁目交差点の北東側には、本郷通り（旧中山道）沿いに町が並んでおり、南から東西に区切られた小路ごとに本郷四丁目、同五丁目、同六丁目に該当するものと考えられる。町の東側には日影通りと呼ばれた南北筋の小路があるが、絵図では町と背中合わせに「大森半七同心」と書かれた屋敷地が確認される。この東側には小路を挟んで「寺」、「近藤登之助同心」と記されている。町と小路の位置関係から本調査地点は、この近辺であろうと推定される（I-2 図）。

これら同心地は、明暦 3（1657）年の振袖火事を契機に、第 4 代藩主前田光高の正室清泰院の死後、替地として居住していた牛込邸が上地となり、代地として駒込邸と共に本郷邸南側に拝領した 2 万坪である。以後、加賀藩本郷邸として幕末を迎えるが、この間天和 2（1682）年に起こった八百屋お七の火災を境に本郷邸は下屋敷から上屋敷となる。当該地は現存している元禄期（1688～1703）以降の本郷邸の絵図面には、いずれも長屋と思われる建物が描かれており、加賀藩本郷邸の詰人空間であったことが窺える（I-3 図）。

近代

加賀藩本郷邸は、明治 4（1871）年に明治政府に収公されるが、藩邸の西南隅の 15,078 坪は前田家の私邸として継続利用されている。明治期の前田侯爵邸の土地利用は、明治 16 年陸軍参謀本部による「東京府武蔵國本郷區本郷本富士町近傍」からある程度看取できる（I-4 図）。その後、大正 15（1926）年、関東大震災後の東京帝国大学本郷キャンパス拡充のため、その要請に応えた前田家は邸地と駒場にあった農学部および代々木演習林を交換することになり、昭和 3（1928）年に移転が完了した。

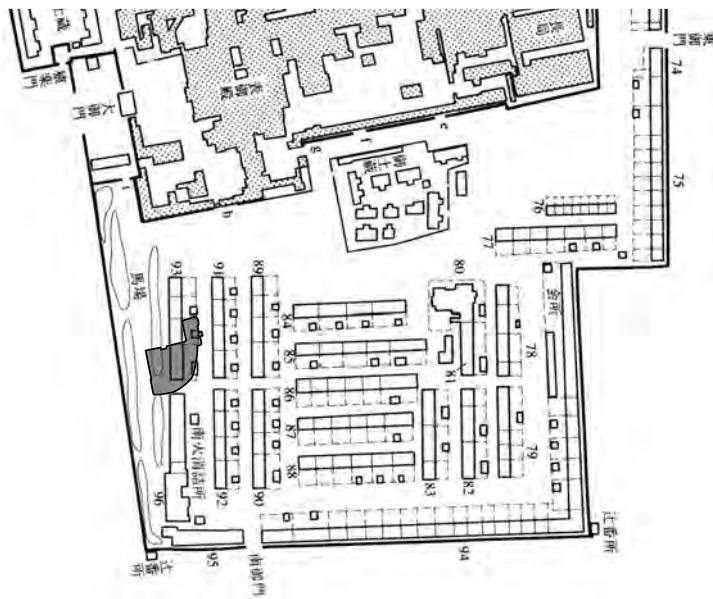
この間、当該地付近には明治天皇の行幸を仰ぐための邸として、後に「懷徳館」と命名される和・洋館の建築が行われた。建築工事は、明治 35（1902）年に開始され、日露戦争時の中断を挟んで、明治 40（1907）年に竣工した。明治 43（1910）年に明治天皇、皇后、皇太子、皇太子妃の来臨が実現した。先述のように関東大震災後に大学用地となるが、懷徳館は昭和 20 年 3 月 10 日の太平洋戦争に伴うアメリカ軍の空襲によって和・洋館とも焼失した。現在の懷徳館は昭和 26 年に再建されたものである。

第 I 章 遺跡の位置と環境



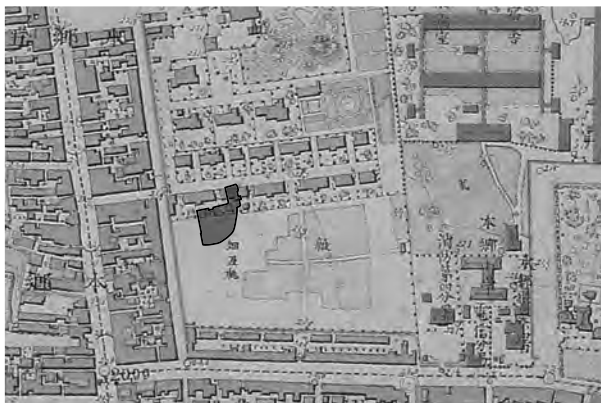
I-2 図 調査区の位置 (1)

(『寛永江戸全図』臼杵市教育委員会所蔵に一部加筆)



I-3 図 調査区の位置 (2)

(『江戸御上屋敷絵図』金沢市立図書館所蔵をトレースしたものに一部加筆)



I-4 図 調査区の位置 (3)

(『東京府武蔵國本郷區本郷本富士町近傍』陸軍省に一部加筆)

第Ⅱ章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

平成5(1993)年度に東京大学施設部から同埋蔵文化財調査室に、本郷構内南端に予定された総合研究資料館増築に伴う埋蔵文化財の調査に関する照会があった。増築予定地は東京都遺跡地図によると文京区47本郷台遺跡群(本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平]住居・[近]礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣[旧][縄][弥][古][平][近])内に位置しており、周知の遺跡として認知されている。当該地区においても遺跡の遺存状態に応じた埋蔵文化財調査を行う必要があった。

当該地は、前述したように大学以前の開発行為が行われず現在に至った歴史的経緯から江戸時代の加賀藩本郷邸、明治の懐徳館洋館に関連する遺構・遺物が、良好な状態で遺存していることが推定された。以上より、建築予定地域内全域について埋蔵文化財発掘調査を行うことが確認された。

第2節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法(Ⅱ-1図)

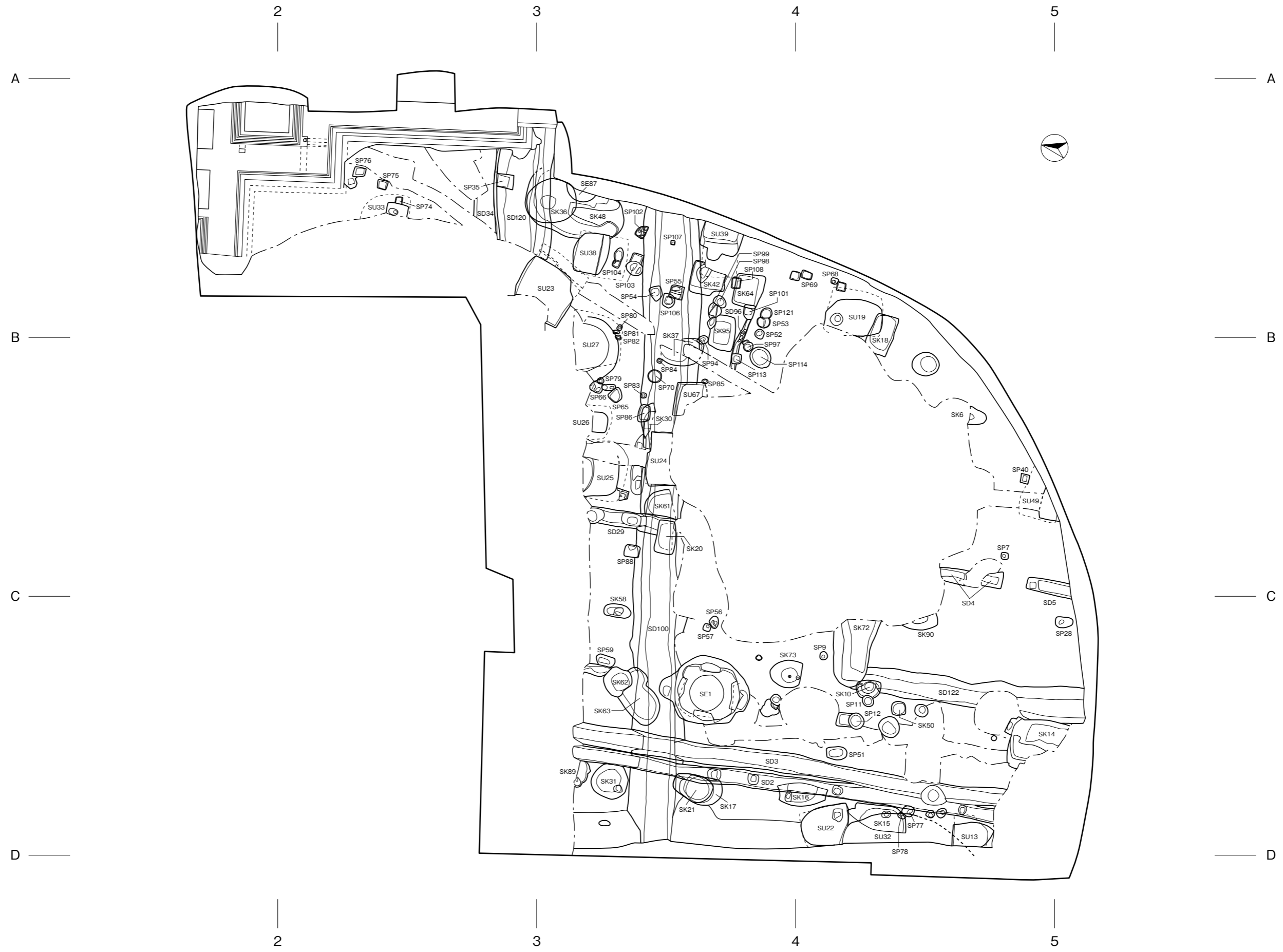
発掘調査は、建物増築工事に伴って根切りを行う範囲を対象にした。調査対象面積は670㎡である。調査は、グリッド法を用いて行い、調査区全域を周囲の建物軸に合わせて10×10mでグリッドを設定した。軸は世界測地系に対してN-12°44'35"-W振れている。グリッドの名称は、東西をアルファベット、南北を数字で表し、それぞれ東から西へ、北から南へ若い番号から付した。この交点に対して、A1、A2・・・とし、交点より南西の10×10mの範囲をA1区、A2区・・・のようにグリッドの設定を行った。

(2) 調査の経過

発掘調査は、平成6(1994)年2月14日から開始した。調査対象レベルまでの機械掘削を行った後、人力による発掘調査を行った。重機による機械掘削は調査区南西より開始し、3月2日に全域の掘削が終了した。

調査は、近代以降の盛土層を除去した後に西側を中心に確認された黒色硬化面(以下、「上面」と称す)とその終了後に人力で面下げを行った関東ローム層上面(武蔵野標準層位Ⅲ層、以下、「下面」と称す)の2枚の遺構確認面にて行った。その結果、調査区全域から近代から江戸時代の遺構が確認された。

機械掘削と並行して2月22日から遺構の調査を開始した。江戸時代の遺構の一部は、近代以降の前田侯爵邸、東京帝国大学、東京大学に伴う地業などで攪乱されていたが、おおむね遺存状態は良好であった。2月～3月上旬は降雨、降雪によって調査の進行が遅れたが、3月16日には上面の調査が終了し、下面まで面を下げ、同面の遺構調査を開始した。4月1日に全体写真の撮影、全体図作成が終了し、発掘調査は完了した。



II-1 図 博物館新館地点 全体図

また、調査区北東側において前田侯爵邸懐徳館洋館の基礎が良好な状態で確認されていたため、その一部を切り取り、総合研究博物館アプローチにて保存・展示を行うこととなった。発掘調査終了後これを行い、全てのフィールドワークは4月8日をもって終了した。

第3節 調査の概要（Ⅱ-1表）

本調査では、江戸時代旗本同心屋敷、加賀藩本郷邸、近代前田侯爵邸に伴うと考えられる遺構・遺物が確認できた。遺跡は、昭和43（1968）年に建築された北側の総合研究資料館（現総合研究博物館）建物および中央に昭和57（1982）年2月に行われた理学部温室の新営工事の際に掘られた攪乱によって大きく削平を受けていた。

江戸時代旗本同心屋敷、加賀藩本郷邸に伴うと推定される遺構は、調査区全域から確認された。遺構は、現在の本郷通りと同じ主軸を有するものと春日通りと同じ主軸を持つものと大別できた。これらの遺構確認面は前者は下面から、後者は上面から確認され、遺構主軸に時期差が認められた。また、下面の一部には焼土が広がっており、これに伴う遺物から下面は明暦3（1657）年以前の同心屋敷に、上面はそれ以降の加賀藩本郷邸に伴う遺構であろうと推定された。

近代は、前田侯爵邸の懐徳館洋館に伴う建物基礎、配管などが確認された。懐徳館は、明治天皇の行幸を仰ぐための邸として、建築された和・洋館である。建築工事は、明治35（1902）年に開始され、日露戦争時の中断を挟んで、明治40（1907）年に竣工し、太平洋戦争時の空襲によって昭和20（1945）年焼失した。

第4節 基本層序（Ⅱ-2図）

調査区の現表（Ⅱ-2図1層）は、標高23.7～23.2mで、緩やかに東から西に傾斜を有していた。現表は1982年本地点東に位置する温室建設の際に盛り土されたものであり、約60～100cmの厚さで調査区全域から確認された。この盛土の下は近代の層（2～7層）が堆積しており、懐徳館の下水に伴う土管の埋設溝は2層の上から切り込まれていた。また、2層上面はほぼ22.5mでフラットに確認され、明治後期から1982年までの地表面であったと推定される。

近代の盛土は、約1.5mの厚さで調査区全域から認められているが、その中央、標高21.5m付近には調査区南側を中心に比較的広域に硬化面が確認された（5層）。一時期の生活面であろうと推定されるが、江戸時代加賀藩邸に伴う生活面に盛土された上から確認されていることから、近代初頭、懐徳館が建設されるまでの比較的短期間使用された面であろうと推定された。

江戸時代の遺構は2枚の面から確認されている。上面は黒色土、下面はローム面である。上面は硬化しており、硬化面とそれを構築している層（8層）は調査区西側から南側に広がっていた。また、南側では焼土層が広がっており、この層には17世紀前～中葉の遺物が含まれていた（Ⅳ-11図）。これらから8層が盛られ、生活面として利用した年代は17世紀中葉頃と推定される。下面はローム面であるが、ロームは武蔵野標準層位Ⅲ層以上の自然堆積層は認められなかったことから、江戸時代初期に土地の大きな削平、造成している可能性が高い。

報告編

種別	番号	地区	年代	遺構図版 (Ⅲ- @)	遺物図版 (Ⅳ- @)	切り合い	備考
SE	1	C3	18後-19初	1	1	100より新	
SD	2	C3・4	17後-18前?	2、3		3,31,89,100より新、 16,17,21より旧	
SD	3	C3・4	17後-18前	2、3	1	100より新、2より旧	
SD	4	B4		1			
SD	5	B4・5・C5		1			
SK	6	B4		1			
SP	7	B4		全図(Ⅱ-1)			
SP	9	C4		全図(Ⅱ-1)			
SK	10	C4	17前	全図(Ⅱ-1)		11,72,122より新	
SP	11	C4	17?	全図(Ⅱ-1)		10より旧	
SP	12	C4		全図(Ⅱ-1)			
SU	13	C4		3		32より旧	
SK	14	C4・5	17後(第3四半)	3	1、2	122より新	
SK	15	C4		4		32より旧	
SK	16	C3・4		4		2より新	
SK	17	C3		4		2,21より新	
SK	18	A・B4	19前	5	2～4	19より新	
SU	19	A4	18前	5	4	18より旧	
SK	20	B3		6		29,100より新	
SK	21	C3		6		2より新、17より旧	
SU	22	C4	17後(第3四半)	6	4、5	32より旧	
SU	23	A2・3		7	5	38と重複	
SU	24	B3	17?	7		100より新	
SU	25	B3		7		26と重複	
SU	26	B3		8		25と重複	
SU	27	A・B3		8		81,82より新	
SP	28	C5		8			
SD	29	B3	17後	9		20より旧、61,100より 新	
SK	30	B3	18前	全図(Ⅱ-1)	6	86,100より新	
SK	31	C3		9		2より旧	
SU	32	C4	18後-19初	9	6	13,15,22より新、77,78 より旧	
SU	33	A2	17末-18初	10	7	74より新	
SD	34	A2・3	18後-19前	全図(Ⅱ-1)		120より新	
SP	35	A2	19前-中	全図(Ⅱ-1)		120より新	
SK	36	A2・3		10		48,87,120より新	
SK	37	B3		10		94,100より新	
SU	38	A3	18後	11	7～9	23と重複、48より新	
SU	39	A3		11			
SP	40	B4		全図(Ⅱ-1)			
SK	42	A3		11		100より新	
SK	48	A2・3		全図(Ⅱ-1)		36,48,87より旧、120より新	
SU	49	B4・5	18前	12		120より新	

Ⅱ-1表 遺構一覧表(1)

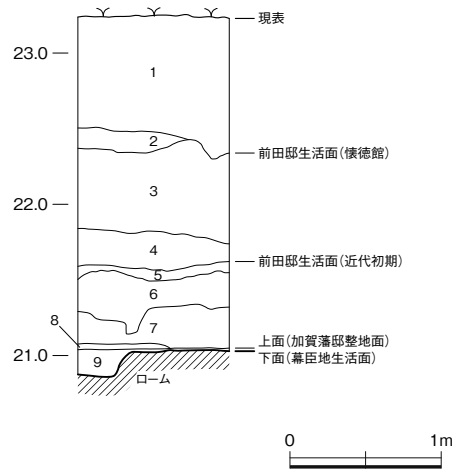
第Ⅱ章 調査の経緯と概要

種別	番号	地区	年代	遺構図版 (Ⅲ - @)	遺物図版 (Ⅳ - @)	切り合い	備考
SK	50	C4		12			
SP	51	C4	17 前	全図 (Ⅱ-1)			
SP	52	A・B3	19 前 - 中	全図 (Ⅱ-1)			
SP	53	A3		12		121 より新	99,106 と列状
SP	54	A3	近代 (戦前)	全図 (Ⅱ-1)	9、10	100 より新	
SP	55	A3	18 初?	全図 (Ⅱ-1)		100 より新	
SP	56	C3		12			
SP	57	C3		12			
SK	58	C3		13			59,88 と列状
SP	59	C3		13			55,88 と列状
SK	61	B3		13		29 より旧、100 より新	
SK	62	C3	17 前?	13		63 より旧	
SK	63	C3	17 前?	13		62,100 より新	
SK	64	A3	19 前	13		101,108 より旧	
SP	65	B3	17?	全図 (Ⅱ-1)			
SP	66	B3		全図 (Ⅱ-1)			
SU	67	B3	18 前?	14	10	100 より新	
SP	68	A4		全図 (Ⅱ-1)			
SP	69	A4		全図 (Ⅱ-1)			
SP	70	B3		全図 (Ⅱ-1)		100 より新	
SK	72	C4		14		10 より旧	
SK	73	C3・4		14			
SP	74	A2		15		33 より旧	
SP	75	A2		15			
SP	76	A2		全図 (Ⅱ-1)			
SP	77	C4		全図 (Ⅱ-1)		32 より新	
SP	78	C4		全図 (Ⅱ-1)		32 より新	
SP	79	A3		全図 (Ⅱ-1)			
SP	80	A3		全図 (Ⅱ-1)			
SP	81	A3		全図 (Ⅱ-1)		27 より旧	
SP	82	A3		全図 (Ⅱ-1)		27 より旧	
SP	83	A2		全図 (Ⅱ-1)			
SP	84	A3		全図 (Ⅱ-1)		100 より新	
SP	85	B3		全図 (Ⅱ-1)			
SP	86	B3		全図 (Ⅱ-1)		30 より旧、100 より新	
SE	87	A3		15		36,48 より新	
SP	88	B3	17 後?	全図 (Ⅱ-1)		100 より新	58,59 と列状
SK	89	C3		15		2 より旧	
SK	90	C4		15			
SP	94	A・B3		16		37 より旧、100 より新	
SK	95	A・B3	18 前	16	11	99 と重複	
SD	96	A・B3	(17～) 19?	16		101 より新、113 より旧	
SP	97	B3		16			
SP	98	A3	19 前 - 中	16		99 より旧	

Ⅱ-1 表 遺構一覧表 (2)

種別	番号	地区	年代	遺構図版 (Ⅲ- @)	遺物図版 (Ⅳ- @)	切り合い	備考
SP	99	A3		16		95 と重複、98 より新	53,106 と列状
SD	100	A ~ C3	17 前	17、18		1,2,3,20,24,29,30,37,42,54,55,61,63,67,70,84,86,88,94,102,103,106,107 より旧	
SP	101	A3		16		64 より新、96 より旧	
SP	102	A3		全図 (Ⅱ-1)		100 より新	
SP	103	A3	17?	全図 (Ⅱ-1)		100 より新	
SP	104	A3		全図 (Ⅱ-1)			
SP	106	A3		全図 (Ⅱ-1)		100 より新	53,99 と列状
SP	107	A3		全図 (Ⅱ-1)		100 より新	
SP	108	A3		全図 (Ⅱ-1)			
SP	113	A3		全図 (Ⅱ-1)		96 より新	
SP	114	B3		全図 (Ⅱ-1)			
SD	120	A2・3		18		34,35,36,48 より旧	
SP	121	A3		12		53 より新	
SD	122	C4・5		18		10,14 より旧、72 と重複	

Ⅱ-1 表 遺構一覧表 (3)



- 1 表土 (ローム粒・ロームブロック・粘土ブロック・瓦片含、粘性やや弱)
- 2 褐色土 (ロームブロック(1~20cm)・瓦片含、粘性弱、しまりやや弱)
- 3 褐色土 (ローム粒・ロームブロック含、粘土ブロック多含、粘性やや弱)
- 4 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック含、粘土ブロック多含、粘性やや弱)
- 5 暗褐色土 (礫(1cm)多含)
- 6 暗褐色土 (ロームブロック(2~3cm)多含、粘性・しまりやや弱)
- 7 茶褐色土 (ローム主体、黒色土・礫少含)
- 8 明褐色土
- 9 黒褐色土 (上部に淡黄褐色土含、粘性弱)

Ⅱ-2 図 土層柱状図

第三章 遺構

本地点は総合研究博物館に隣接する北側および中央部を大きく攪乱されており、それらによって江戸時代以前の遺構は大きく削平されていた。

本地点から出土した江戸時代から近代に比定される遺構は 100 基である。内訳は、溝 10 基、地下室 13 基、土坑 25 基、井戸 2 基、ピット 49 基、建物基礎 1 基であった。

第 1 節 江戸時代の遺構

SE1（遺構Ⅲ-1 図、遺物Ⅳ-1 図）

調査区北西側 C3 区、上面から確認された井戸である。北側で SD100 と重複しており、新旧関係は SE1 が新である。遺構の主軸は、ほぼ現在の春日通りと並行している。遺構全体の中央に位置するほぼ円形の井戸本体と上屋、井桁などの施設を埋設したと推定される付帯施設とで構成される。調査は安全を考慮し、確認面下 240cm までしか行えなかった。井戸本体は確認面で約 100cm のほぼ円形を呈するが、深度を増すにしたがって径が大きくなり、確認面下 2m 付近では東西 140cm、南北 130cm を計測する。

付帯施設は東西 240cm、南北約 260cm の歪な円形に、南北に 30～40cm の張り出しを有する形状を呈して確認された。フラットな坑底から、壁はほぼ垂直に立ち上がりっている。坑底は、隅丸方形の隅を大きく張り出す形状を呈し、坑底に接して角材一段分「井」状に組まれていた痕跡が確認できた。角材の木質は腐食しており、ほぼ空洞化していた。また、張り出し部は確認面から約 1m の深さで作られ、その中央付近には柱の痕跡が確認された。

覆土は、井戸本体は 3 層に分層され、確認面下約 1m 付近で井戸側の痕跡と推定される縦方向の土層堆積が一部確認された。付帯施設は 3 層に分層された。

遺物は、18 世紀後半から 19 世紀初頭の陶磁器類を中心にコンテナ箱 2 箱出土している。

SD2（遺構Ⅲ-2・3 図）

調査区西側 C3・C4 区、上面から確認された南北に貫く溝である。主軸方位は現在の春日通りと並行する。すぐ西側を本遺構と並行して SD3 が確認されているが、両者は切り合い関係にあり、新旧は SD2 が新である。この他に 4 ライン付近で SK16、SK17、SK21、北側で SK31、SK89、SD100 と切り合っており、SK16、SK17、SK21 より旧、他の遺構より新である。

溝は断面箱状から逆台形状を呈し、坑底や壁はやや凹凸がある。確認されている全長は 16.5m、幅は 50～60cm、深さは 40～50cm を計測する。溝底には 4 基の隅丸方形を呈する浅い落ち込みが確認されたが、間隔が不定であり、また柱痕なども確認されなかったことから溝底の凹凸とも考えられる。覆土は 3 層に分層される。

遺構の形状、規模、主軸方位など SD3 との共通点が多く、切り合い関係にあるため時代は前後するものの SD3 と同様の機能であった可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

SD3（遺構Ⅲ-2・3図、遺物Ⅳ-1図）

調査区西側 C3・C4 区、上面から確認された調査区を南北に貫く溝である。主軸方位は現在の春日通りと並行する。東側に SD2 が隣接、並行して確認されているが、両者は切り合い関係にあり、新旧は SD3 が旧である。この他に北側で SD100 を切っている。

溝は、断面やや広がる逆台形状を呈し、坑底や壁はやや凹凸が認められる。確認されている全長は 16.5m、幅は 60～90cm、深さは 40～50cm を計測し、幅は SD2 より若干広い。覆土は 2 層に分層され、ロームブロックを多く含んでいる。

遺物は、17 世紀後半から 18 世紀前半の陶磁器類が 10 点程度出土している。

SD4、SD5（遺構Ⅲ-1図）

調査区南側 B4・B5・C5 区、上面から確認された南北に主軸を持つ溝である。主軸方位は現在の春日通りと並行する。SD4 は攪乱によって遺構の中央および北側が削平、また、SD5 は南側が調査区域外に延びているため、共に全体の様子は復元できない。

遺構の形状、規模、主軸方位などから両遺構は、一連のもので同時存在していた可能性が高い。遺存している規模は、SD4 が長さ 240cm、幅 50～60cm、深さ 60～70cm、SD5 が長さ 180cm、幅 50cm、深さ 40～50cm を計測する。溝底は凹凸が激しく、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土はロームを多く含み、3 層に分層される。

また、調査区中央の大きな攪乱を挟んで、北側に同軸で確認された SD29 も関連している可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

SK6（遺構Ⅲ-1図）

調査区南東側 B4 区、上面から確認された小土坑である。北側を攪乱されているため全体の様子は窺えなかった。遺存している規模は東西 70cm、南北 60cm、深さは最大 60cm を計測する。溝底や壁は凹凸が激しい。覆土は 3 層に分層される。

遺物は出土していない。

SU13（遺構Ⅲ-3図）

調査区南西側 C4 区、上面から確認された地下室である。遺構の西側および南側、上部（土層Ⅰ層より上部）が博物館本館建設時の根切によって削平されているため全体の様子は復元できなかった。また、北側で SU32 と切り合い関係にあり、新旧は SU13 が旧である。開口部は遺存している北、東側が方形に整形されている。室部は東側にオーバーハングしているが、南側も坑底が張り出しを有しており、南側もオーバーハングしていた可能性が高い。

規模は室部で東西 120cm、南北最大 130cm、深さ 90cm、天井高が 60cm を計測する。坑底、壁面は比較的平滑に調整されており、北側の壁は坑底より垂直に立ち上がっている。遺存していた覆土は 3 層に分層され、1 層は焼土、破碎瓦が多く含まれていた。

遺物は、瓦片が多く出土している。

SK14（遺構Ⅲ-3図、遺物Ⅳ-1・2図）

調査区南西隅 C4・C5 区、上面から確認された土坑である。遺構の南側を近代以降の攪乱によって

削平され、全体の様子は窺えない。遺構の東側でSD122と切り合い関係にあり、新旧はSK14が新である。平面形はやや不整形で北側に小さい張り出しがつく。坑底や壁は、凹凸が顕著で、東側の壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がるが、西側では小さい段とその上部は開きながら立ち上がっており、状況が異なっている。規模は、東西200cm、南北は最大220cm、深さは最大90cmを計測する。土層は全体的にしまりが弱く、3層に分層される。

遺物は、17世紀後半の陶磁器類を中心にコンテナ箱1箱出土している。

SK15（遺構Ⅲ-4図）

調査区西側C4区、上面から確認された土坑である。遺構の西側でSU32と切り合い関係にあり、SK15が新である。また、遺構の上部から西部を近代以降の攪乱によって削平され、遺構全体の様子は窺えなかった。坑底、壁は比較的平滑で、坑底には長辺30cm、短辺25cm、深さ15cmを計測する小ピットが1基確認されている。壁は坑底から緩やかに立ち上がっている。規模は東西90cm、南北230cm、坑底までの深さは最大35cmを計測する。覆土は単層の暗灰褐色土である。本遺構とSK16、SK17はほぼ同一主軸上に位置しておりまた、規模や形状も近似していることから同時期に存在していた可能性が高い。

遺物は出土していない。

SK16（遺構Ⅲ-4図）

調査区西側C3・C4区、上面から確認された土坑である。遺構の東側でSD2と重複しており、新旧はSK16が新である。また、遺構の上部から東部を近代以降の攪乱によって削平され、遺構全体の様子は窺えなかった。坑底や壁は比較的平滑で、遺構の北西部に柱痕と思われる小ピットが確認されている。壁は坑底からやや開いて立ち上がっている。規模は東西90cm、南北190cm、坑底までの深さは最大50cmを計測する。覆土はピットを含めて3層に分層される。本遺構とSK15、SK17はほぼ同一主軸上に位置しておりまた、規模や形状も近似していることから同時期に存在していた可能性が高い。

遺物は出土していない。

SK17（遺構Ⅲ-4図）

調査区西側C3区、上面から確認された土坑である。遺構の東側でSD2、本遺構の下にSK21と重複しており、新旧は共にSK17が新である。坑底や壁はやや凹凸を有し、壁は南北側は坑底からやや開いて、東西側は垂直に立ち上がっている。規模は東西110cm、南北190cm、坑底までの深さは最大50cmを計測する。覆土は2層に分層される。本遺構とSK16、SK17はほぼ同一主軸上に位置しておりまた、規模や形状も近似していることから同時期に存在していた可能性が高い。

遺物は出土していない。

SK18（遺構Ⅲ-5図、遺物Ⅳ-2～4図）

調査区東側A4・B4区、上面から確認された長方形の土坑である。遺構の北東側でSU19と重複しており、新旧はSK18が新である。また、北東隅は近代以降の攪乱により遺構の一部が削平されている。坑底や壁は平滑に整形されており、フラットの坑底から壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は東西150cm、南北90cm、深さは120cmを計測する。覆土は5層に分層され、炭化物、焼土と共に自然

遺物、人工遺物が比較的多く含まれており、最終的には廃棄土坑として機能していたと思われる。

遺物は19世紀前半から中葉にかけての人工遺物、自然遺物を含めコンテナ箱5箱出土している。

SU19（遺構Ⅲ-5図、Ⅳ-4図）

調査区東側A4区、上面から確認された方形の地下室である。遺構の南西側でSK18と重複しており、新旧はSU19が旧である。また、北東隅は近代以降の攪乱により遺構の一部が削平されている。入口部は、崩落、削平されていた。しかし、覆土には入口部および天井部の一部が崩落したロームが確認されており、本来の入口は、遺構の北西隅側に東西90cm、南北150cm程度の長方形に構築されていたと推定される。坑底、壁は平滑に整形されており、壁はフラットな坑底から垂直に立ち上がる。規模は坑底で東西170cm、南北220cm、確認面からの深さは260cmを計測する。室部は南と東側に広がっていたと推定され、南側の奥行きは約80cmと推定される。また、坑底北東側には径50cmほどの円形のピットが確認され、昇降用の施設の痕跡であろうと思われる。覆土は10層に分層されるが、焼土、炭化物と共に破碎瓦、陶磁器などが出土しており、これらは火災に伴って廃棄されたとも考えられる。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器、瓦などコンテナ箱1箱出土している。

SK20（遺構Ⅲ-6図）

調査区北側B3区、上面から確認された長方形の土坑である。SD29とSD100と切り合っており、新旧は両遺構より新である。坑底は凹凸が顕著で、壁はやや開いて立ち上がっている。規模は東西140cm、南北80cm、確認面からの深さは最大120cmを計測する。覆土は3層に分層される。

遺物は出土していない。

SK21（遺構Ⅲ-6図）

調査区西側C3区、上面から確認された土坑である。遺構の東側でSD2、上部でSK17と重複しており、新旧は本遺構がSD2より新、SK17より旧である。坑底や壁は比較的平滑で、壁は南北側は坑底から緩やかに立ち上がっている。規模は東西100cm、南北150cm、坑底までの深さは最大50cmを計測する。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SU22（遺構Ⅲ-6図、遺物Ⅳ-4・5図）

調査区西側C4区、上面から確認された地下室である。遺構の南側でSU32と切り合っており、新旧はSU22が旧である。また、西側を総合研究博物館の本館、上部を近代以降の攪乱によって削平されていた。平面形はやや歪な方形を呈し、昇降用の施設の痕跡と思われるピットの位置、壁の成形状況などから入口部は遺構の南東隅に構築されていたと推定できる。入口部の規模は不明であるが、南西側でやや内側にすぼまっている状況から、東西半間（90cm）程度と思われ、西側、北側に室部が設けられていたと考えられる。また、坑底の南東側に東西50cm、南北40cm、深さ20cm程度のピットが構築されており、SU19と同様、昇降用施設の痕跡と推定している。坑底、壁は平滑に成形されており、壁はフラットな坑底より垂直に立ち上がっている。確認された規模は、東西160cm、南北180cm、確認面からの深さは最大190cmを計測する。土層は4層に分層される。

遺物は、17世紀第3四半期の陶磁器、土器、瓦類がコンテナ箱1箱出土している。

SU23 (遺構Ⅲ-7 図)

調査区北東側 A2・A3 区、上面から確認された地下室である。室部の東側、地下で SU38 と切り合い関係にあるが、新旧は不明である。また、遺構の室部中央から西側上部と入口、室部北西壁付近を近代以降の攪乱によって削平されており、遺構の全体は窺うことができなかった。室部の平面形は、長方形を呈するが、主軸は他の地下室群より東に振れている。坑底は東壁奥より手前 40～50cm 付近で一段下がっている。壁や坑底は比較的平滑で、壁は坑底より垂直に立ち上がっている。天井は東側一部が遺存していた。遺構の規模は、坑底で東西 250cm、南北 200cm、確認面からの深さは最大 200cm、天井の高さは坑底から 180cm を計測する。覆土は 6 層に分層されるが、その多くはローム土で構成される。

遺物は出土していない。

SU24 (遺構Ⅲ-7 図、遺物Ⅳ-5 図)

調査区北側 B3 区、上面から確認された地下室である。遺構の南半を近代以降の攪乱に、中央を土管埋設溝によって削平されており、遺構の全体を窺うことはできなかった。遺構の上部で SD100 と重複しており、新旧は SU24 が新である。遺構の平面形は、方形もしくは長方形を呈していたと推定される。壁、坑底は比較的平滑に整形されており、やや中央が凹んだ坑底より壁はほぼ垂直に立ち上がっている。遺存している遺構の規模は、東西 210cm、南北 110cm、確認面からの深さは最大 200cm を計測する。覆土は 6 層に分層されるが、各層には焼土粒子が含まれており、また、出土遺物も二次的な火熱を受けているものが含まれていることから、火災に伴う廃棄の可能性も考えられる。

遺物は 17 世紀の陶磁器類が 4 点出土している。

SU25 (遺構Ⅲ-7 図)

調査区北側 B3 区、上面から確認された地下室である。遺構の北半を近代以降の攪乱によって削平されている。東端で SU26 と切り合い関係にあるが、新旧は不明である。遺構の平面形は隅丸方形を呈していたと推定され、入口部は攪乱によって明確に確認できなかった。坑底から一端膨らみを持って立ち上がり、その上部は次第に窄まるような形状を呈している。坑底はほぼフラットに構築されるが、北側では半円形に約 20cm 落ち込んでいた。坑底、壁は凹凸が顕著で、平刃の工具痕が明瞭に観察された。遺存している遺構の規模は、東西 240cm、南北 170cm、確認面からの深さは最大で 140cm を計測する。覆土は 7 層に分層されるが、いずれもロームブロックやローム粒子が多く含まれている。また、1 層には自然遺物が多く確認された。

遺物は自然遺物の他には出土していない。

SU26 (遺構Ⅲ-8 図)

調査区北側 B3 区、上面から確認された小型の地下室である。遺構の北半を近代以降の攪乱によって削平されている。西端で SU26 と切り合い関係にあるが、新旧は不明である。平面形はやや歪な隅丸方形を呈し、入口から室部は東、南、西側に小さく膨らむ。室部の壁、坑底は凹凸が顕著であるのに対し、入口部は比較的平滑に整形されている。これらから SU26 は構築途中で廃棄された可能性も考えられる。遺存している規模は東西 130cm、南北 110cm、確認面からの深さは最大 190cm を計測する。また、入口部は東西 80cm、南北 60cm、室部までの深度は 120cm 程度であった。室部の高さは 80cm と低く人間が活動するには狭い。覆土は 3 層に分層される。

遺物は出土していない。

SU27（遺構Ⅲ-8 図）

調査区北東側 A3・B3 区、上面から確認された地下室である。遺構の北半を近代以降の攪乱によって削平されている。南側で SP81、SP82 と切り合い関係にあり、新旧は SU27 が新である。室部は南奥側に向かってやや窄まる様な不整な台形を呈し、袋状の室部からほぼ垂直に、最上の開口部は大きく開いて立ち上がっている。壁、坑底は凹凸が顕著で、特に壁は平刃の工具痕が明瞭に観察される。遺存している規模は東西 230cm、南北 220cm、確認面からの深さは最大 260cm を計測する。また、入口部は東西 260cm、南北 120cm、室部までの深度は 140cm 程度であった。室部の高さは 120cm を計測する。覆土は 4 層に分層されるが、いずれも強くしまっており、廃棄後に強くたたきしめられた可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

SP28（遺構Ⅲ-8 図）

調査区南端 C5 区、上面から確認された楕円形を呈するピットである。規模は東西 40cm、南北 70cm、確認面からの深さは 30cm を計測する。覆土は 2 層に分層されるが、1 層は柱痕である可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

SD29（遺構Ⅲ-9 図）

調査区北中央 B3 区、上面から確認された溝状遺構である。北側を近代以降の攪乱によって削平されている。南側で SK20、SK61、SD100 と重複しており、新旧は SK20 より旧、SK61、SD100 より新である。坑底には 2 基のピットが確認されており、ピット間は約 170cm である。中央の攪乱を挟んだ南側同一列上に SD4、SD5 が存在し、これらを含めて塀などの施設であった可能性が想定できる。遺存している規模は、長さ 330cm、幅 60～70cm、確認面からの深さ最大 70cm、ピットの深さは 30cm を計測する。壁、坑底はやや凹凸を有する。覆土は 3 層に分層される。

遺物は 17 世紀後半の陶磁器類が 20 数点出土している。

SK30（遺構Ⅲ-9 図、遺物Ⅳ-6 図）

調査区北側 B3 区、上面から確認された土坑である。SP86、SD100 と切り合い関係にあり、新旧は両遺構よりも SK30 が新である。また、遺構の上部、南を攪乱によって削平されている。壁、坑底は比較的平滑に調整されている。遺存している遺構の規模は、東西 140cm、南北 60cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は 18 世紀前半の陶磁器類が 30 点程度出土している。

SK31（遺構Ⅲ-9 図）

調査区北西側 C3 区、上面から確認された円形を呈する土坑である。SD2 と切り合い関係にあり、新旧は SK31 が旧である。遺構の規模は、直径 140cm、確認面からの深さは最大 60cm を計測する。壁、坑底はやや凹凸を有し、鍋底状の坑底から開いて立ち上がる。遺構の南側に深さ 10cm 程度の小ピットを伴っている。覆土は 5 層に分層される。

遺物は出土していない。

SU32（遺構Ⅲ-9 図、遺物Ⅳ-6 図）

調査区西側 C4 区、上面から確認された地下室である。西側を総合研究博物館の本館の根切りによって削平されている。また、北側で SU22、南側で SU13、上部で SK15、SP77、SP78 と重複しており、新旧は SP77、SP78 より旧、SU13、SK15、SU22 より新である。調査は安全上、確認面より 220cm までしか行うことができず、坑底を確認することができなかった。遺存している規模は、東西 110cm、南北 430cm を計測する。壁面は凹凸を有し、工具痕が明瞭に観察される。覆土は 8 層に分層されるが、各層は東側から西側にかけて傾斜を有しており、SU32 は西側に広がっていたと推定される。3 層は焼土層で、二次的に火熱を受けた瓦、陶磁器片が多く含まれていた。

遺物は 18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけての瓦片が多く出土し、陶磁器類はコンテナ箱 1 箱出土している。

SU33（遺構Ⅲ-10 図、遺物Ⅳ-7 図）

調査区北東 A2 区、上面から確認された地下室である。SP74 と重複しており、新旧は SU33 が新である。西側を博物館本館の根切りによって削平されており、遺構全体の様子は窺えなかった。入口部の形状は方形もしくは長方形を呈していたと推定される。室部は入口部より東側では小さく、北側では大きく張り出している。南東隅には角が構築されるが、北東隅は緩やかなカーブに形作られている。規模は入口部で東西 40cm、南北 80cm、確認面からの深さは最大 230cm、坑底から室部天井までの高さは 120～150cm を計測する。壁、坑底はやや凹凸を有し、壁の一部には工具痕が確認される。入口部直下の坑底には、東西 30cm、南北 40cm、深さ 10cm を計測する小ピットが構築されており、昇降用施設の可能性が考えられる。覆土は 7 層に分層されるが、1 層が大きく室部に流れ込んだ状態で確認され、これは天井の一部が崩落したと推定される。

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭までの陶磁器類を中心にコンテナ箱 1 箱出土している。

SK36（遺構Ⅲ-10 図）

調査区北東 A2・A3 区、上面から確認された円形を呈する土坑である。SK48、SE87、SD120 と重複しており、新旧は SK36 がすべてより新である。壁や坑底は比較的平滑に成形されている。坑底から壁は明瞭な境はなく、全体的に鍋底状を呈している。規模は、東西 170cm、南北 200cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。覆土はほぼロームで構成される黄褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SK37（遺構Ⅲ-10 図）

調査区北東側 B3 区、上面に確認された土坑である。遺構の中央を懐徳館に伴う土管の埋設溝に、東側を近代以降の攪乱によって削平され、遺構全体の様子を窺うことができなかった。また、SP94、SD100 と重複しており、新旧は SK37 が新である。遺存している規模は、東西 100cm、南北 160cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。遺構の壁や坑底は比較的平滑に整形されている。坑底から壁は明瞭な境はなく、全体的に鍋底状を呈している。覆土は 2 層に分層され、下層には焼土、上層には灰が確認されており、炉などの性格が想定される。

遺物は出土していない。

SU38（遺構Ⅲ-11 図、遺物Ⅳ-7～9 図）

調査区北東側 B3 区、上面から確認された地下室である。遺構の北東側で SK48、室部北西隅で SU23 と重複しており、新旧は SK48 より新、SU23 とは不明である。遺構の形状は入口部は東西方向に主軸を有する隅丸長方形、室部は南北方向に主軸を有するやや歪な長方形を呈している。また、坑底中央には南が低くなるように 10cm 程度の小さい段が構築されている。入口は室部の北側に構築されており、北、東、西の壁面は室部と一体となっている。壁、坑底は比較的平滑に成形されている。遺構の規模は、入口部が東西 150cm、南北 130cm、坑底が東西 160cm、南北 200cm、確認面からの深さは最大 290cm を計測する。土層は 4 層に分層され、上～中層から遺物が多く出土している。

遺物は本遺跡で確認された遺構では最も多く出土しており、瓦、陶磁器類、自然遺物など 18 世紀後半を中心にコンテナ箱 12 箱出土している。

SU39（遺構Ⅲ-11 図）

調査区東側 A3 区、上面から確認された地下室である。東側が調査区域外にあり、遺構全体の様子は窺うことができなかった。遺構は、隅丸方形の西側に半円形の張り出しを持つ入口部から室部はやや軸を変えて西側に広がっている。坑底には東側が低くなるように 10cm 程度の小さい段が構築されている。こうした形態は SU38 と同様であり、出土遺物からの推定はできないものの両遺構は共存していた可能性もあろう。遺存している規模は、入口部で東西 100cm、半円形の張り出しを含めると 130cm、南北 160cm、室部で東西 210cm、南北 140cm、確認面からの深さは最大 180cm を計測する。壁、坑底はやや凹凸を有し、壁は坑底から若干開きながら立ち上がっている。覆土は 3 層に分層される。

遺物は出土していない。

SK42（遺構Ⅲ-11 図）

調査区東側 A3 区、上面から確認された土坑である。遺構の北側で SD100 と重複しており、新旧は SK42 が新である。また、本遺構の東に位置する SU39 調査時に起きた天井部崩落と共に遺構の南東側一部が落損した。落損部分の詳細は不明であるものの、南西隅の一部に歪みを有する方形を呈しており、溝底やや北側には浅い落ち込みが確認された。遺構の規模は、東西 130cm、南北 140cm、確認面からの深さは最大 30cm を計測する。坑底や壁は比較的平滑に整形され、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 7 層に分層され、最下層 7 層が純焼土層である他焼土、炭化物、灰などが確認されており、炉址の可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

SU49（遺構Ⅲ-12 図）

調査区南端 B4・B5 区、上面から確認された地下室である。遺構の南東側が調査区域外にあり、全体の様子は窺うことができなかった。また、遺構の上部を懐徳館に関連した配水管の埋設溝に削平されている。遺構の平面形は入口部、室部共に方形あるいは長方形と推定されるが、調査区内では北西側の 1 コーナーが確認されたにすぎない。室部は入口部より北側に張り出しを有している。遺存している規模は、入口部で東西 120cm、南北 90cm、室部で東西 200cm、南北 150cm、確認面からの深さは最大 280cm を計測する。天井は西から東に傾斜を有するが、室部も同様にやや東に傾斜を有し、室部の天井までの高さを調整していると推定される。壁は西壁から北壁西側では平滑に調整されているが、北壁東側では凹凸が顕著で、工具痕が明瞭に確認できる。地下室構築途中で廃棄した可能性も

あろう。覆土は4層に分層され、各層は西側から東側に傾斜を有している。

遺物は、18世紀前半を中心とした陶磁器類が30数点出土している。

SK50（遺構Ⅲ-12 図）

調査区西側 C4 区、上面から確認された土坑である。南側上部を攪乱されている。平面形は円形と隅丸方形の中間的な形態を呈している。規模は東西 55cm、南北 50cm、確認面からの深さは最大 20cm を計測する。壁、坑底はやや凹凸を有し、壁は坑底からやや開いて立ち上がる。覆土は2層に分層されるが、下層には骨粉が広がっており、一部頭骨と肢骨と推定される動物骨が出土したが、脆弱で取り上げることができず、同定不能であった。

骨以外の遺物は出土していない。

SP53（遺構Ⅲ-12 図）

調査区東側 A3・B3 区、上面から確認されたピットである。SP121 と重複しており、SP53 が新である。平面形は円形を呈しており、坑底北側には平石を配していることから何らかの施設の基礎であった可能性が高い。付近には石を配した SP99、SP106 が同一列状にほぼ1間間隔で確認され、これらは塀列などを構成していた可能性もある。規模は径 50cm、確認面からの深さは 40cm を計測する。壁、坑底は比較的平滑に調整されている。覆土は褐色土単層である。

遺物は瓦片が少量出土している。

SP54（遺構Ⅲ-12 図、遺物Ⅳ-9・10 図）

調査区東側 A3 区、上面から確認されたピットである。SD100 と重複しており、SP54 が新である。平面形はやや歪な方形を呈し、遺構の規模は東西 60cm、南北 50cm、確認面からの深さは、最大 30cm を計測する。壁、坑底は比較的平滑で、壁は坑底より緩やかに立ち上がっている。

遺物は、近代戦前までの陶磁器類を中心にコンテナ箱 1 箱出土している。

SP57（遺構Ⅲ-12 図）

調査区北西側 C3 区、上面から確認されたピットである。平面形は方形を呈し、遺構の規模は一辺 30cm、確認面からの深さは 30cm を計測する。壁、坑底は平滑で、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は2層に分層されるが、1層は柱痕と思われる。本遺構周囲にはこれと伴う柱痕を持つ遺構は確認できなかった。

遺物は出土していない。

SK58（遺構Ⅲ-13 図）

調査区北側 C3 区、上面から確認された長楕円形の土坑である。遺構の規模は長径 100cm、短径 50cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。壁、坑底は凹凸が顕著で、最も深い中央部やや西側では軟質土が確認された。柱痕の可能性はある。本遺構は、SP59、SK58、SP88 と東西に連なるピット列を構成している。覆土は2層に分層される。

遺物はかわらけが1点出土している。

SP59（遺構Ⅲ-13 図）

調査区北西側 C3 区、上面から確認された楕円形の土坑である。遺構の規模は長径 70cm、短径 40cm、確認面からの深さは最大 20cm を計測する。壁、坑底は比較的平滑で、壁は坑底から緩やかに立ち上がっている。本遺構は、SP59、SK58、SP88 と東西に連なるピット列を構成している。覆土は 2 層に分層される。

遺物は出土していない。

SK61（遺構Ⅲ-13 図）

調査区北側 B3 区、上面から確認された土坑である。SD29、SD100 と切り合い関係にあり、新旧は SD29 より旧、SD100 より新である。また、南側を近代以降の攪乱によって削平されており、遺構全体の様子を窺うことができなかった。遺存している規模は、東西 110cm、南北 120cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。遺構の坑底や壁は比較的平滑に整形されており、壁は鍋底状の坑底より緩やかに開いて立ち上がっている。覆土は、暗灰褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SK62、SK63（遺構Ⅲ-13 図）

調査区北西側 C3 区、下面から確認された土坑である。両遺構は切り合い関係にあり、新旧は SK63 が新である。また、SK63 は SD100 を切って構築されている。平面形は SK62 がやや歪な円形、SK63 が不整形を呈しており、両遺構とも浅い遺構である。遺存している規模は、SK62 が東西 120cm、南北 110cm、確認面からの深さは最大 30cm、SK63 が長軸 210cm、短軸 130cm、確認面からの深さは最大 30cm を計測する。両遺構とも壁、坑底は比較的平滑で、坑底より壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は SK62 が単層、SK63 は 2 層に分層される。

両遺構とも 17 世紀前半の陶磁器類が数点出土している。

SK64（遺構Ⅲ-13 図）

調査区北東側 A3 区、上面から確認された方形の土坑である。SP101、SP108 と重複関係にあり、新旧は SK64 が旧である。遺構の規模は、東西 130cm、南北 110cm、確認面からの深さは最大 60cm を計測する。壁や坑底は凹凸が顕著で、坑底は被熱により硬化していた。壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 2 層に分層されるが、上層はやや軟質な暗灰褐色土であったのに対して、下層は焼土を含むしまりの極めて強い灰褐色土を呈していた。これらの状況から炉あるいはカマド施設であった可能性が高い。

遺物は 19 世紀前半の陶磁器類が少量出土している。

SU67（遺構Ⅲ-14 図、遺物Ⅳ-10 図）

調査区北東部 B3 区、上面から確認された方形あるいは長方形を呈すると推定される地下室である。SD100 と重複関係にあり、新旧は SU67 が新である。また、遺構の南、西側を近代以降の攪乱によって削平されており、全体の様子は窺えなかった。遺存している規模は、東西 130cm、南北 120cm、確認面からの深さは最大 120cm を計測する。坑底や壁は若干凹凸はあるものの平滑に調整され、坑底から壁は垂直に立ち上がっている。また、北東、南東隅は矩形に成形されている。覆土は 7 層に分層され、中層以上には焼土が混入していた。

遺物は図化した 2 点が出土したが、17 世紀末～18 世紀前葉の製品と推定される。特に 2 の丹波系

掘鉢は坑底付近からほぼ完形で出土している。

SK72 (遺構Ⅲ-14 図)

調査区中央 C4 区、上面から確認された土坑である。SP10 と切り合い関係にあり、新旧は SK72 が旧である。また、遺構の東を近代以降の攪乱によって削平されており、全体の様子は窺えなかった。遺存している規模は東西 260cm、南北 180cm、確認面からの深さは最大 25cm を計測する。坑底や壁は凹凸が顕著で、壁は坑底から緩やかに立ち上がっている。覆土は黒褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SK73 (遺構Ⅲ-14 図)

調査区西側 C3・C4 区、上面から確認された土坑である。平面形は円形の一部がカットされたような形状を呈し、規模は東西 110cm、南北 120cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。壁面や坑底は凹凸が顕著で、壁は坑底からやや開いて立ち上がっている。坑底には複数の小ピットが確認されたが、本遺構に伴う施設とは断定できなかった。覆土は 4 層に分層される。

遺物は出土していない。

SP74 (遺構Ⅲ-15 図)

調査区北東側 A2 区、上面から確認されたピットである。平面形は方形もしくは長方形を呈したと推定されるが、西側を SU33 に切られている。遺存している規模は、東西 30cm、南北 25cm、確認面からの深さは最大 20cm を計測する。壁や坑底は比較的平滑で、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は出土していない。

SP75 (遺構Ⅲ-15 図)

調査区北東側 A2 区、上面から確認されたピットである。平面形は方形を呈している。規模は、一辺 30cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。壁や坑底は比較的平滑で、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は出土していない。

SE87 (遺構Ⅲ-15 図)

調査区北東側 A3 区、上面から確認された井戸である。平面形は円形を呈していたと思われる。東側が調査区域外にあり、遺構全体の様子は復元できなかった。遺存している規模は、東西 40cm、南北 120cm であるが径 130cm 程度の規模であったと思われる。遺構は調査区際に位置するため、調査は確認面下 100cm までしか行うことができなかった。壁面は平滑の調整されていた。

遺物は出土していない。

SK89 (遺構Ⅲ-15 図)

調査区北西側 C3 区、上面から確認された土坑である。東側で SD2 と重複しており、新旧は SK89 が旧である。また、北側を博物館本館に削平されており、遺構全体の様子は窺えなかった。平面形はやや歪な楕円形を呈していたと思われ、遺存している規模は東西 100cm、南北 50cm、確認面からの

深さは最大 25cm を計測する。坑底や壁は凹凸が顕著で、壁は坑底から緩やかに立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SK90（遺構Ⅲ-15 図）

調査区中央 C4 区、上面から確認された土坑である。東側を近代以降の攪乱によって削平されている。遺存している規模は東西 50cm、南北 140cm、確認面からの深さは最大 25cm を計測する。遺構の壁や坑底はやや凹凸があり、壁は坑底からやや開いて立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は出土していない。

SP94（遺構Ⅲ-16 図）

調査区東側 A3・B3 区、上面から確認されたピットである。SK37 と SD100 と切り合っており、新旧は SK37 より旧、SD100 より新である。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は長径 45cm、短径 30cm、確認面からの深さは最大 10cm を計測する。覆土は暗灰褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SK95（遺構Ⅲ-16 図、遺物Ⅳ-11 図）

調査区東側 A3・B3 区、上面から確認された土坑である。北東側で SP99 とわずかに重複しているが、新旧は判断できなかった。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西 140cm、南北 100cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は 18 世紀前半の陶磁器類を中心にコンテナ箱 1 箱出土している。

SD96（遺構Ⅲ-16 図）

調査区東側 A3・B3 区、上面から確認された溝状遺構である。SP101、SP113 と重複しており、新旧は SP101 より新、SP113 より旧である。また西側を懐徳館から流下する土管溝によって切られる。遺構は東西方向に主軸を有するがやや蛇行する。規模は長さ 210cm、幅 30cm、確認面からの深さは最大 10cm を計測する。覆土は暗灰褐色土単層である。

遺物は 19 世紀の陶磁器を中心に 10 数点出土している。

SP97（遺構Ⅲ-16 図）

調査区東側 B3 区、下面から確認されたピットである。平面形は円形を呈し、規模は径 35cm、確認面からの深さは最大 25cm を計測する。覆土は黒褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SP98（遺構Ⅲ-16 図）

調査区東側 A3 区、上面から確認されたピットである。東側で SP99 を重複しており、新旧は SP98 が旧である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径 50cm、短径 40cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。覆土は暗灰褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SP99（遺構Ⅲ-16 図）

調査区東側 A3 区、上面から確認されたピットである。西側で SP98 を重複しており、新旧は SP99 が新である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径 60cm、短径 50cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。坑底には根石と推定される切石が配されており、石のほぼ中央には 3～4 寸の柱痕が確認された。同様に根石を持つピットに SP53、SP106 があり、本遺構を含めて列状に 1 間間隔で確認されていることからこれらは一連の塀状の施設であろうと推定される。覆土は暗灰褐色土単層である。遺物は出土していない。

SD100（遺構Ⅲ-17、18 図）

調査区北側 A3・B3・C4 区、下面から確認された溝である。遺構は東西方向に遺跡を横断しており、その主軸方位は現在の本郷通り（旧中山道）に沿っており、上面から確認された現在の春日通りと沿った遺構群とは異なっている。切り合い関係においても本遺構は重複関係を持つ全ての遺構（SE1、SD2、SD3、SK20、SU24、SD29、SK30、SK37、SK42、SP54、SP55、SK61、SK63、SU67、SP70、SP84、SP86、SP88、SP94、SP102、SP103、SP106、SP107）に切られ、本地点で確認された遺構では最も古い段階のものであった。

溝の断面は、逆台形あるいは上部が開く箱形を呈しており、同様の形態は屋敷境と推定している東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院設備管理棟地点 1 号溝（東京大学遺跡調査室 1990）、同看護師宿舎地点 SD206 などに見られる。また、約 6m 北方に同じ構造、主軸を持つ SD120 が確認されており、2 基の溝状遺構は同時存在していた可能性が高い。確認されている遺構の規模は、長さ 24.5m、確認面の幅最大 190cm、溝底幅 60～80cm、確認面からの深さは最大 120cm を計測する。溝底、壁はやや凹凸があり、溝底の標高も凹凸により 20.3～20.5m を計測し、顕著な傾斜は確認されなかった。覆土は 8 層に分層され、下層がローム土を主体にする層、上層は黒褐色土を主体にする層が堆積しており、上層の 3 層には焼土が多く含まれていた。

遺物は 17 世紀前半の陶磁器小片が 20 点程度出土している。

SP101（遺構Ⅲ-16 図）

調査区東側 A3 区、上面から確認されたピットである。東側で SK64、西側で SD96 と重複しており、新旧は SK64 より新、SD96 より旧である。平面形はやや歪な長方形を呈し、規模は長辺 55cm、短辺 40cm、確認面からの深さは最大 60cm を計測する。覆土は 2 層に分層される。

遺物は出土していない。

SD120（遺構Ⅲ-18 図）

調査区北東側 A2・A3 区、下面から確認された溝である。遺構は東西方向に約 6m 南側にある SD100 と同軸で構築されている。SD34、SP35、SK36、SK48 と重複しており、新旧はその全てより旧である。また、東側が調査区域外、西側を博物館本館によって削平されており、全体の様子は窺えなかった。溝の断面は上部が開いた逆台形状を呈しているが、隣接する SD100 より開きが大きい。確認されている遺構の規模は長さ 510cm、確認面での上端幅 210cm、溝底幅 100cm、確認面からの深さは最大 100cm を計測する。壁、溝底は凹凸が顕著に認められ、壁は溝底から開きながら立ち上がっている。覆土は 7 層に分層されるが、下層にローム土を主体とする層、上層に焼土が含まれる層と SD100 と類似した層位が確認された。

遺物は出土していない。

SP121（遺構Ⅲ-12 図）

調査区東側 A3・B3 区、上面から確認されたピットである。SP53 と西側で重複しており、SP121 が新である。平面形はほぼ円形を呈しており、規模は径 40cm、確認面からの深さは 40cm を計測する。壁、坑底は比較的平滑に調整されている。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SD122（遺構Ⅲ-18 図）

調査区南西側 C4・C5 区、上面から確認された溝状遺構である。主軸は東側にある SD4、SD5、西側にある SD2、SD3 と同軸である。SK10、SK14、SK72 と重複しており、新旧は SK10、SK14 より旧、SK72 との新旧は確認できなかった。また、南側は調査区域外に延びており、全体様子は窺えなかった。規模は長さ 900cm、幅 90～140cm、確認面からの深さは最大 20cm 程度であった。北側で重複している SK72 は本遺構とほぼ直角に東側に折れ、その深度や覆土も近似していたことから両遺構は同一である可能性もある。壁、溝底は比較的平滑に成形されている。

遺物は出土していない。

第2節 近代（懷徳館関連）の遺構

コンクリート、レンガ基礎遺構（遺構Ⅲ-19・20 図）

調査区北東側には、コンクリートとレンガで構築された基礎遺構の一部が確認された。これは位置、構造などから明治40年に天皇の行幸を仰ぐために前田利為によって作られた『懷徳館』洋館の基礎であると考えられる。

基礎遺構は、調査区北東隅から確認されたのみで、全体の様子は窺うことができなかった。しかし、現存する平面図と対応させると洋館正面アプローチから南西隅にいたる外周部分であると推定された（詳細はV章参照）。したがって、クランク状に折れる基礎遺構より北東側が建物内部であると判断される。

基礎は最下部まで確認できなかったが、洋館本体部分で3段のコンクリートとその上の26層のレンガ積みで構成されていた。コンクリート部分は、建物外側では3段、内側では最上段のみ確認されている。最下段のコンクリートは掘削したロームに木枠などを用いずにそのまま流し込んでおり、その厚さは確認できなかったが、2段目、3段目のコンクリートは45cm（15寸）の高さを有していた。1段のコンクリートは木枠を設けて3回に分けて流し込みを行っており、約15cmごとに横位に亀裂が確認された。コンクリートは直径1～3cm程度の砂利の間にセメントが含まれるが、可視的には現代の割合よりも大型の砂利が多めに用いられている印象を受ける。

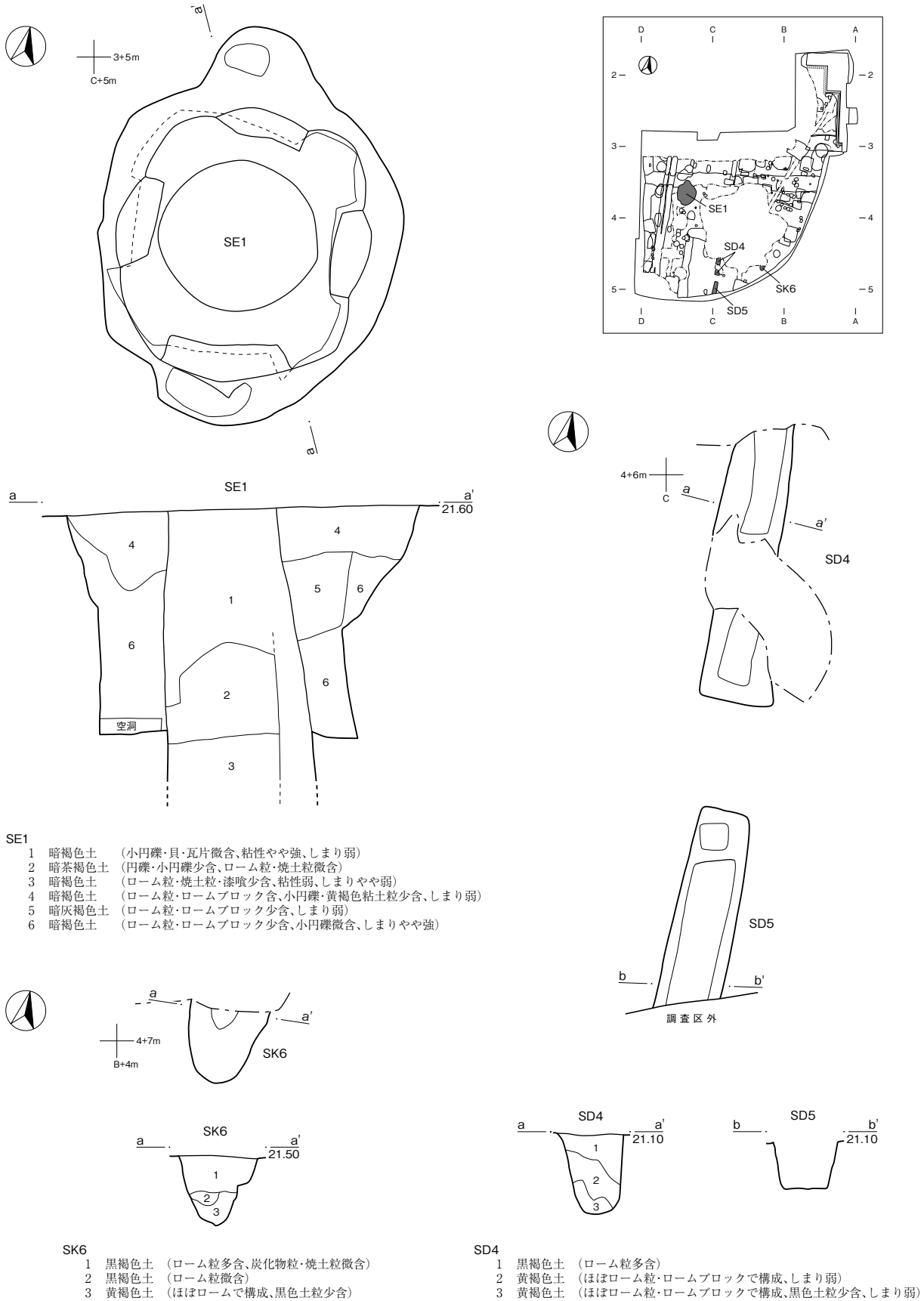
レンガは、建物外側ではコンクリートの上に1段（レンガ2層積み）、その上に7cm内側に1段（レンガ2層積み）、その上は22層積んで建物下部と接していた。レンガの積み方は基本的には縦方向と横方向とを1段ずつ交互に行ういわゆるイギリス積みで積まれるが、段の変更やタール状の物質が挟まれている部分など、下から2層目と3層目では小口を連続、12層目と13層目では長手を連続させている。タール状の物質は、下から12層目と13層目のレンガ積みの中に約1～1.5cmの厚さで確認されたが、レベル的には地階部床面直下の位置であることから地中の湿気を遮断するためのものと推定される。

また、基礎最南部分では南側に弧状に現存する懷徳館洋館の凝灰岩系の石堀へと続く堀の基礎が確認されている。堀の基礎は本館と比較すると簡略に作られており、人頭大の切石を基礎の栗石として用い、その上には約20cmのコンクリートとレンガ4段をイギリス積みで構築している。

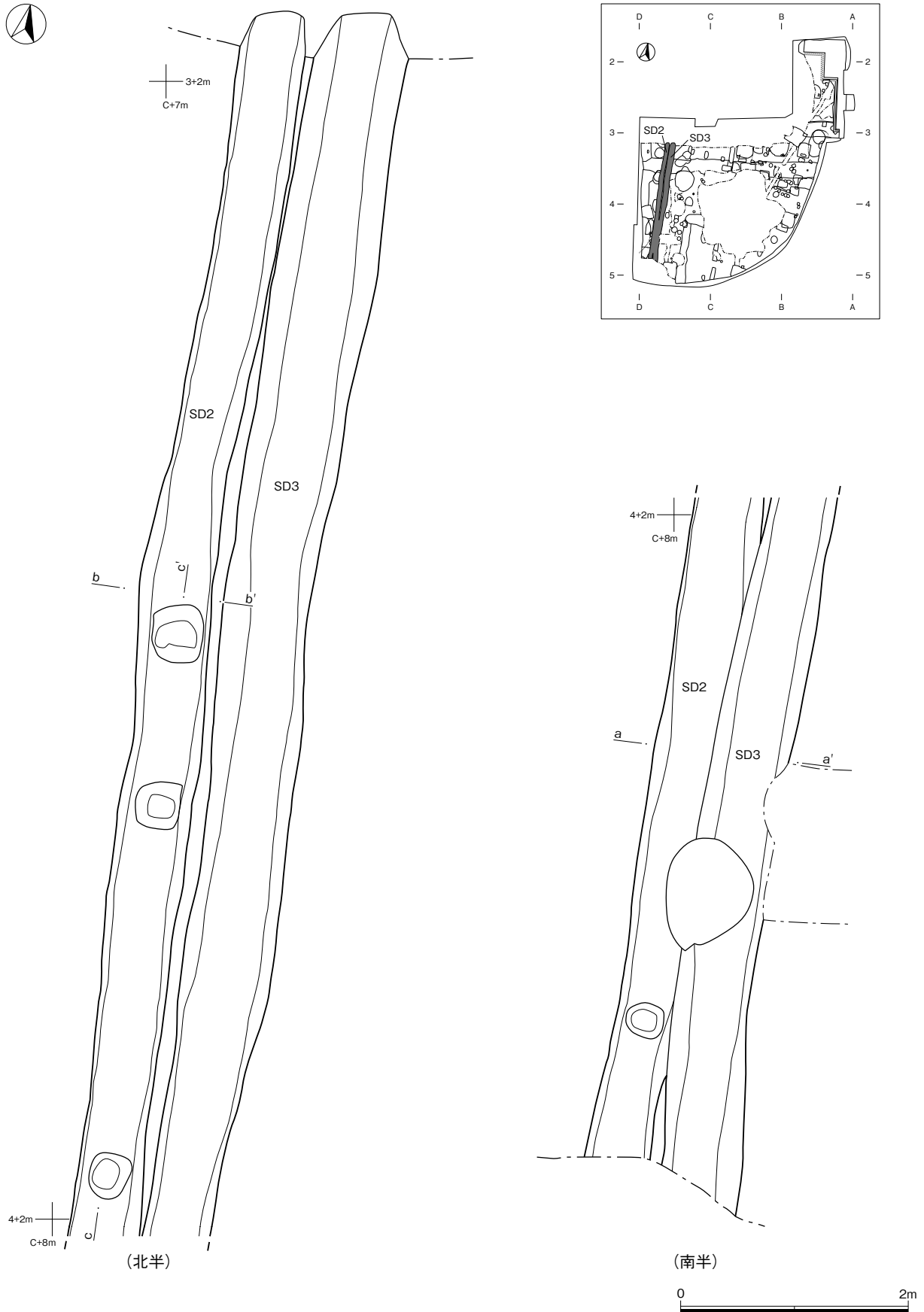
建物内部は、基礎とそれに伴う幅木や複数の鉄管などが遺存しているにすぎなかった。幅木は軟質の凝灰岩を用い、高さ23cm、長さ80cm、厚さ5cmの規格でレンガ基礎に漆喰で接着され、部屋を巡っている。幅木下部2～3cmはコンクリート製の床面上部に隠れるように作られていた。鉄管は合計で4管確認され、最も大きな管は外径14cm、内径12cmの管で、部屋の南西隅を挟るようにレンガを積み替えて小さなパイプスペースを構築し、上部より部屋の壁内を通過して、タール層の下、地下部分で館外に出ているもので、館外には底辺40cm、高さ35～40cmのトンネル状のパイプスペースをレンガで構築している。また、管は館外において鉄製U字管を伴っており、これらの管が排水管であると推定された。U字管より外側では土管に変わっており、調査区中央にある大型攪乱から南側に向きを変えて調査区域外へと続いていた。

その他の管は小型のもので、外径5cm程度であった。管はいずれも壁の内側に作られており、上記排水用のものとは異なりレンガ基礎を抉り取って配管し、その周囲はコンクリートによって補強さ

れていた。そのうちの1系統がタール層より上で館外へと繋がっていたが、給水あるいは暖房管とも推定されるが、性格は断定できなかった。館外へのパイプスペースは、前述の排水管よりやや高さが低いものの同様の構造をしていた。地中部分の排水管のパイプスペースには土が充填されたのみであったが、地上部分ではコンクリートによって開口部が閉塞されていた。

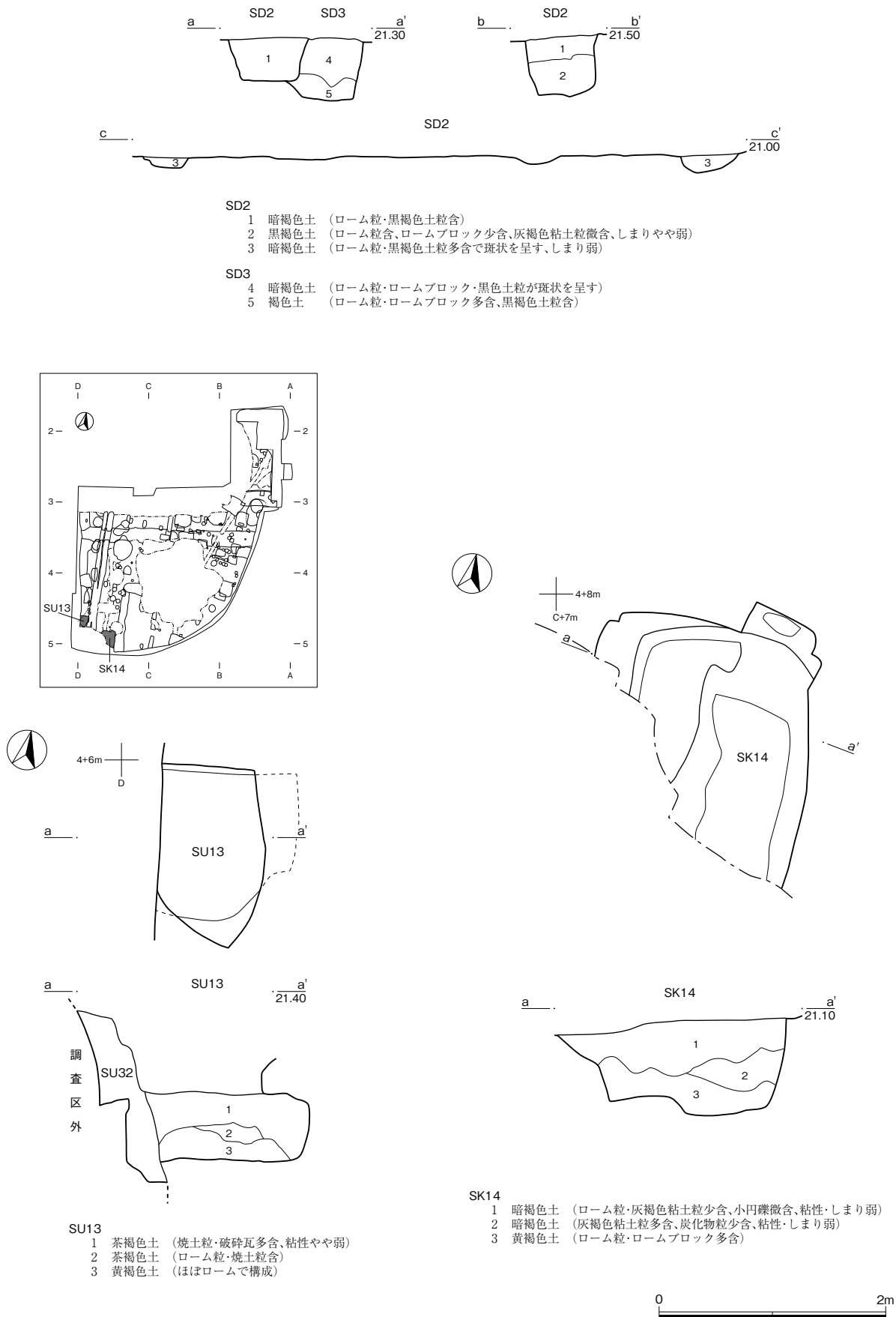


III-1 図 SE1、SD4、SD5、SK6

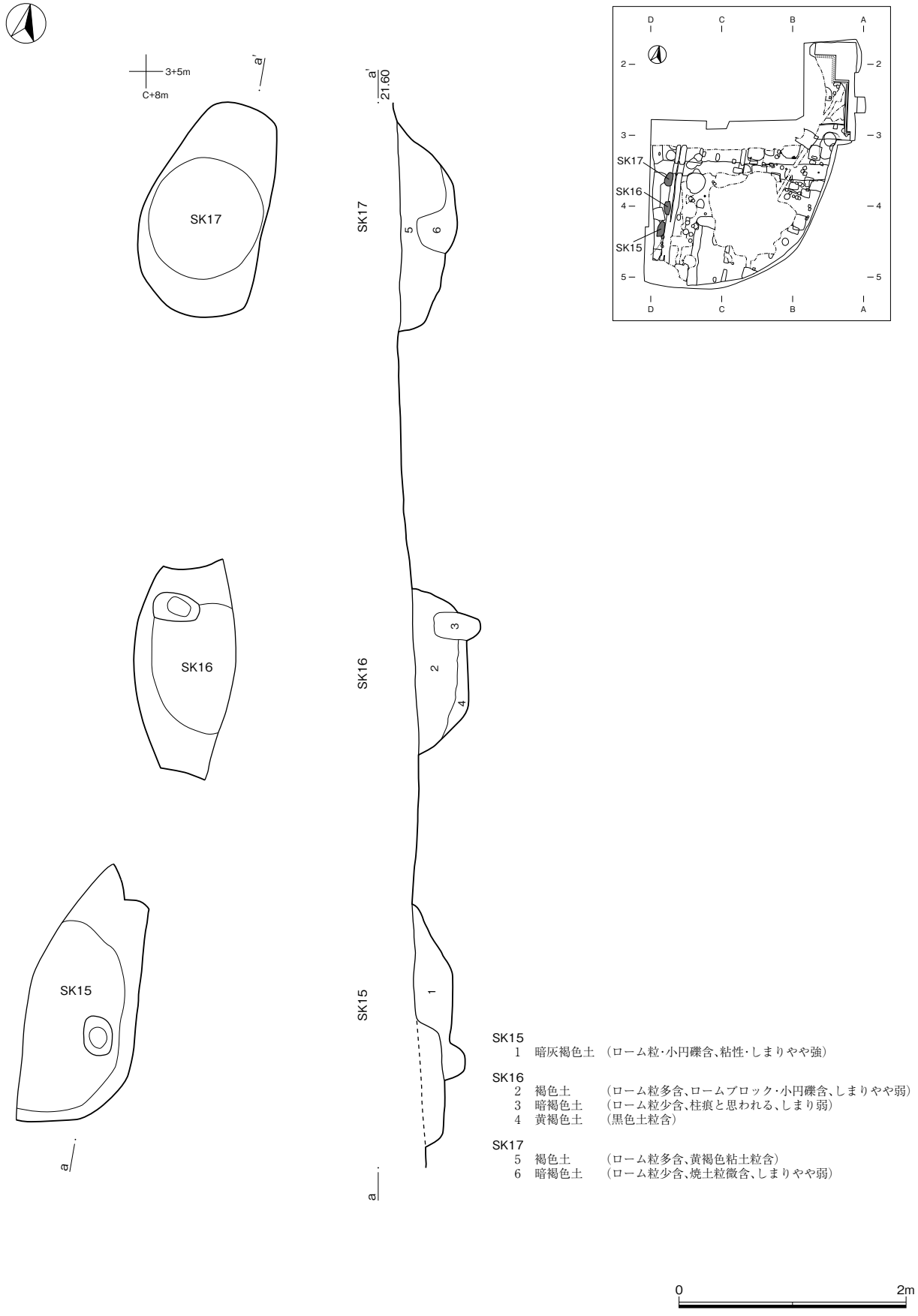


Ⅲ-2図 SD2 (1)、SD3 (1)

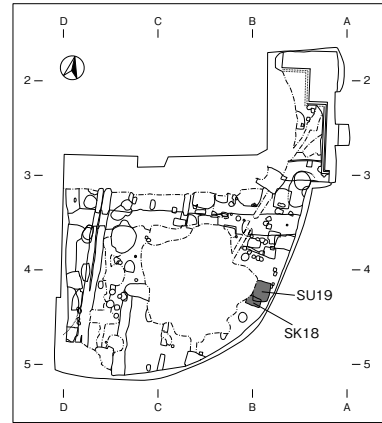
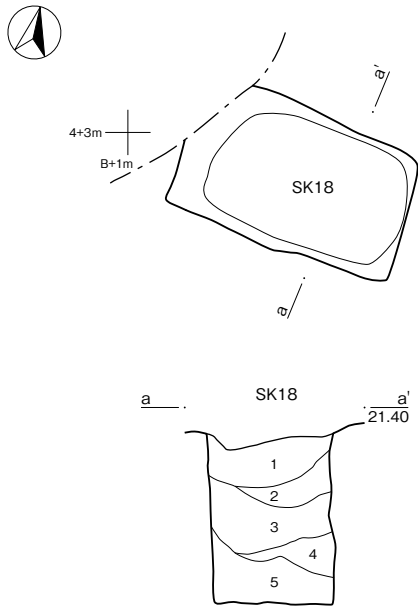
第三章 遺構



III-3 図 SD2 (2)、SD3 (2)、SU13、SK14

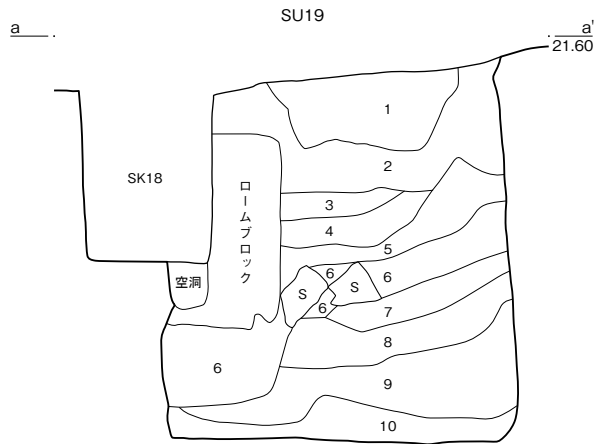
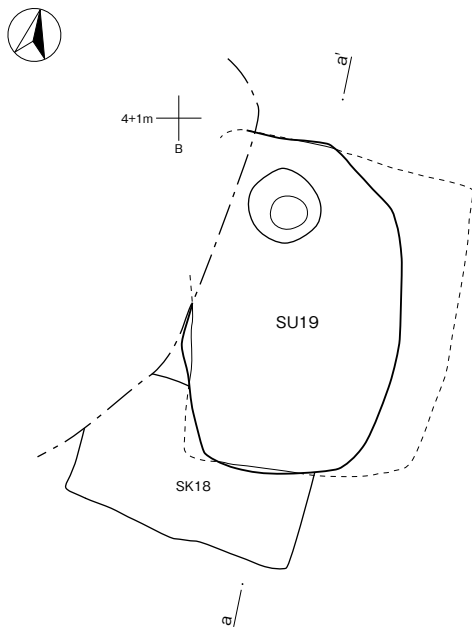


Ⅲ-4 Ⅹ SK15、SK16、SK17



SK18

- 1 暗褐色土 (炭化物粒・焼土粒・小円礫・灰褐色粘土粒少含)
- 2 暗褐色土 (やや明、炭化物粒・灰褐色粘土粒多含、焼土粒少含、しまりやや弱)
- 3 暗褐色土 (円礫・小円礫・瓦片多含、しまりやや弱)
- 4 暗褐色土 (焼土粒・灰褐色粘土粒含、炭化物粒・貝少含)
- 5 暗褐色土 (炭化物粒・灰褐色粘土粒・円礫・瓦片少含、貝微含、しまりやや弱)

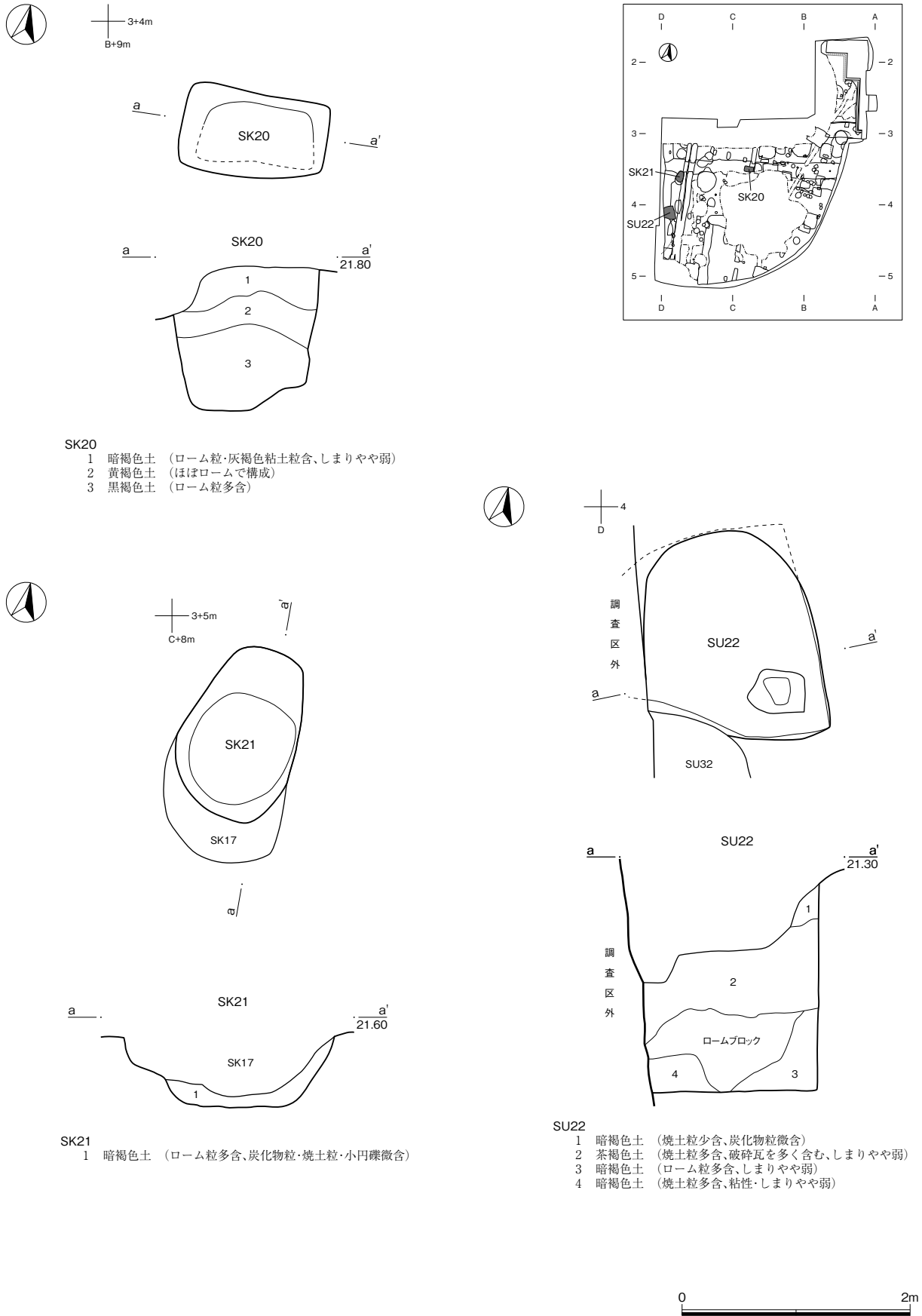


SU19

- 1 黒褐色土 (灰褐色粘土粒多含、炭化物粒・焼土粒・小円礫・破碎瓦少含)
- 2 赤褐色土 (焼土粒多含、ローム粒・炭化物粒微含、粘性なし、しまりやや弱)
- 3 褐色土 (ローム粒・褐色砂粒多含、炭化物粒微含、粘性やや弱)
- 4 橙褐色土 (焼土粒多含、炭化物粒微含、粘性・しまりやや弱)
- 5 暗灰褐色土 (灰褐色粘土粒多含、炭化物粒・焼土粒少含)
- 6 暗褐色土 (焼土粒・焼漆喰片多含、灰褐色粘土粒少含、炭化物粒微含、粘性やや弱)
- 7 褐色土 (ローム粒・焼土粒含)
- 8 褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、焼土粒微含、7層より明)
- 9 灰褐色土 (灰褐色粘土粒多含、円礫・小円礫含、ローム粒・焼土粒微含、粘性やや強)
- 10 暗灰褐色土 (ローム粒・焼土粒含、小円礫微含)

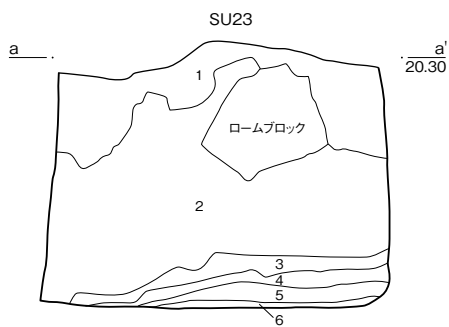
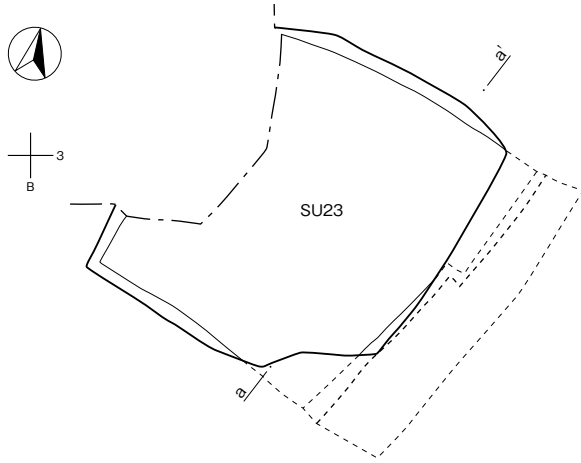


III-5図 SK18、SU19

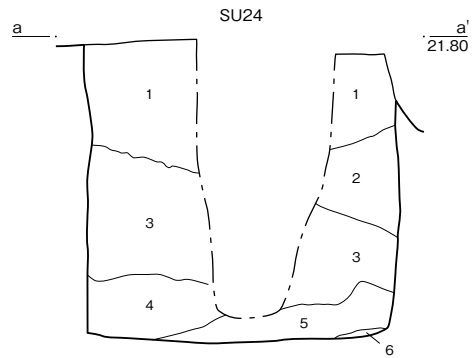
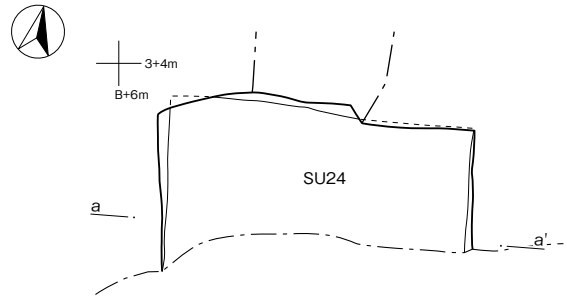
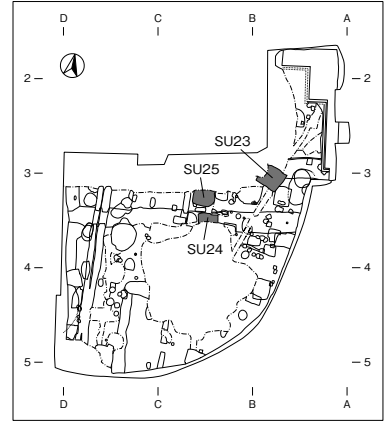


III-6 図 SK20、SK21、SU22

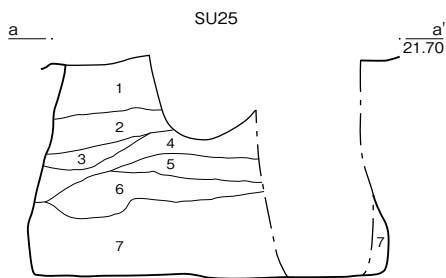
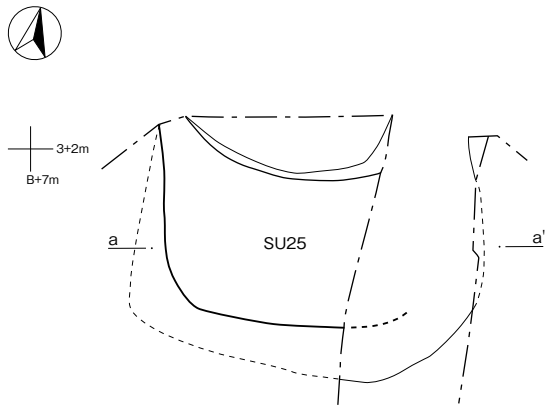
第三章 遺構



- SU23
- 1 黒褐色土 (ローム粒含、粘性やや弱)
 - 2 黄褐色土 (ほぼロームブロックで構成、粘性なし)
 - 3 黄褐色土 (ほぼローム粒で構成、粘性・しまりやや弱)
 - 4 茶褐色土 (ローム粒多含、焼土粒微含、粘性やや弱)
 - 5 黒褐色土 (焼土粒少含、ローム粒微含、粘性やや弱)
 - 6 黄褐色土 (ほぼローム粒で構成)



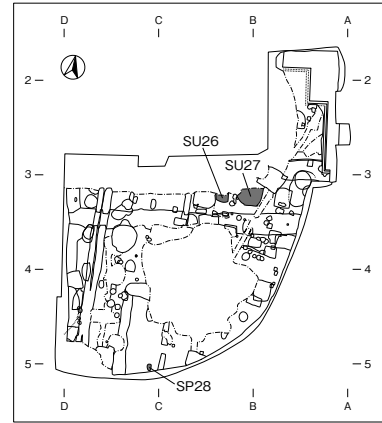
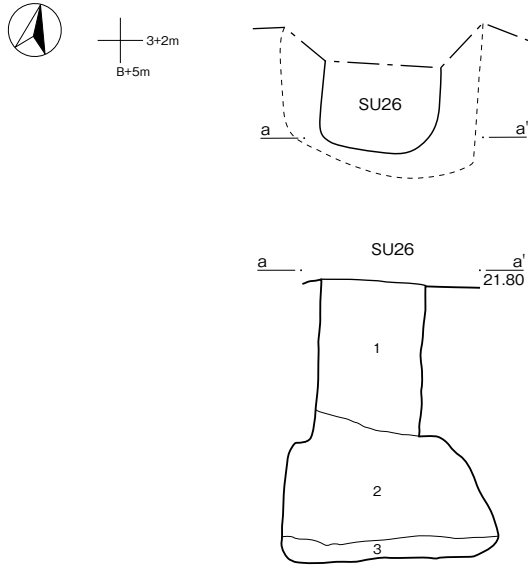
- SU24
- 1 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロック・焼土粒多含、斑状を呈す、粘性やや弱、しまり強)
 - 2 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロック・焼土粒含)
 - 3 褐色土 (ローム粒・ロームブロック極多含、粘性やや弱)
 - 4 暗褐色土 (ローム粒多含、ロームブロック・焼土粒少含、粘性・しまりやや弱)
 - 5 黒褐色土 (ローム粒少含、粘性やや弱)
 - 6 黄褐色土 (ロームで構成)



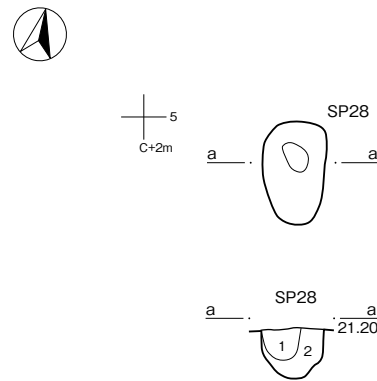
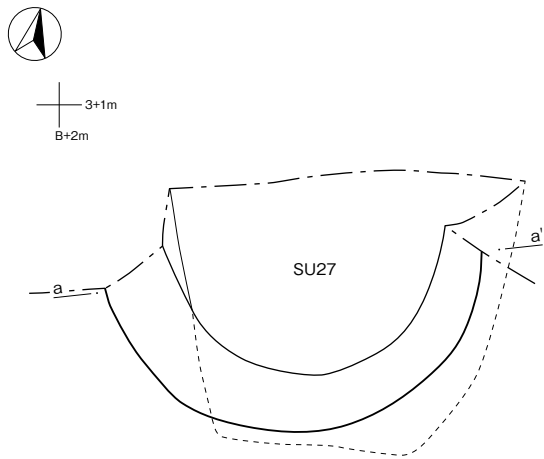
- SU25
- 1 茶褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、炭化物粒・焼土粒少含、貝を多く含む)
 - 2 褐色土 (ローム粒・ロームブロック極多含)
 - 3 暗褐色土 (ローム粒少含、ロームブロック微含)
 - 4 茶褐色土 (ローム粒・ロームブロック含)
 - 5 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック少含、炭化物粒微含)
 - 6 褐色土 (ローム粒・ロームブロック含)
 - 7 褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含)



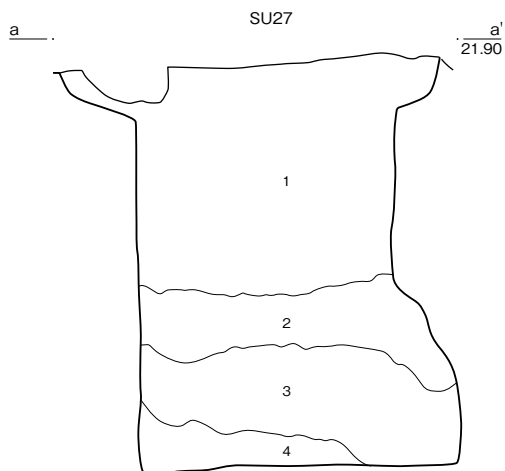
III-7 図 SU23、SU24、SU25



- SU26
- 1 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒少含、粘性やや弱)
 - 2 暗茶褐色土 (ロームブロック含、ローム粒・焼土粒少含、粘性やや弱)
 - 3 暗褐色土 (ローム粒多含)



- SP28
- 1 褐色土 (ローム粒含、柱痕か、粘性やや弱)
 - 2 褐色土 (1層より明、ローム粒・ロームブロック含)

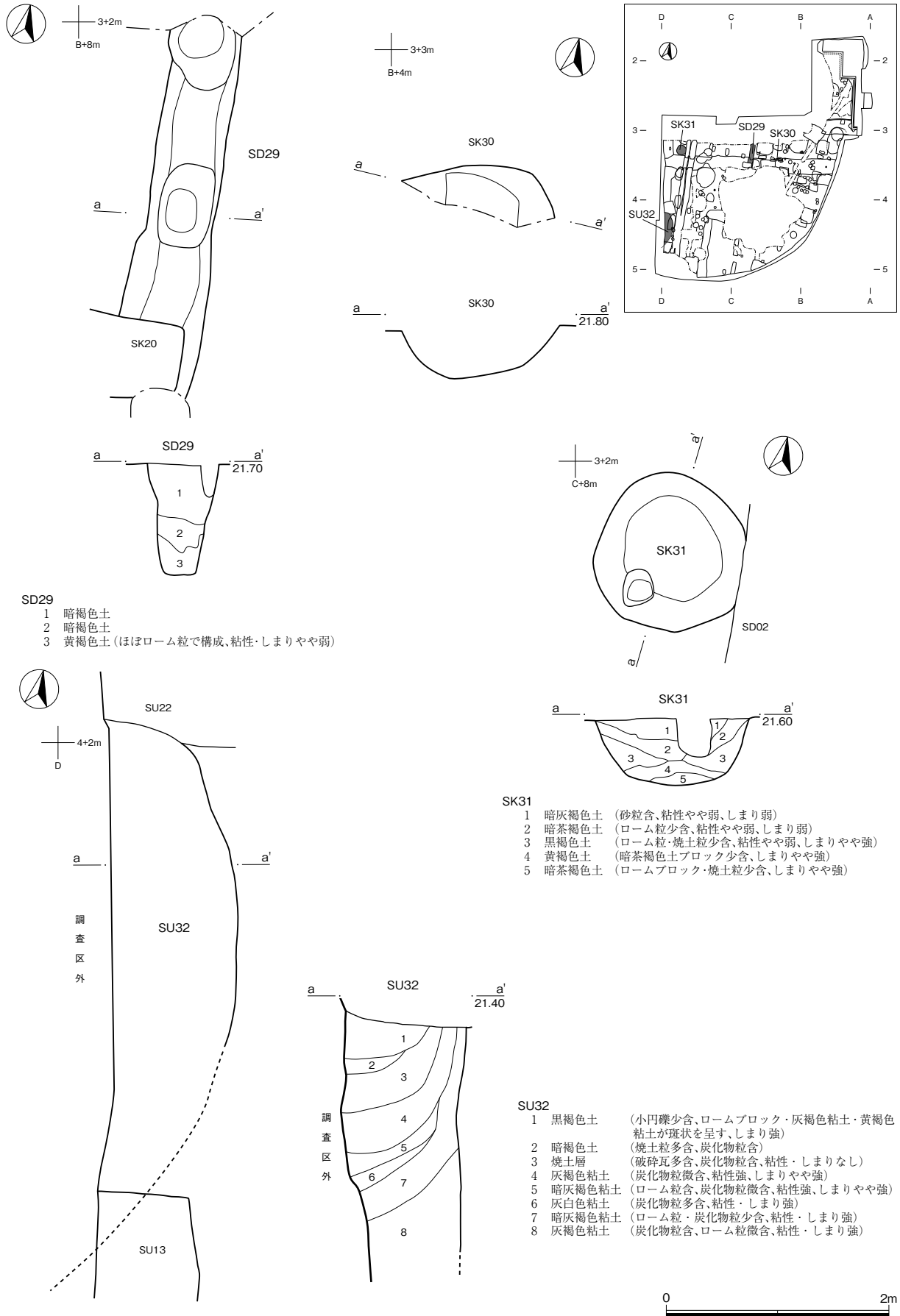


- SU27
- 1 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロック・焼土粒多含、白色砂粒・破碎瓦含、しまり強)
 - 2 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、しまり強)
 - 3 黄褐色土 (ほぼローム粒で構成)
 - 4 黒褐色土 (ローム粒多含、焼土粒少含、しまり強)

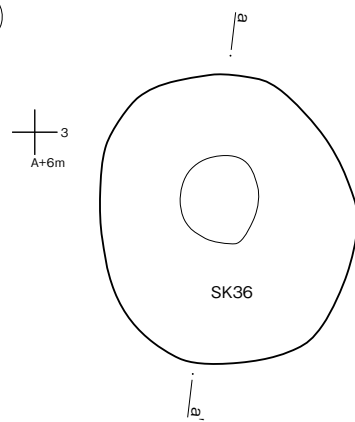
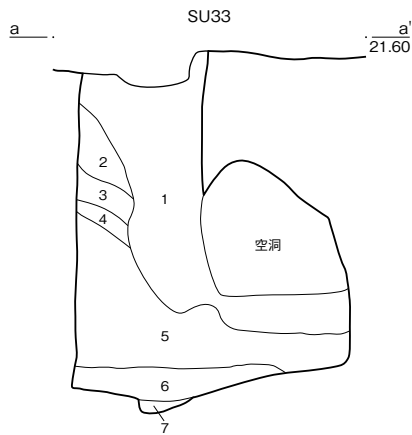
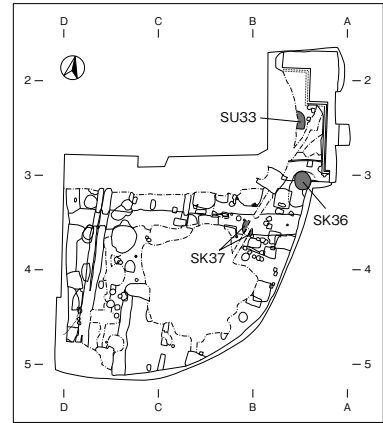
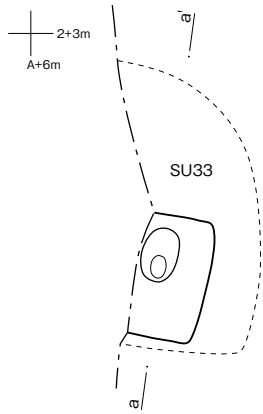


III-8 図 SU26、SU27、SP28

第三章 遺構

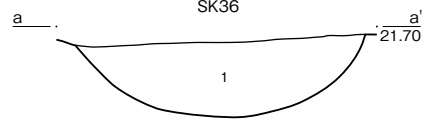


III-9 図 SD29、SK30、SK31、SU32



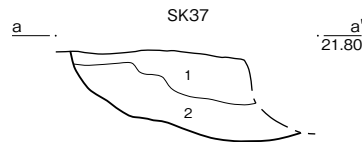
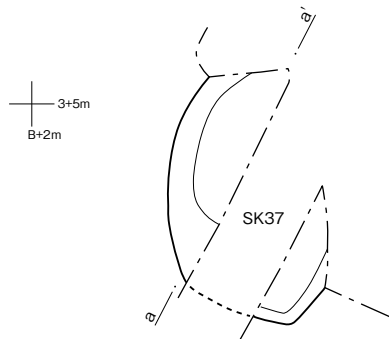
SU33

- 1 暗灰褐色土 (焼土粒・小円礫少含、粘性・しまりやや弱)
- 2 暗褐色土 (ローム粒含、しまりやや弱)
- 3 黒褐色土 (ローム粒・焼土粒微含)
- 4 焼土
- 5 暗褐色土 (ローム粒・小円礫少含)
- 6 暗茶褐色土 (ローム粒含、しまり強)
- 7 黄褐色土 (ロームで構成、しまり強)



SK36

- 1 黄褐色土 (ほぼロームで構成)



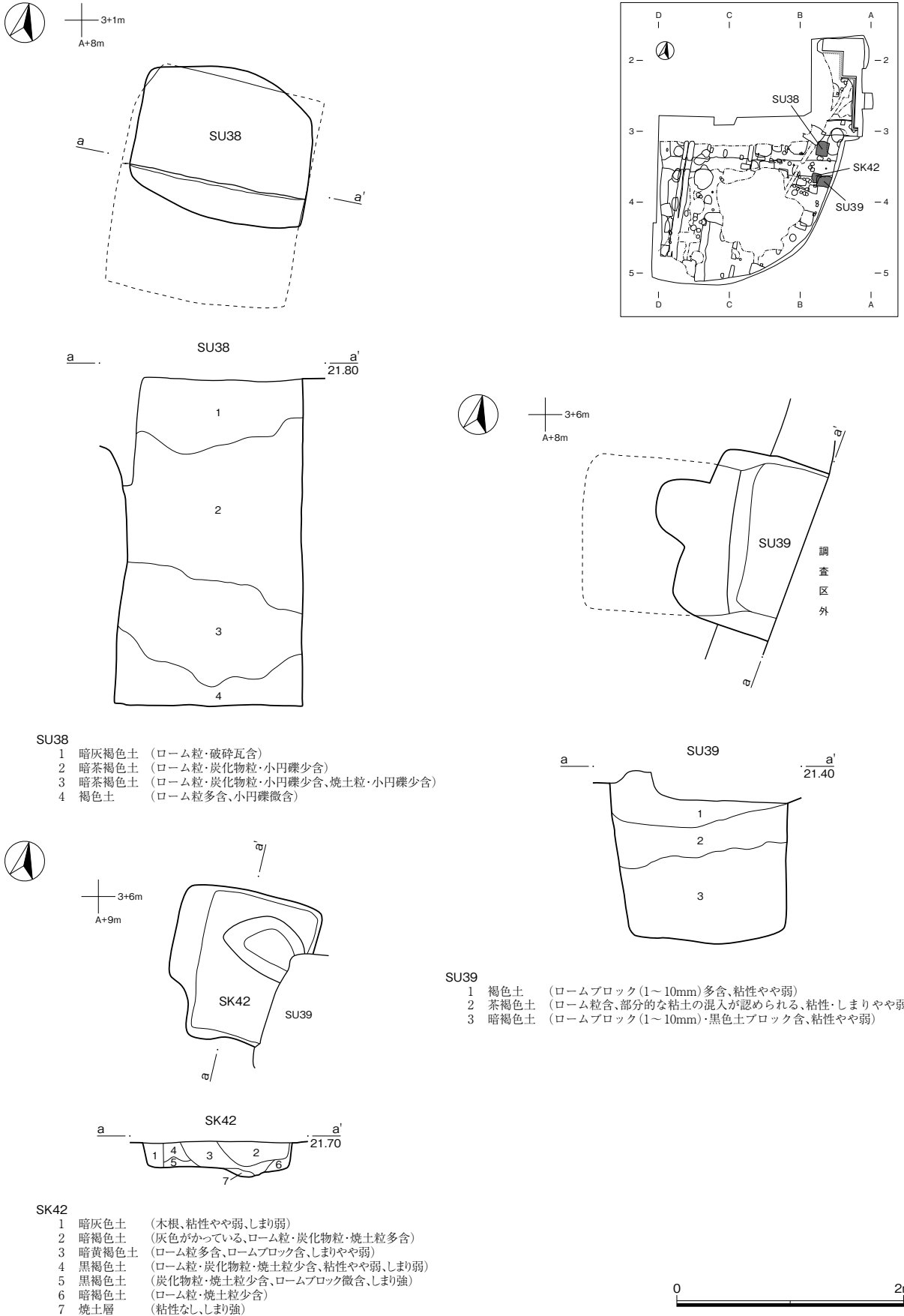
SK37

- 1 灰褐色土
- 2 暗灰褐色土 (小円礫含、焼土粒少含)



III-10 図 SU33、SK36、SK37

第III章 遺構

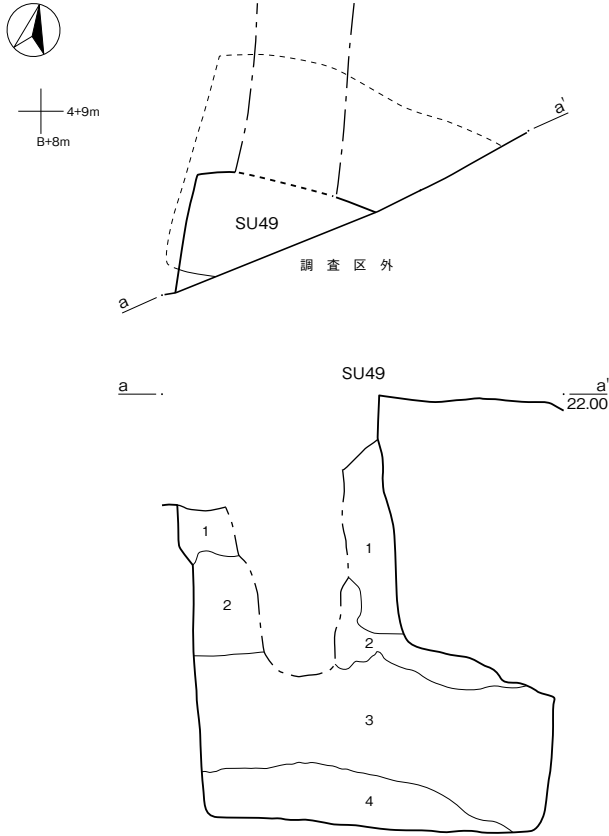


- SU38
- 1 暗灰褐色土 (ローム粒・破碎瓦含)
 - 2 暗茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒・小円礫少含)
 - 3 暗茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒・小円礫少含、焼土粒・小円礫少含)
 - 4 褐色土 (ローム粒多含、小円礫微含)

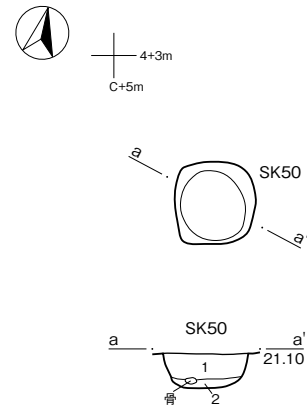
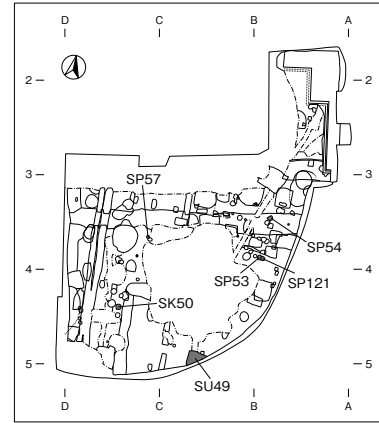
- SU39
- 1 褐色土 (ロームブロック(1~10mm)多含、粘性やや弱)
 - 2 茶褐色土 (ローム粒含、部分的な粘土の混入が認められる、粘性・しまりやや弱)
 - 3 暗褐色土 (ロームブロック(1~10mm)・黒色土ブロック含、粘性やや弱)

- SK42
- 1 暗灰色土 (木根、粘性やや弱、しまり弱)
 - 2 暗褐色土 (灰色がかっている、ローム粒・炭化物粒・焼土粒多含)
 - 3 暗黄褐色土 (ローム粒多含、ロームブロック含、しまりやや弱)
 - 4 黒褐色土 (ローム粒・炭化物粒・焼土粒少含、粘性やや弱、しまり弱)
 - 5 黒褐色土 (炭化物粒・焼土粒少含、ロームブロック微含、しまり強)
 - 6 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒少含)
 - 7 焼土層 (粘性なし、しまり強)

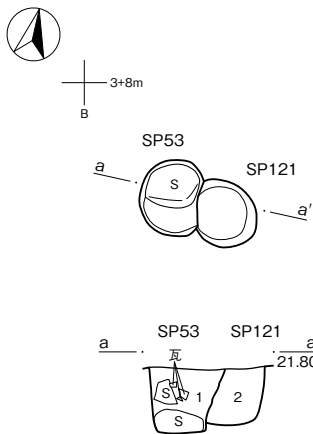
III-11 図 SU38、SU39、SK42



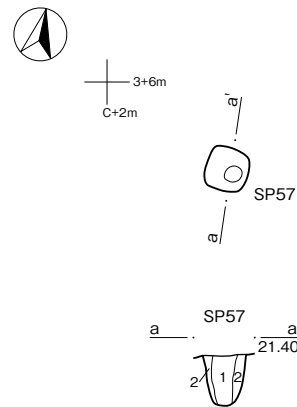
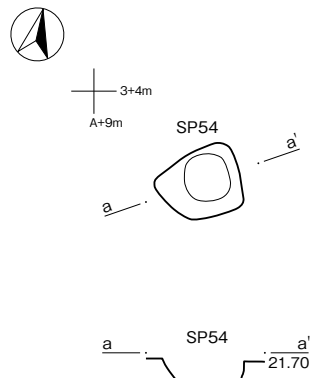
- SU49**
- 1 褐色土 (ローム粒・ロームブロック(数cm)多含、炭化物粒少含、粘性やや弱、しまりなし)
 - 2 暗褐色土 (ローム粒・炭化物少含、粘性・しまりやや弱、左側しまり弱)
 - 3 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームブロック(2~3mm)多含、粘性・しまりやや弱)
 - 4 暗褐色土 (ロームブロック含、粘性しまりやや弱)



- SK50**
- 1 黒色土 (ロームブロック含、粘性・しまりなし)
 - 2 黒色土 (骨含、粘性・しまりなし)



- SP53**
- 1 褐色土 (ローム粒多含)
- SP121**
- 2 暗褐色土

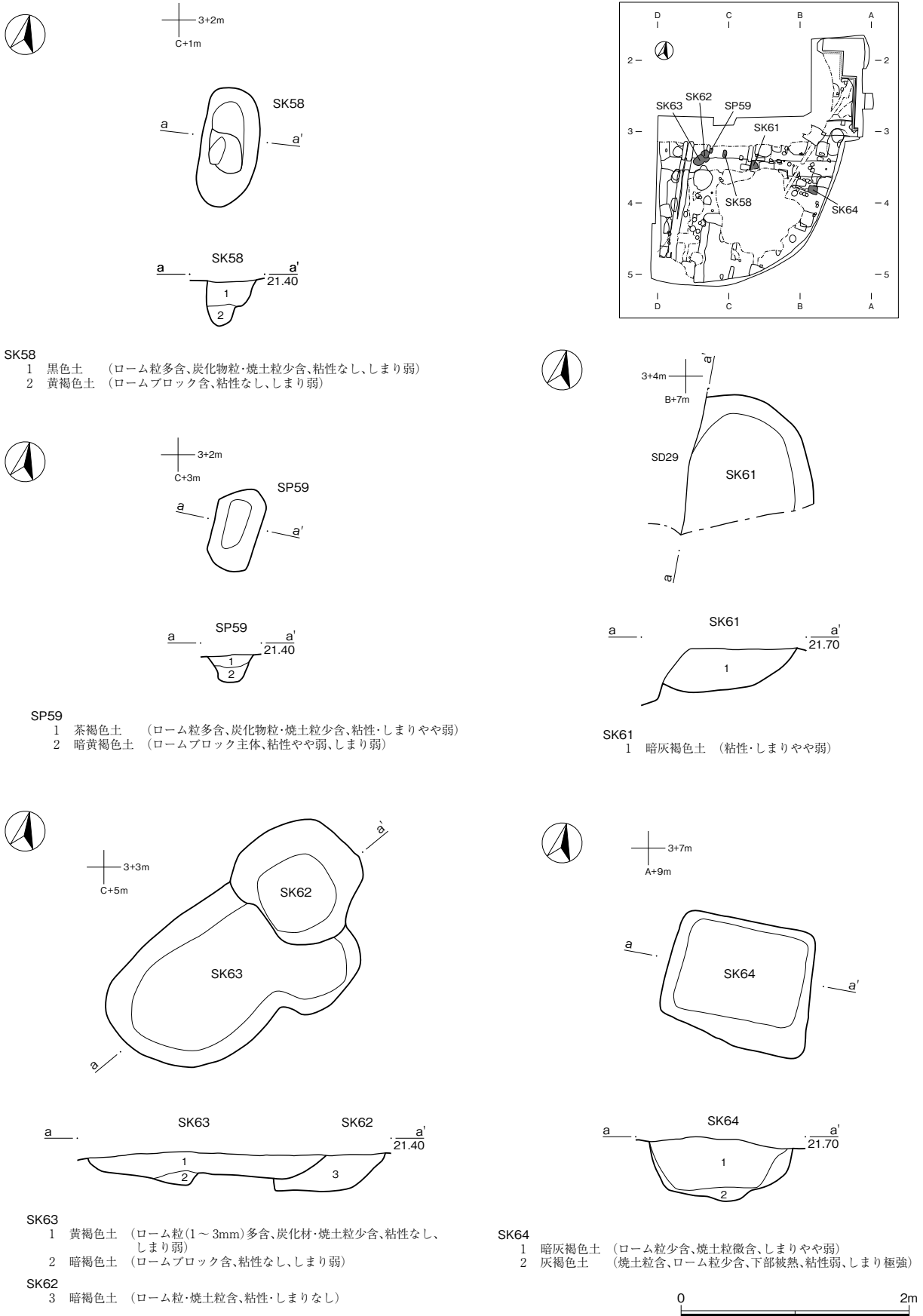


- SP57**
- 1 黄褐色土 (ロームブロック(1~3mm)多含、粘性なし、しまり弱)
 - 2 黒色土 (ローム粒(1mm)含、粘性なし、しまり弱)

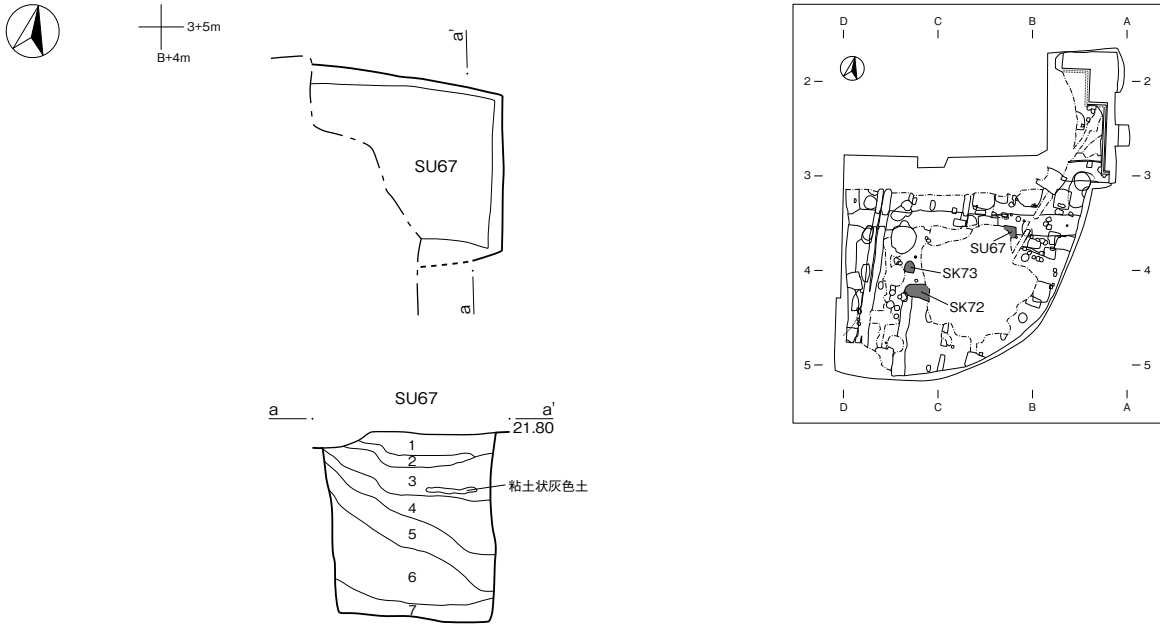


III-12 図 SU49、SK50、SP53、SP54、SP57、SP121

第三章 遺構

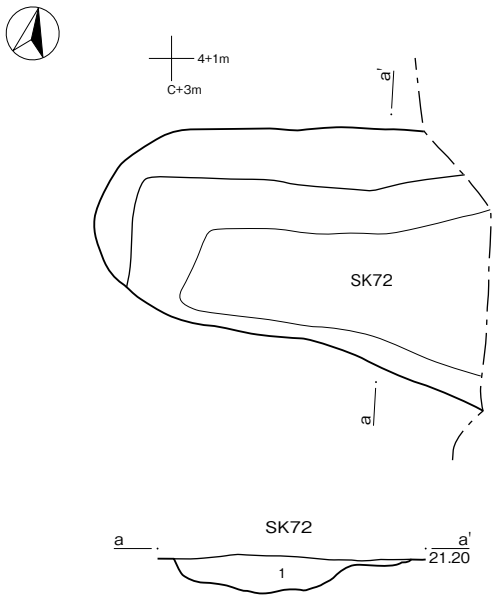


III-13 図 SP58、SP59、SK61、SK62、SK63、SK64



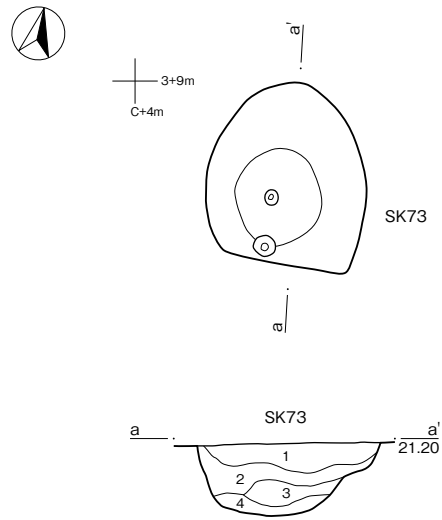
SU67

- 1 明茶褐色土 (焼土粒(1~5mm)多含、ローム粒(1mm)少含、炭化材微含、粘性やや弱)
- 2 明黄色土 (白砂含、粘性やや弱)
- 3 暗褐色土 (ローム粒多含、焼土ブロック含、炭化材微含、下部に粘土状灰色土の層あり)
- 4 暗黄褐色土 (ローム粒多含、炭化材・焼土粒微含、粘性・しまりやや弱)
- 5 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック(3~5mm)多含、焼土粒・黒色スコリア少含、粘性・しまりやや弱)
- 6 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、赤色・黒色スコリア少含、粘性やや弱、しまり弱)
- 7 暗黄褐色土 (ロームブロック・赤色・黒色スコリア含、粘性やや弱、しまり弱)



SK72

- 1 黒褐色土 (ローム粒少含、黒色土粒微含、粘性やや弱)



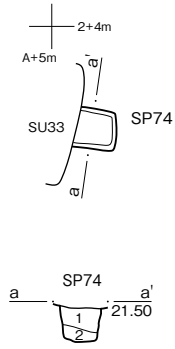
SK73

- 1 黒色土 (ローム粒少含、粘性やや弱、しまり弱)
- 2 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、粘性やや弱、しまり弱)
- 3 黒色土 (炭化材・焼土粒含、ロームブロック少含、粘性やや弱、しまり弱)
- 4 明黄褐色土 (ロームブロック主体、粘性やや弱、しまり弱)



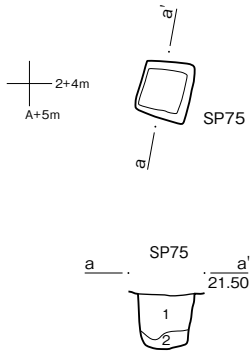
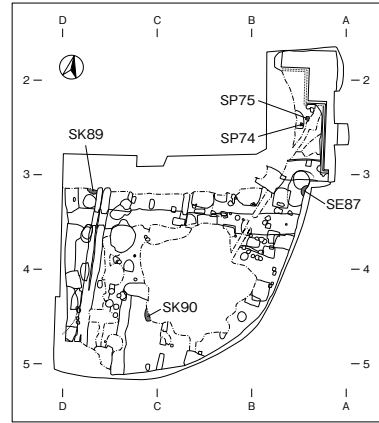
III-14 図 SU67、SK72、SK73

第三章 遺構



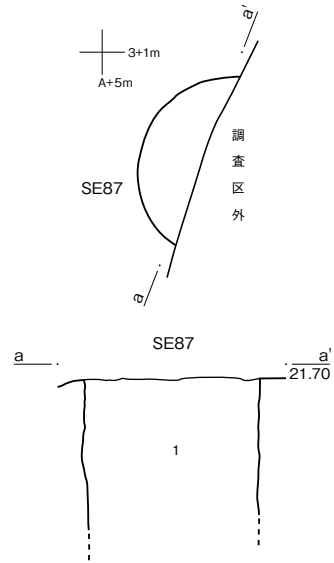
SP74

- 1 暗褐色土 (ロームブロック・焼土粒少含、粘性やや弱、しまり弱)
- 2 明黄褐色土 (ロームブロック主体、粘性やや弱)



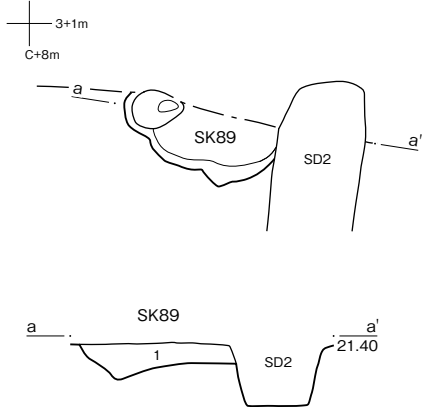
SP75

- 1 暗褐色土 (ロームブロック少含、粘性やや弱、しまり弱)
- 2 明黄褐色土 (黒色土ブロック含、粘性やや弱、しまり弱)



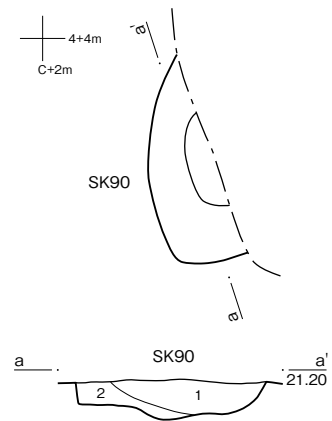
SE87

- 1 暗褐色土 (ロームブロック少含、粘性なし、しまり弱)



SK89

- 1 暗褐色土 (ローム粒少含)

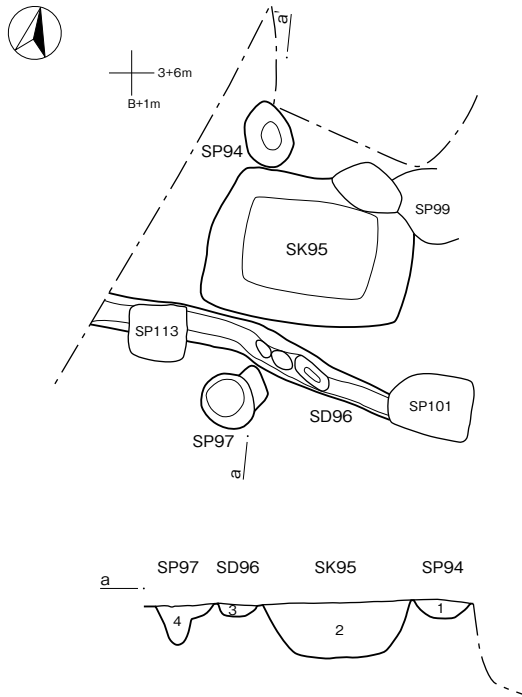


SK90

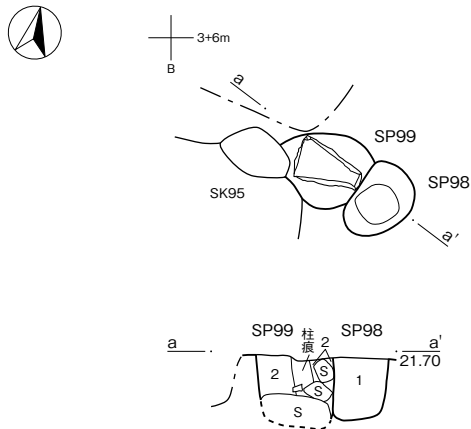
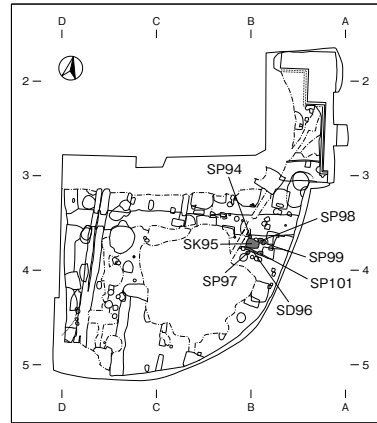
- 1 褐色土 (ローム粒・灰褐色粘土粒多含、粘性弱、しまり弱)
- 2 暗褐色土 (ローム粒含、粘性・しまりやや弱)



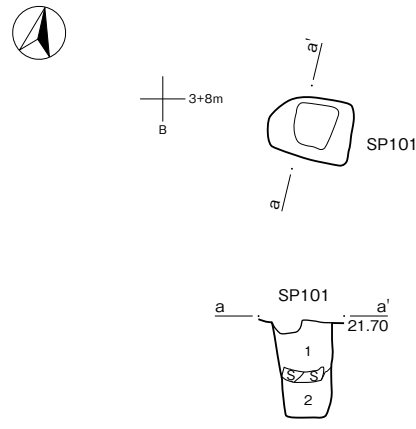
III-15 図 SP74、SP75、SE87、SK89、SK90



- SP94
1 暗灰褐色土 (灰褐色砂粒多含、ローム粒少含、粘性・しまりやや弱)
- SK95
2 暗褐色土 (焼土粒微含、粘性、しまりやや弱)
- SD96
3 暗灰褐色土 (灰褐色粘土粒・円礫多含、粘性やや弱、しまり強)
- SP97
4 黒褐色土 (ローム粒含)



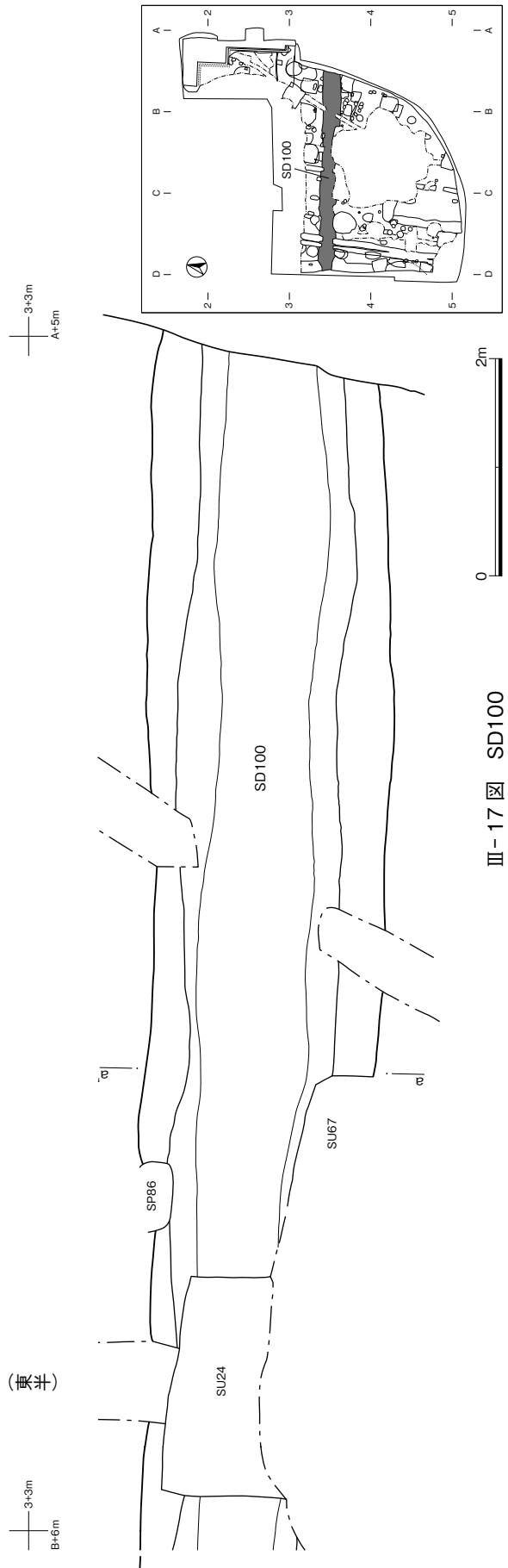
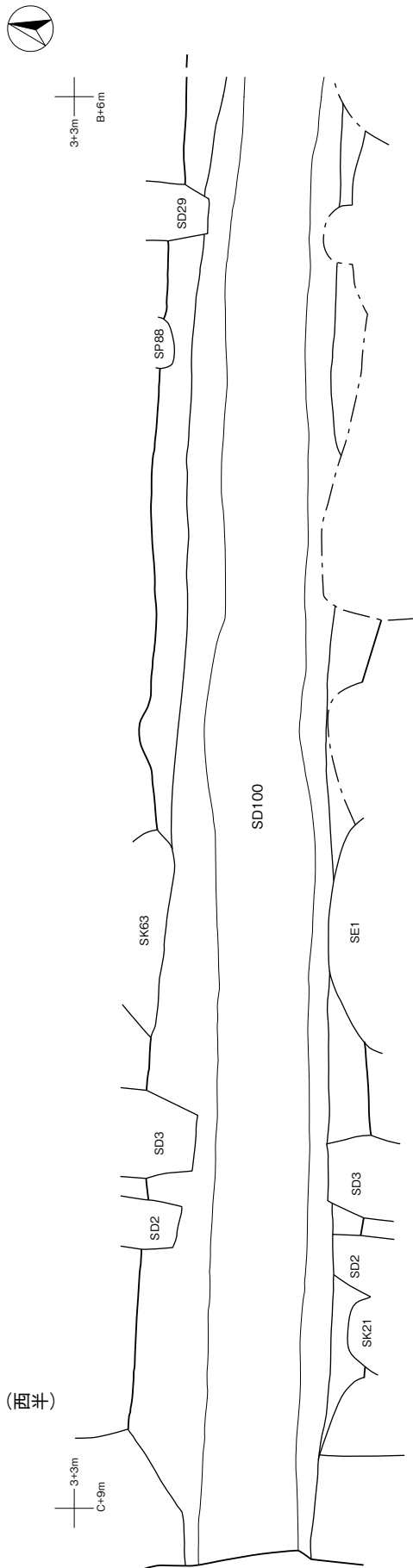
- SP98
1 暗灰褐色土 (灰褐色粘土粒多含、粘性やや弱)
- SP99
2 褐色土 (焼土粒少含)

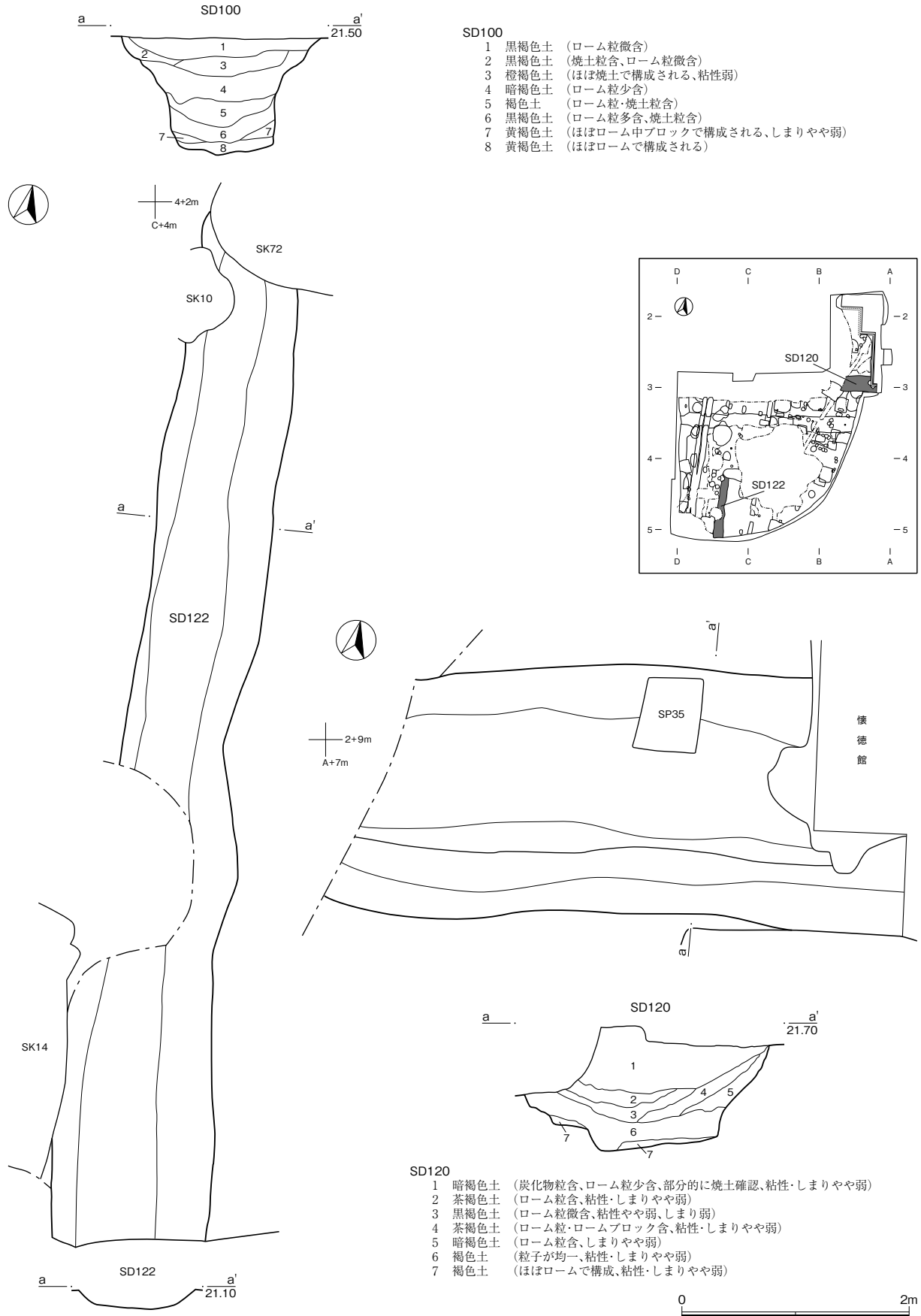


- SP101
1 橙褐色土 (ローム粒・焼土粒多含)
2 暗灰褐色土 (粘性・しまりやや弱)

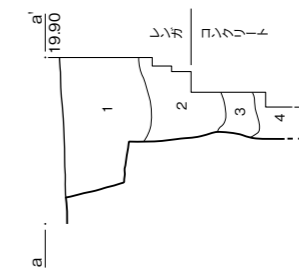
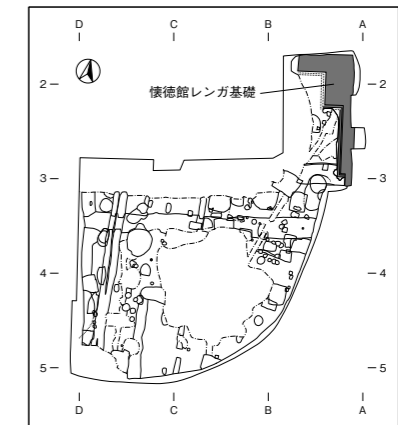
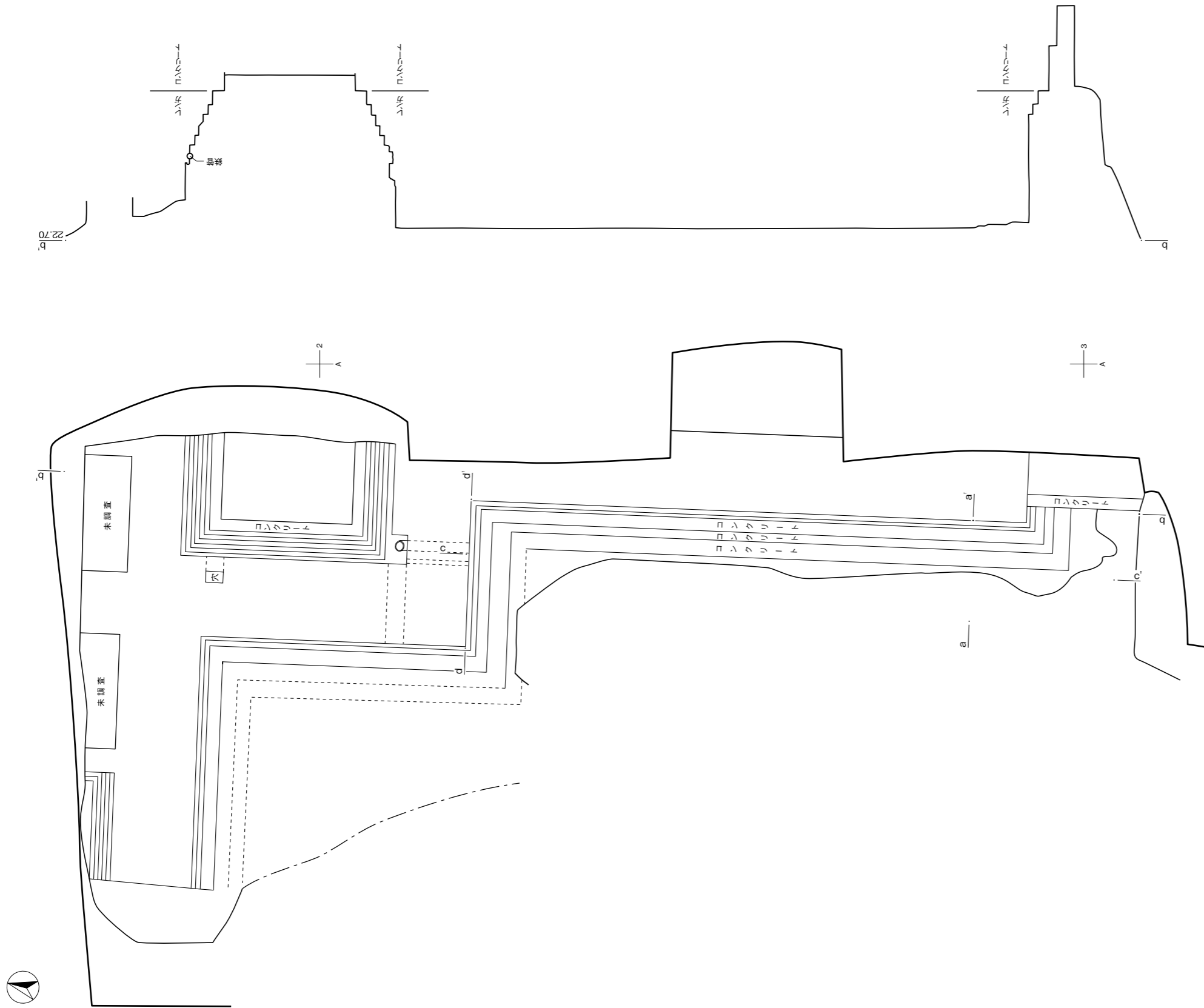


Ⅲ-16 図 SP94、SK95、SD96、SP97、SP98、SP99、SP101





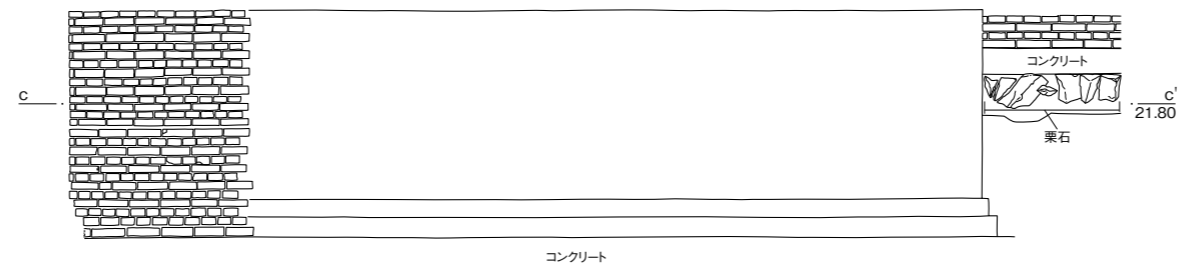
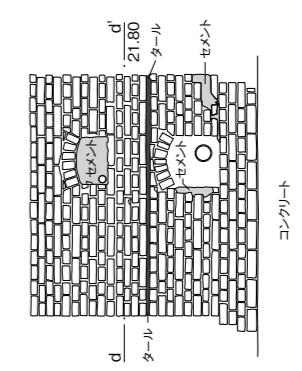
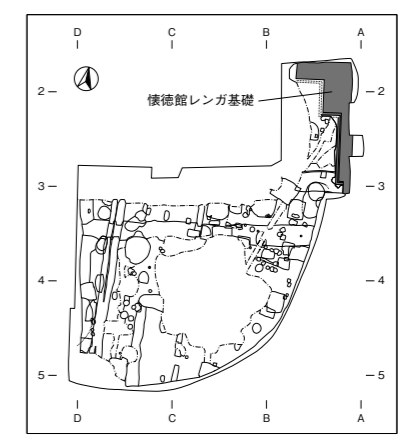
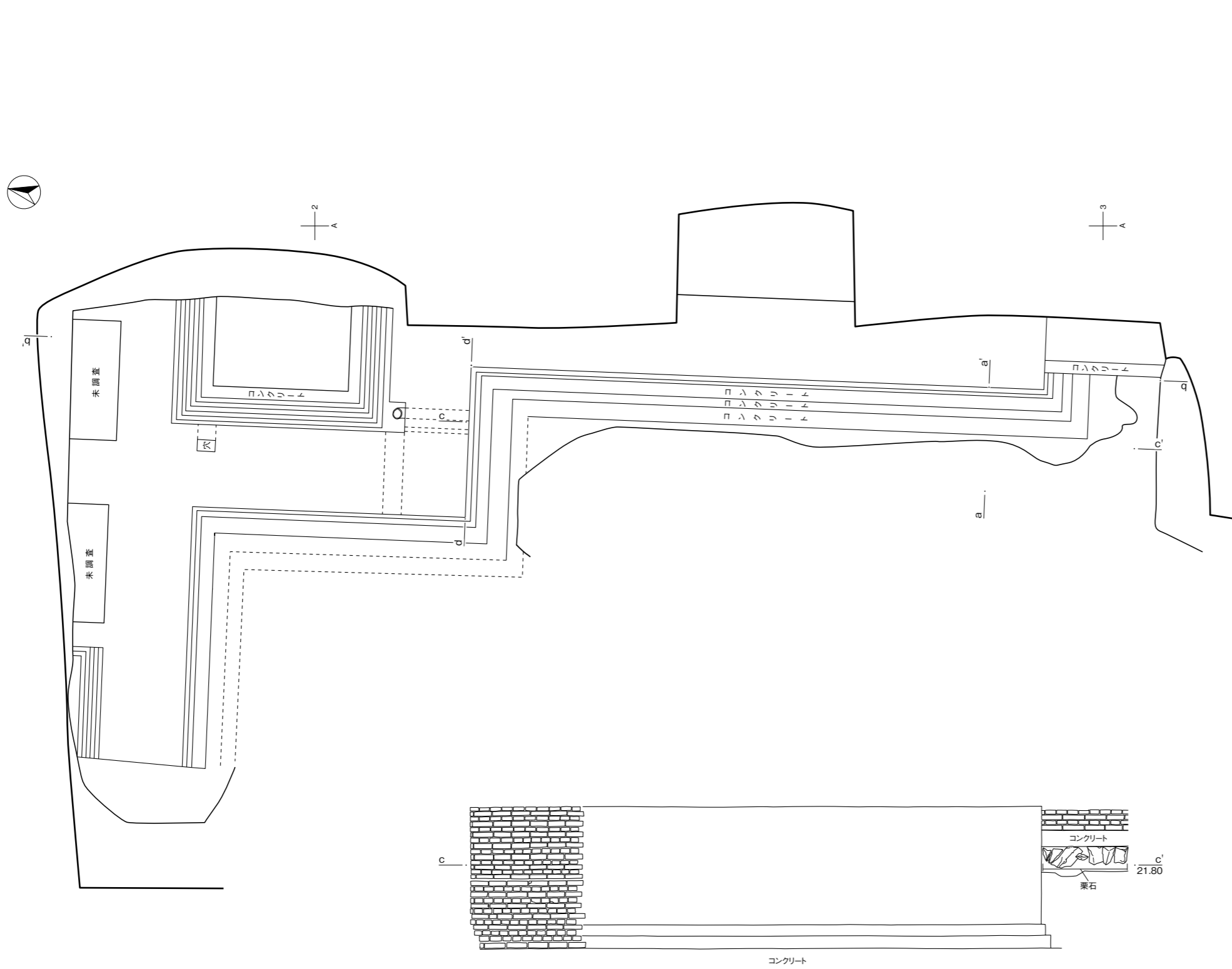
Ⅲ-18 図 SD100 (2)、SD120、SD122



- 懐徳館
- 1 褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含)
 - 2 暗褐色土 (ローム粒少含、粘性・しまりやや弱)
 - 3 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック含)
 - 4 褐色土 (ローム粒含、粘性・しまりやや弱)



Ⅲ-19 図 懐徳館レンガ基礎 (1)



III-20 図 懐徳館レンガ基礎 (2)

第IV章 遺物

第1節 人工遺物

本地点からはコンテナ、約64箱の遺物（磁器・陶器・土器・その他）が出土している。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）によった。人形玩具の分類基準は「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」（東京大学埋蔵文化財調査室2012）によった。数量分析は、様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。それを行うにあたっては一定以上の数量（調査室では推定個体数100個体以上に設定）を必要とするが、本地点においては、推定個体数100個体以上の遺物が出土した遺構がなかったため、遺構の年代は個々の遺物の年代観で推定した。

全体で15遺構の遺物を抽出、図化した。17世紀中葉、17世紀後葉、18世紀後葉、19世紀前葉、近代、に比定され、半数が17世紀後葉の遺構である。それぞれの年代を示す典型的な陶磁器が検出されている。

SE1（遺構Ⅲ-1図、遺物Ⅳ-1図）

1～3は陶器である。1は京都・信楽系陶器碗。杉形碗。小杉茶碗。TD-1-dに分類される。鉄で若杉文が描かれているのが、わずかに残る。底部高台内に墨書。2は瀬戸・美濃系陶器碗。杉形碗。小杉茶碗。TC-1-wに分類される。3は灰釉の香炉でTC-9-aに分類される。

小杉茶碗（TD-1-d）が検出されていることなどから19世紀頃のものであろう。

SD3（遺構Ⅲ-2・3図、遺物Ⅳ-1図）

1は肥前系染付磁器碗である。高台断面三角で長吉谷指標のJB-1-cに分類される。JB-1-cではあるが高台断面はかなり「U」字状に近い。丁寧な作りである。小振り。見込み、墨弾き。高台内銘「天明成化年製」。高台脇に二重圏線。畳付けに砂付着。17世紀後半頃のものであろう。また、この頃の碗の一般的な大きさからするとかなり小振りである。坏のような使われ方をしたのかもしれない。

SK14（遺構Ⅲ-3図、遺物Ⅳ-1・2図）

1、2は、肥前系染付磁器である。1は高台断面が幅広「U」字状の碗で、いわゆる初期伊万里。JB-1-aに分類される。寿文。畳付けに砂付着。2は鉢でJB-5に分類される。口縁部は端反って輪花。底部欠損。

3～6は陶器。3、4は肥前系陶器碗である。3はTB-1に分類される。灰釉。高台内の削りは左回転で、削り出しの工具痕が残る。高台内無釉。畳付け脇面取り。4は大振りの灰釉丸碗。呉器手。高台内釉。TB-1-aに分類される。5は瀬戸・美濃系灰釉の輪剥げ皿。小振り。TC-2-mに分類される。6は鉄釉爛鍋。TZ-17に分類される。

7～11は土器。7は磨きかわらけ、底部平滑。DZ-2-dに分類される。内黒。8は底部糸切り痕左回転。DZ-2-bに分類される。胎土は橙色を呈す。内面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、江戸式かわらけと思われる。口縁部にスス付着。9、10は輪積み成形、一重杵、「天下一堺ミなど籐左衛門」

の刻印あり。DZ-51-bに分類される。胎土は橙色を呈す。11は凹型、無印の塩壺の蓋。DZ-00-cに分類される。

初期伊万里 (JB-1-a)、灰釉輪剥皿 (TC-2-m)、「天下一堺ミなど籐左衛門」刻印の塩壺 (DZ-51-b) などが出土しており、17世紀中葉頃の遺物群であろう。

SK18 (遺構Ⅲ-5図、遺物Ⅳ-2～4図)

1～6は磁器である。1、2、4～6は瀬戸・美濃系。1、2、4は端反形碗でJC-1-dに分類される。1、2は見込み花卉文。4は見込み「成化年製」。3は肥前系端反形碗でJB-1-nに分類される。外面文様一部墨弾き。内面口縁に墨弾きで七宝文。見込み扇文。5は腰が張り、体部が直立する小振りの碗。湯呑碗。JC-1-eに分類される。6は蛇ノ目凹形高台の皿。JC-2-aに分類される。

7～18は陶器である。7は瀬戸・美濃系。漆黒釉に長石釉散らし、拳骨茶碗。TC-1-pに分類される。畳付は、あまり広くなく、刻印はない。8は高台脇に「志戸呂」の刻印のある碗。TF-1に分類される。器形は胴部に複数の窪みを持ち瀬戸・美濃系の錆釉茶碗 (TC-1-q) に似ている、高台は渦巻き高台で右回転である。錆釉、鉄泥掛け。胎土は茶褐色で焼締められている。志戸呂系の陶器碗は東大構内遺跡においては、医学部附属病院共同溝建設地点W46-1、工学部14号館地点SU295上などから出土している。工学部14号館SU295上出土の碗には底部に長方形枠の「志戸呂」の刻印がある。9は灰釉。外面刷毛目の端反碗。TZ-1に分類される。10、11は京都・信楽系。10は小振りで器面には細かい貫入が入る端反碗。TD-1-gに分類される。灰釉。畳付脇面取り。11はTD-6に分類される。小振りなため坏として分類したが、煎茶碗として使われたものかもしれない。内面灰釉。外面無釉。底部高台内刻印あり。六角枠内「清」。清水五条坂で明和8(1771)年に開窯の清水六兵衛の刻印。代々、清水六兵衛を名のる。12は柿釉鍋でTZ-33-aに分類される。三足。紐状把手は形骸化している。鍋形ではあるが、小形で二次焼成の痕もないことから、向付などとして使われたものであろう。13～18は瀬戸・美濃系。13は再興織部。TCに分類される。注口、取っ手が付く。緑釉掛け分け。鉄絵。14、15は二合半灰釉徳利、つけ掛け。TC-10-cに分類される。14は釘書「八川」「甲」。15は釘書「〇玉」。墨で胴部高台脇に「〇」が5箇、底部に「〇」枠内「玉」。16はTC-10-dに分類される。釘書「〇」「〇五」玉。墨で胴部高台脇に「〇」が5箇「|」が1箇、底部に「〇」枠内「玉」。15、16は団子坂にあった料理屋「玉屋」のものかもしれない。17、18は一升徳利でTC-10-eに分類される。17は釘書の一部が墨で上書きされている。18は釘書「一△」。

19は土器である。底部平滑の磨きかわらけ。DZ-2-dに分類される。胎土は橙色。底部二次穿孔。

肥前系磁器端反形碗 (JB-1-n)、瀬戸・美濃系磁器端反形碗 (JC-1-d)、湯呑碗 (JC-1-e)、蛇ノ目凹形高台の皿 (JC-2-a) などが出土しており19世紀前半に比定される遺物群であると考えられる。

SU19 (遺構Ⅲ-5図、遺物Ⅳ-4図)

1、2は肥前系陶器である。1は口縁部のみ施釉の播鉢。TB-29-bに分類される。外面無釉。内面化粧掛け。胎土は暗褐色。内面には白色粒子が付着している。胎土には見受けられず、焼成時に付着した物であろう。播目は13条1単位で施される。2は見込み蛇ノ目釉剥ぎの青緑釉皿、内野山指標。TB-2-aに分類される。胎土はやや粗い。見込みに砂目が残る。内面青緑釉。外面透明釉に青緑釉流し掛け。高台内には整形時のカンナ目が残る。

SU22 (遺構Ⅲ-6図、遺物Ⅳ-4・5図)

1は肥前系磁器見込み蛇ノ目釉剥ぎの青磁皿。底部無釉。JB-2-kに分類される。高台脇にカンナ痕が残る。高台、見込みには砂が付着。

2は肥前系陶器。砂目皿でTB-2に分類される。折れ縁。高台畳付と見込みに砂目が残る。灰緑色。灰釉。同様の皿が内野山南窯の窯体南側物原5層から出土している（嬉野町教育委員会1997）。

3は輪積成形。一重椀の塩壺。刻印不明。DZ-51に分類される。

4は軒丸瓦である。剣梅鉢文C類。軸と剣があり、花卉の断面が弧を描く。瓦当部、花卉の直径が大きい。剣の先が尖る剣菱状である。

1、2共に17世紀後半頃に比定される。

SU24（遺構Ⅲ-7図、遺物Ⅳ-5図）

1は青磁の壺である。景德鎮窯系JA1-15に分類される。高台内削りは左回転。底部無釉。畳付が斜めに削られている。高台内は部分的に橙色に発色している。胴部には一箇所耳が残存している。

2は軒丸瓦である。剣梅鉢文C類。軸と剣があり、花卉の断面が弧を描く。瓦当部の直径が小さい。剣の先が尖る剣菱状である。

SK30（遺構Ⅲ-9図、遺物Ⅳ-6図）

1～3は陶器である。1は瀬戸・美濃系碗、錆釉。全面に横位の沈線が付く。TC-1に分類される。胎土は堅く黒褐色である。斑状に錆釉、横位の沈線が付く碗（TC-1-q）に類似しているが、1の方がより器面が立ち筒形に近い。2は灰釉鉢でTC-5に分類される。底部無釉。底部高台内に墨書で花押が記されている。3は志戸呂系の灯明皿。TF-40に分類される。

4、5は土器である。4は底部糸切り左回転の皿でDZ-2-bに分類される。胎土は橙白色。内面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、江戸式かわらけと思われる。口縁部にスス付着。5は板作り成形。無印の塩壺。DZ-51-abに分類される。内面布目あり。底裏に成形時の指痕が顕著に残る。

SU32（遺構Ⅲ-9図、遺物Ⅳ-6図）

1は瀬戸・美濃系陶器皿。菊皿。外面鎬で黄瀬戸釉緑釉流し。TC-2-kに分類される。底部無釉。2は底部糸切り左回転の皿でDZ-2-bに分類される。胎土は橙色。内面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、江戸式かわらけと思われる。口縁部にスス付着。3、4は碁石形土製品でDQ-4004-Hに分類される。胎土は橙色。3は表裏面に成形時の指痕が残る。4はわずかに黒色の付着物が見られる。彩色の残存か。

5は軒丸瓦。剣梅鉢文C類。軸と剣があり、花卉の断面が弧を描く。瓦当部、花卉の直径が大きい。剣の先が尖る剣菱状である。二次焼成により発泡、赤変している。

瀬戸・美濃系陶器。菊皿（TC-2-k）が出土しており、17世紀後葉頃か。

SU33（遺構Ⅲ-10図、遺物Ⅳ-7図）

1、2は瀬戸・美濃系陶器碗である。灰釉薄掛け丸碗でTC-1-cに分類される。1は水引の痕が残る。3は土器である。土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。外面はきれいに磨かれている。

瀬戸・美濃系陶器灰釉薄掛け丸碗（TC-1-c）が出土しており、18世紀前葉頃か。

SU38（遺構Ⅲ-11図、遺物Ⅳ-7～9図）

1～5は肥前系磁器である。1、2は高台高が高い碗で、JB-1-iに分類される。小広東碗。3、4は

見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が大きく梅花繫ぎ文が描かれている。JB-2-m に分類される。見込みはコンニャク印判五弁花。5 は蓋物の段重で JB-13-c に分類される。

6～23 は陶器である。6、11 は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け丸碗で TC-1-c に分類される。底部無釉。6 は、高台脇が一段削り込まれている。7～10 は京都・信楽系の碗である。7 は TD-1 に分類される。高台畳付け脇が面取りされている。灰釉。器面には貫入が入る。小振りで器面に貫入が入る (TD-1-g) に近い。8、9 は杉形碗、鉄で若杉文が描かれている。小杉茶碗。TD-1-d に分類される。高台畳付脇面取り。小振り。10 は端反形。灰釉。小振りで器面には貫入が入る。TD-1-g に分類される。12 は合子。TC-18 に分類される。灰釉。13 は朝顔形の花生。TC-22-b に分類される。鉄釉、灰釉掛け分け。底部欠損。14、15 は植木鉢。14 は植木鉢で TC-21 に分類される。灰釉。器高の高い欄鉢。底部一次穿孔。高台に切れ込みはない。15 は植木鉢で TC-21 に分類される。胎土は粗く灰白色。白土掛け分け。底部一次穿孔。高台に切れ込みはない。16、17 は柿釉灯明皿。TC-2-o に分類される。見込みに溶着痕が残る。17 は口縁部の一部に欠けたところがありススが付着している。人為的に打ち欠いたかどうかは不明。18 は灰釉の油受け皿。TD-40-b に分類される。19、20 は脚無し柿釉の油受け皿。TC-40-c に分類される。21 は灰釉土瓶 (TZ-34-g) の蓋。TZ-00-g に分類される。22 は壺・甕 (TC-15) の橋状の摘みを持つ蓋。TC-00-b に分類される。鉄釉。23 は灰釉土瓶。TZ-34-g に分類される。大型である。

24～36 は土器である。24、25 は土師質丸火鉢は DZ-31-a に分類される。24 は口縁部に敲打痕がみられる。内面にススが付着。25 は脚が3箇所ある。26 は風炉で DZ-31-h に分類される。内面上部には円錐状の突起が2箇所みられる。おそらく3箇所あったものであろう。外面は丁寧に磨かれている。窓の部分には敲打痕がみられる。脚部欠損。27 は土師質、口縁部外反の鉢で DZ-5 に分類される。底部穿孔は無いが、植木鉢として使われたものか。28 は土師質、口縁部外反の鉢で DZ-5-a に分類される。口縁部の穿孔は残存量が少ないため不明。29 は土師質の植木鉢で DZ-21-a に分類される。底部一次穿孔あり。30 は透明釉脚付き油受け皿。DZ-40-a に分類される。31 は DZ-51-w に分類される。ロクロ成形無印。筒形。32、33 は断面逆台形、無印の塩壺の蓋で、DZ-00-d に分類される。34～36 は基石形土製品で DQ-4004H に分類される。34、35 は成形時の指紋の痕が残る、表面に黒色がわずかに残る。36 は表面に胡粉がわずかに残る。

37 は軒丸瓦である。梅鉢文で、軸がある。

肥前系磁器小広東碗 (JB-1-i)、梅花繫ぎ文 (JB-2-m) 瀬戸・美濃系陶器柿釉油受け皿 (TC-40-c) が出土しており、18世紀後葉に比定される遺物群である。上記以外では瀬戸・美濃系陶器徳利 (TC-10) が遺物の約3割を締めている。

SP54 (遺構Ⅲ-12 図、遺物Ⅳ-9・10 図)

1～3 は磁器である。1 は色絵の鉢。井鉢。2 は湯呑碗である。高台内に緑色で統制番号「瀬 496」が付されている。「瀬」は瀬戸陶磁器工業組合の略であろう。3 は瀬戸・美濃系の掛け分けの鉢。底部無釉。高台内のみ釉が掛けられている。

4 は瀬戸・美濃系陶器である。TC-10-c に分類される。釘書きは上部のみが残っている。口唇部は全面打ち欠かれたようになっている。

5 は土師質植木鉢で DZ-21-a に分類される。底部中央一次穿孔。

6 はガラス製インク瓶。色調は無色透明。わずかに気泡が入り、全体にゆがみが見られる。背が低く安定している。コルク栓。口唇部から底部まで左右に成形の型痕が見られる。

統制番号が付けられている碗があり、第二次世界大戦頃までの遺物が混在している一群である。

SU67 (遺構Ⅲ-14 図、遺物Ⅳ-10 図)

1 は肥前系陶器。底部鉄釉、白化粧刷毛目、深いタイプ。口部はないが片口鉢であろう。TB-23-a に分類される。口縁部は玉縁状。畳付脇面取り。高台内の削りは深い。2 は丹波系播鉢。TK-29 に分類される。口縁には明確な縁帯を持つ。縁帯の下部には重ね積みの痕が見られる。無釉。播目は8条1単位で施される。見込みの播目はクロスしている。胎土は橙褐色で石英、長石などの小石を含む。体部には斜方向の指頭による押さえがみられる。

17世紀後葉に比定される。

SK95 (遺構Ⅲ-16 図、遺物Ⅳ-11 図)

1、2 は土器皿である。底部糸切り右回転でDZ-2-a に分類される。かわらけ。胎土は橙色。口縁には、ススが全面に付着している。

底部糸切り右回転のかわらけは、17世紀中葉に比定される。

下面焼土層 (第Ⅱ章第4節、遺物Ⅳ-11 図)

1 はは漳州窯系磁器碗である。JA2-1 に分類される。小野分類、碗F群に分類される (小野1982)。青花。外面唐草文。見込み草花文。部分的に釉が厚くなっている。高台畳付砂粒付着。粗製。17世紀前半に比定される。

2 は瀬戸・美濃系陶器。鏝折れヒダ皿である。TC-2-n に分類される。全面に貫入が入る。

3 は土器。瓦燈の蓋で、DZ-45 に分類される。頭部欠損。スリットと通気用の小孔が穿たれている。

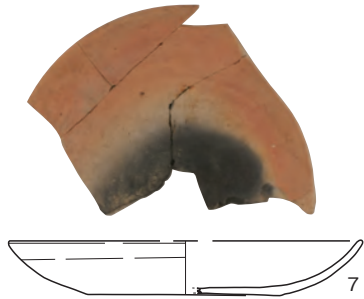
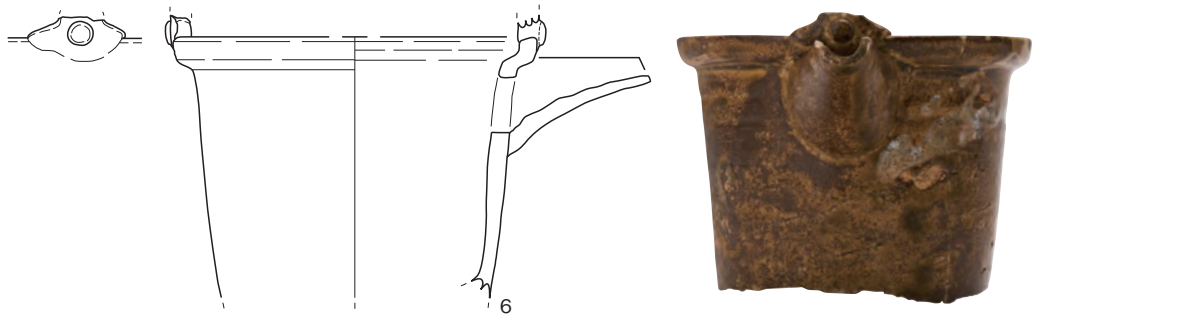
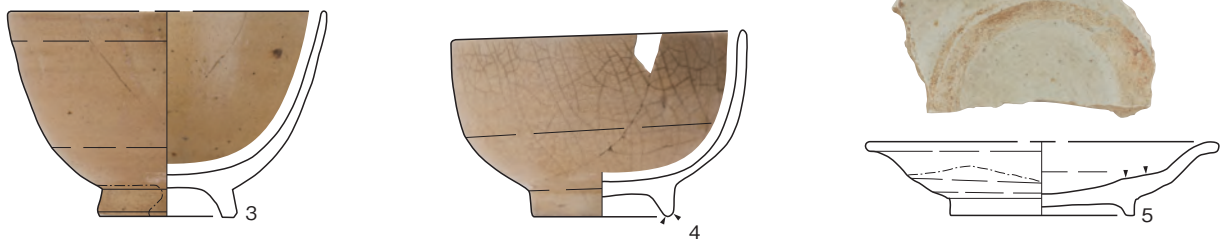
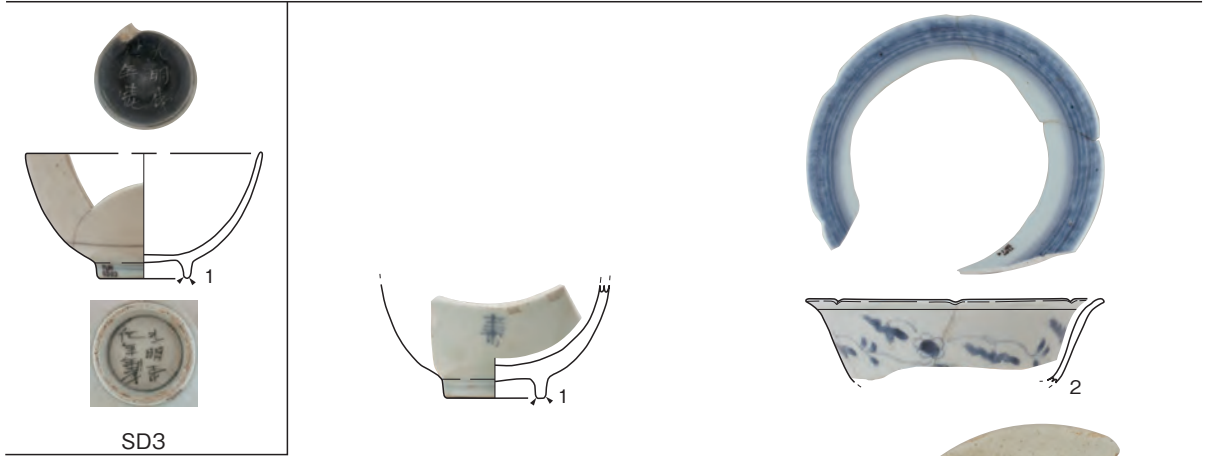
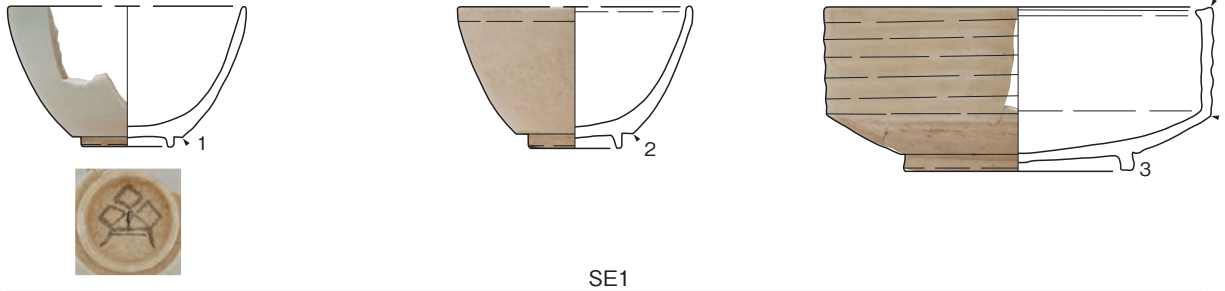
4 は菊瓦である。単弁14弁花文で花卉は接する。径は11.5cmである。他に東京大学構内遺跡で出土している菊瓦は、径8cmほどのものが多い。径が10cmを超える大型の菊瓦は瓦当に梅鉢文をもつものが確認されている。

遺構外 (遺物Ⅳ-12 図)

1～5 は陶器である。1 はTZ-1 に分類される。灰釉、刷毛目。高台内削りは左回転。底部無釉。わずかに暗褐色の粘土を練り込んでいる。削り後に無釉の箇所を磨いている。高台畳付脇面取り。2～5 は瀬戸・美濃系である。2 は長石釉丸皿。TC-2-c に分類される。ピン痕が三箇所残る。3 は香炉。袴腰。鉄釉輪高台。TC-9-f に分類される。4 は2合半灰釉徳利。胴部のみ。TC-10 に分類される。釉を掛ける前にコンパスのようなもので円を刻んでいる。5 は餌皿。TC-30 に分類される。灰釉。小振り。

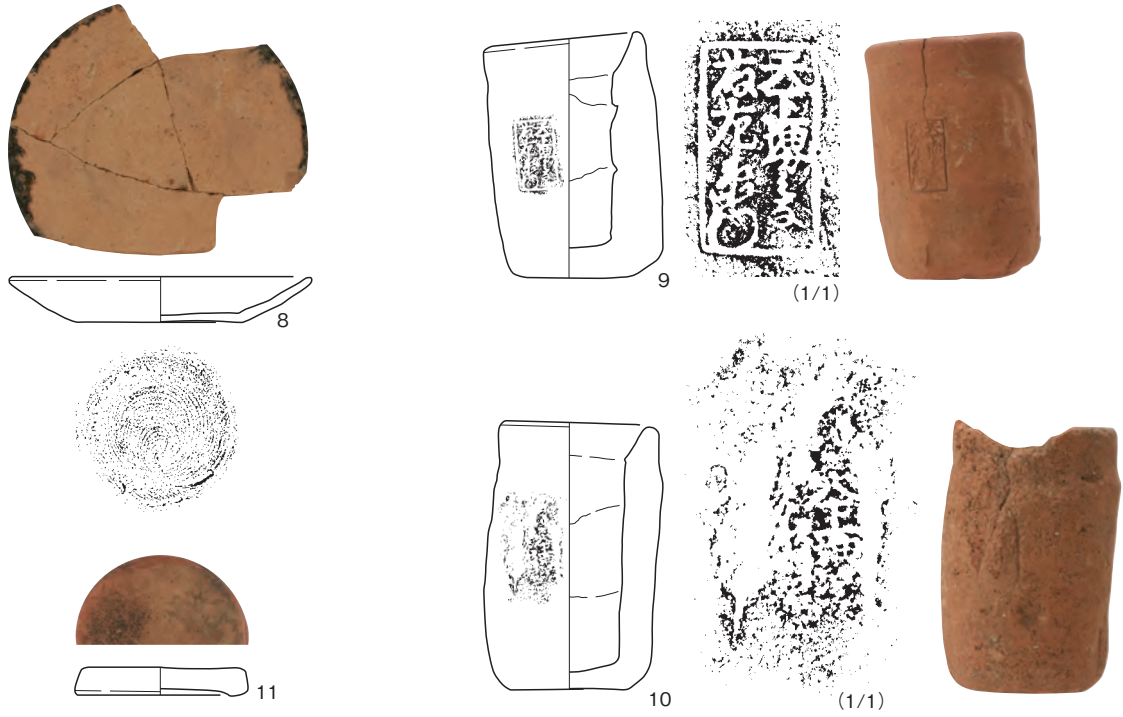
6～8 は瓦。6 は軒丸瓦。剣梅鉢文C類。瓦当の梅鉢文に剣が付く。7、8 は、軒棧瓦。7、軒丸部の紋様は8個の珠紋が巡る巴紋、周縁幅が広い。軒平部は中央から半分が欠損しているが、子葉の形態から「江戸式」に分類される。「江戸式」で軒丸部の紋様に珠紋が巡るものは19世紀前半以降に多く見られる。8、軒丸部の文様は巴紋。軒平部欠損。

9 は鉄製品。ねじ式の鉄管の栓か。重さ、約4kg。懐徳館に伴うものかもしれない。

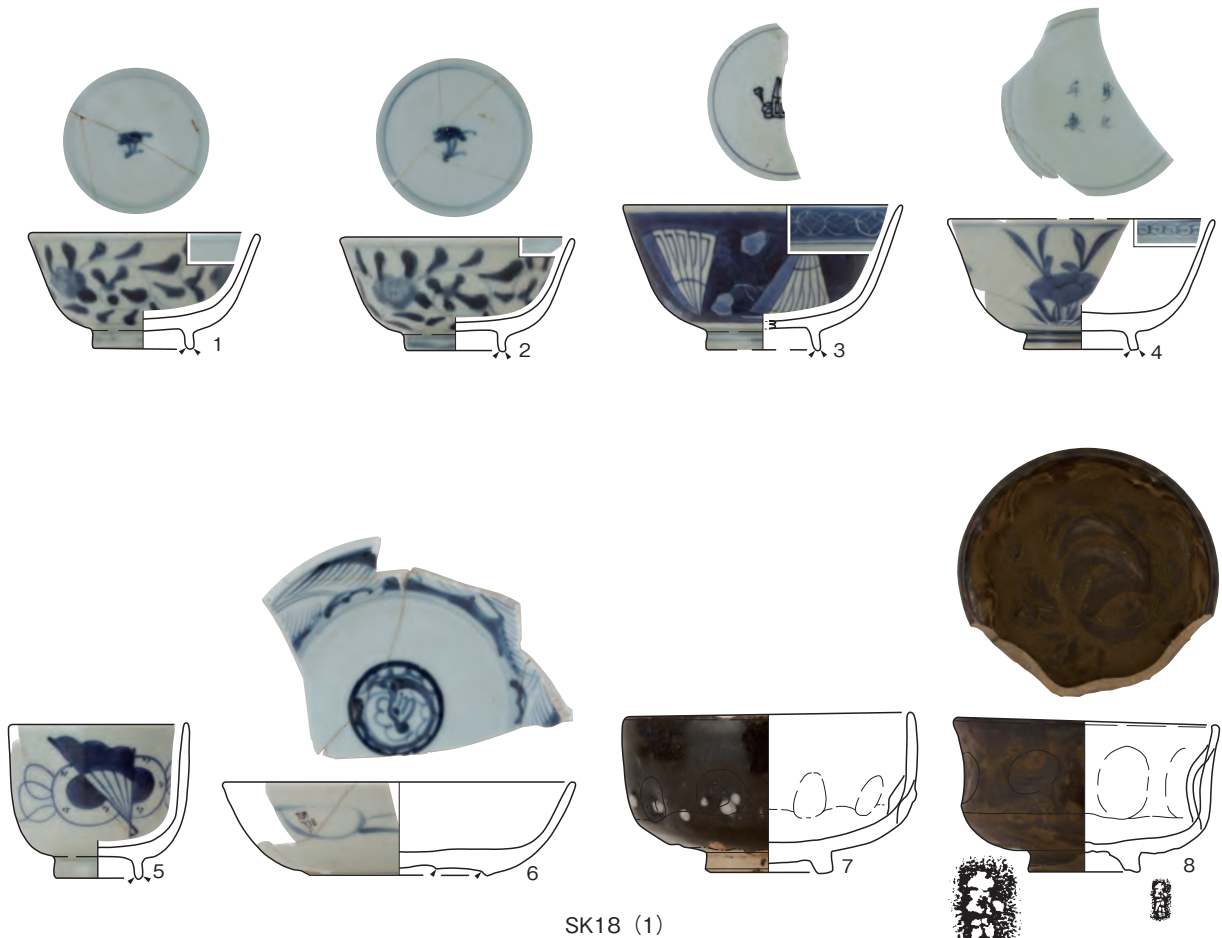


SK14 (1)

IV-1 図 SE1、SD3、SK14 (1) 出土遺物



SK14 (2)



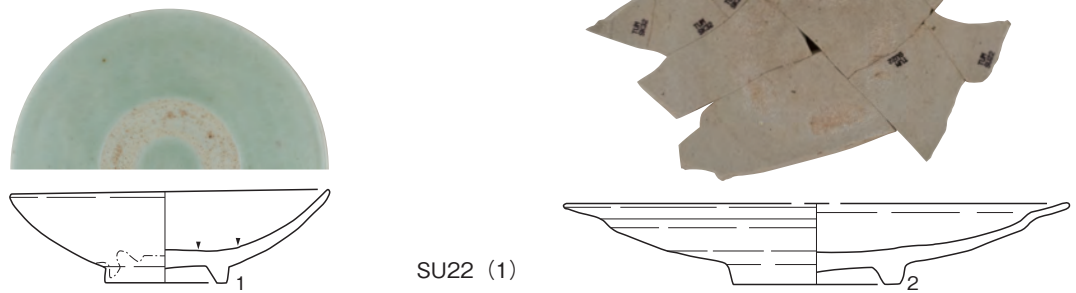
SK18 (1)

IV-2 図 SK14 (2)、SK18 (1) 出土遺物

(1/1)



IV-3 図 SK18 (2) 出土遺物



IV-4 図 SK18 (3)、SU19、SU22 (1) 出土遺物



SU22 (2)



SU24

IV-5 図 SU22 (2)、SU24 出土遺物

第IV章 遺物



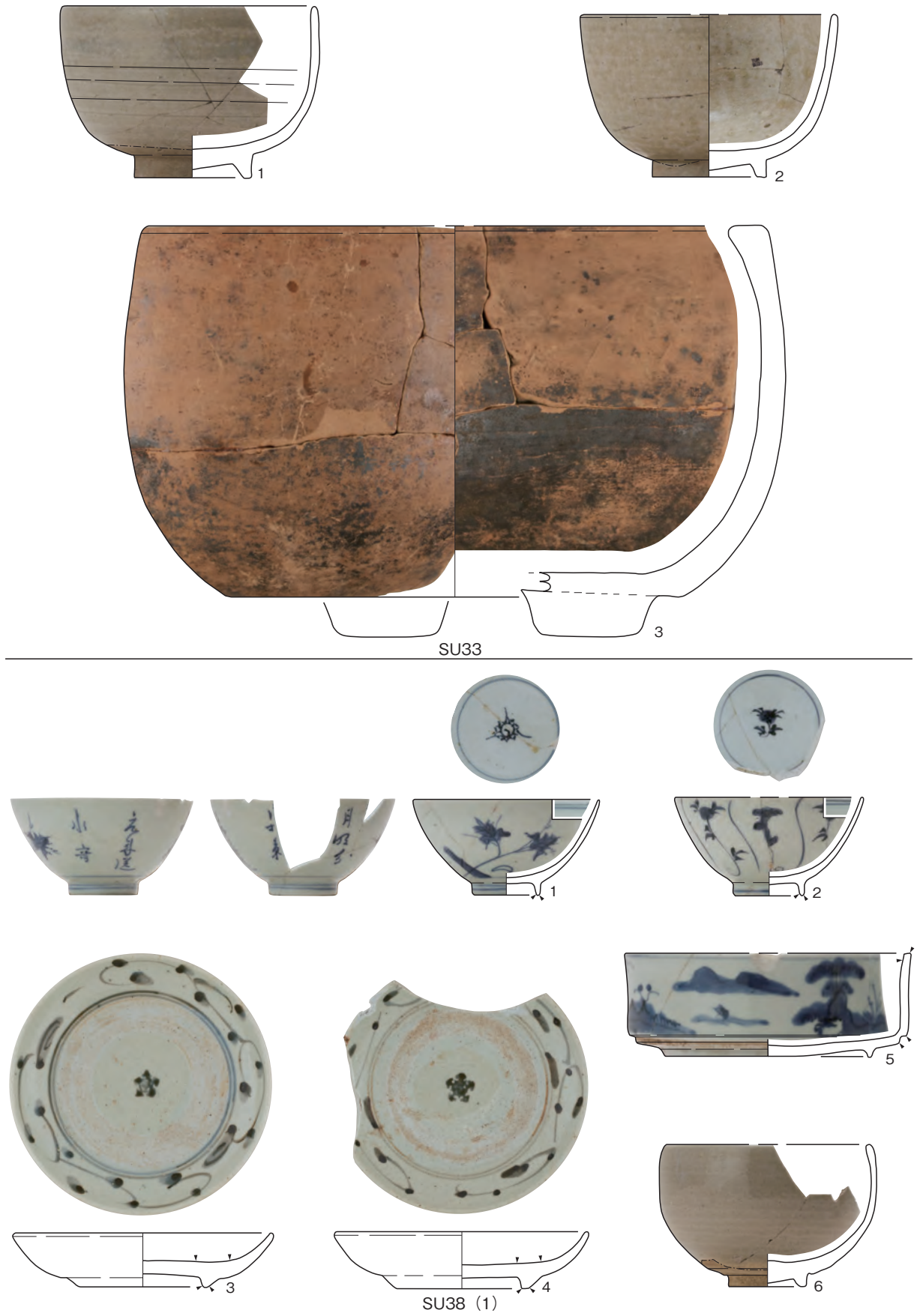
SK30



SU32

5 (1/4)

IV-6 図 SK30、SU32 出土遺物



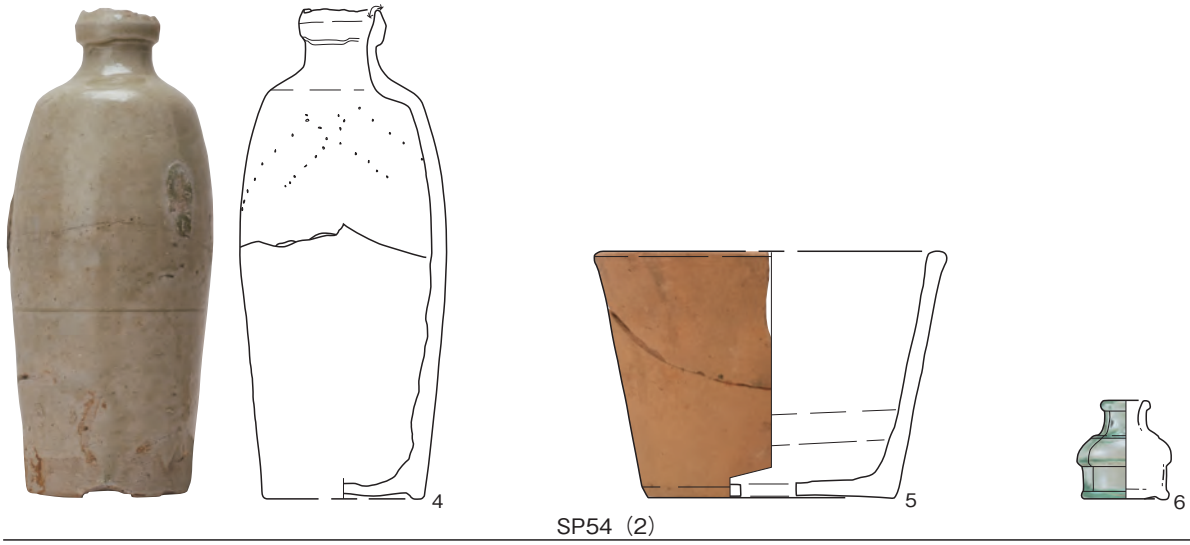
IV-7 図 SU33、SU38 (1) 出土遺物



IV-8 圖 SU38 (2) 出土遺物



IV-9 図 SU38 (3)、SP54 (1) 出土遺物



IV-10 図 SP54 (2)、SU67 出土遺物



IV-11 図 SK95、下面烧土层 出土遺物



遺構外

IV-12 遺構外 出土遺物

第2節 動物遺体

本調査地点出土の動物遺体は11群である。これらは、すべて現場にて視認できたもののみを対象に任意に採集してきたものである。以下に、本調査において検出された動物遺体の種名を示す。

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

腹足綱 Class Gastropoda

古腹足目 Order Vetigastropoda

サザエ科 Family Turbinidae

サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*

新腹足目 Order Neogastropoda

アキガイ科 Family Muricidae

アカニシ *Rapana venosa*

エゾバイ科 Family Buccinidae

バイ *Babyronia japonica*

二枚貝綱 Class Bivalvia

フネガイ目 Order Arcoida

アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii*

マルスダレガイ目 Order Veneroida

バカガイ科 Family Mactridae

ミルクイ *Tresus keenae*

マルスダレガイ科 Family Veneridae

アサリ *Tapes (Ruditapes) philippinarum*

ハマグリ *Meretrix lusoria*

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

ナマズ目 Order Siluriformes

ナマズ科 Family Siluridae

ナマズ *Siluridae asotus*

タラ目 Order Gadiformes

タラ科 Family Gadidae

属種不明 gen. et sp. indet.

カサゴ目 Order Scorpaeniformes

フサカサゴ科 Family Scorpaenidae

属種不明 gen. et sp. indet.

スズキ目 Order Perciformes

サバ科 Family Scombridae

マグロ属 *Thunnus* sp

フグ目 Order Tetraodontiformes

フグ科 Family Tetraodontidae

属種不明 gen. et sp. indet.

鳥綱 Class Aves

カモ目 Order Anseriformes

カモ科 Family Anatidae

ガン族 Tribe Anserini

属種不明 gen. et sp. indet.

哺乳綱 Class Mammalia

偶蹄目 Order Artiodactyla

シカ科 Family Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

奇蹄目 Order Perissodactyla

ウマ科 Family Equidae

ウマ *Equus caballus*

1. 貝類 (IV-2-1 表)

貝類は、7種27個体(最小個体数)が出土している。出土しているのは、アサリ(8個体)、サザエ(7個体)、アカニシ、アカガイ、ハマグリ(各3個体)、ミルクイ(各2個体)、バイ(1個体)である。なお、ハマグリはSD29のものは殻長50mm未満の中小型のものであるのに対して、SP54の破片は殻長50mm以上の大型のものである。

2. 脊椎動物 (IV-2-2 表)

脊椎動物は、8群 11点(破片数)が出土している。その内訳は、硬骨魚綱が5群 5点、鳥綱が1族 1点、哺乳綱が2種 5点である。

硬骨魚綱は、ナマズ、タラ科、フサカサゴ科、マグロ属、フグ科が各1点出土している。

鳥綱は、ガン族の左上腕骨が1点出土している。

哺乳綱は、ニホンジカが2点、ウマが3点出土している。ニホンジカは、SK62から中手・足骨(骨幹部分破片)、表土から左大腿骨が出土しており、共に食物残渣と考えられる。ウマは、SE01とSK18から上顎乳臼歯が1点ずつ、また、遺構外から左橈・尺骨が1点出土している。2点の乳臼歯は、屋敷内で飼育されていたウマから抜け落ちたものと考えられる。橈・尺骨は、近位骨幹部分でその近位及び遠位それぞれに鋸状の刃物による切断面を有している。このような切断面を有するウマ及びウシの四肢骨資料は、一般的に、簪や筭などの骨製品を製作した際の廃材と想定されている。一方で、ヨーロッパにおいて、骨髄をスープの出汁にする際に同様の切断をしているものがあり、日本においても幕末から明治時代の遺跡において多く見られる。その場合、ほとんどのものがウシである。本資料は、時期が不明であることから用途を推定することは困難である。そのため、本報告では、以上の可能性を提示するに留める。

遺構	種名	部位	数	MNI	備考
SK18	サザエ	殻	1	6	口唇部分
		蓋	2		
	アカニシ	破片			
	バイ		1		
SD29	サザエ	殻	2	13	中小型
		アカガイ	左		
		右	1		
	ハマグリ	左	2		
	アサリ	左	6		
		右	8		
SU49	アカニシ	破片	1	1	口唇部分
SP54	サザエ	蓋	2	3	大型
	ハマグリ	破片			
遺構外	サザエ	殻	1	4	
		蓋	破片		
	アカニシ		1		
	アカガイ	右殻	2		
				27	

IV-2-1 表 貝類遺体

遺構	分類群		部位		備考
	綱	綱より下位			
SE01	哺乳	ウマ	上顎乳白歯	左	
SK14	鳥	ガン族	上腕骨	左	近位から中位まで残存。
SK18	硬骨魚	ナマズ	歯骨	左	両部位は同一個体。歯骨後端に切断痕を有する。
	硬骨魚	フグ科	歯骨・角骨	右	
	哺乳	ウマ	上顎乳白歯	左	
SK37	硬骨魚	タラ科	腹椎		
	硬骨魚	フサカサゴ科	擬鎖骨	左	
SK51	硬骨魚	マグロ属	椎骨		椎体部分破片。
SK62	哺乳	ニホンジカ	中手/足骨		骨幹部分破片。
表土	哺乳	ニホンジカ	大腿骨	左	近位欠損。化石化の途上のため遠位端部は未癒合。
遺構外	哺乳	ウマ	橈・尺骨	左	近位骨幹。近位端部及び遠位方向は鋸状の刃物によって切断されている。

IV-2-2 表 脊椎動物遺体一覧

遺構	年代	貝類	魚類	鳥類	哺乳類
SE01	18c 後～19c 前				ウマ
SK14	17c3q			ガン族	
SK18	19c 前～中	サザエ (2), アカニシ (片), バイ (1), ミルクイ (2)	ナマズ, フグ科		ウマ
SD29	17c 後	サザエ (2), アカガイ (1), ハマグリ (2), アサリ (8)			
SK37	18c 前		タラ科, フサカサゴ科		
SU49	18c 前	アカニシ (片)			
SK51	17c 前		マグロ属		
SP54	近代 (戦前)	サザエ (2), ハマグリ (片)			
SK62	17c 前?				ニホンジカ
表土	—				ニホンジカ
遺構外	—	サザエ (1), アカニシ (1), アカガイ (2)			ウマ

※貝類カッコ内数字：最小個体数

IV-2-3 表 遺構別出土状況



IV-2-1 図 出土貝類遺体

1. サザエ 2. アカニシ 3. パイ 4. アサリ 5. ハマガリ 6. アカガイ 7. ミルクイ (1・4~6. SD29、 2. 遺構外、 3・7. SK18)



IV-2-2 図 出土脊椎動物遺体

1. フグ科 右歯骨・角骨 2. ナマズ 右歯骨 3. ガン族 左上腕骨 4・5. ウマ 上顎乳臼歯 6. ウマ 左橈尺骨(a 上面、b 正面、c 下面)
(1・2・5. SK18、 3. SK14、 4. SE1、 6. 遺構外)

第V章 考察

第1節 総合研究博物館新館地点の土地利用の変遷

(1) 発掘調査によって出土した遺構・遺物

遺構

本地点から確認された江戸時代から近代に比定される遺構は100基である。内訳は、溝10基、地下室13基、土坑25基、井戸2基、ピット49基、建物基礎1基であった。これら遺構群の確認面は、江戸時代が2面、近代が2面であった。

江戸時代の遺構確認面下面は、いわゆる漸移層から武蔵野標準層位Ⅲ層上面であった。したがって、江戸時代に本来その上に堆積していた縄文時代以降の土層を削平、平滑化して利用したと推定される。また上面は、下面上に厚さ10cm程度盛り上げ構築した硬化面で(Ⅱ-2図参照)、調査区の南側、西側に顕著に確認された。この硬化面は東側と北側A1～A3、B3、C3区などでは確認できず、そこから確認された遺構のうち遺物の出土がないものについては明確に面を特定することはできなかった。しかし、下面から確認された遺構群は上面のそれと比べて主軸方位が異なっていた。下面から確認されたSD100やSD120は、東西からやや南に振れているのに対し、上面から確認されたSD2やDS3はほぼ真北方向に主軸を有している。これは前者は現在の本郷通り、後者は春日通りに沿った軸であり、建築物が影響を受ける街区が変化したものと思われる。

上記の調査成果を踏まえて、下面の遺構群を伴う土地利用年代をⅠ期、上面はⅡ期とした。

遺物

本地点から出土した遺物は、陶磁器類、瓦、金属製品、石製品、自然遺物などコンテナ箱に64箱であった。器種組成から見た内容は日常生活に伴う生活道具類が大部分であり、器種の偏在、揃いの存在、質的に高い製品が多くみられるなどの特徴は認められなかった。年代的には17世紀から近代にかけてのものが出土しており、特に17世紀と18世紀後半～19世紀がやや多くみられる。SD100をはじめとする下面の遺構および上面を構成する硬化面から出土している遺物は17世紀前～中葉の製品であり、また、上面のSK14からは17世紀第3四半期に比定される製品で構成されていることなどから上面を構成する硬化面は17世紀中葉頃作られた可能性が高い。

こうした遺構の主軸方位の相違や面の構築状況これらに伴う遺物の出土状況は、本地点の年代的画期として位置づけられよう。また、後述する史料や絵図面との対比によって下面は、本郷五丁目町屋あるいは幕臣大森半七同心屋敷に伴うと推定される。また、SU22、SU24など比較的上面でも古い遺物が出土する遺構からは加賀藩の家紋である梅鉢文の瓦が出土していることから、上面は加賀藩本郷邸に伴う生活面と推定される。

(2) 土地利用の変遷

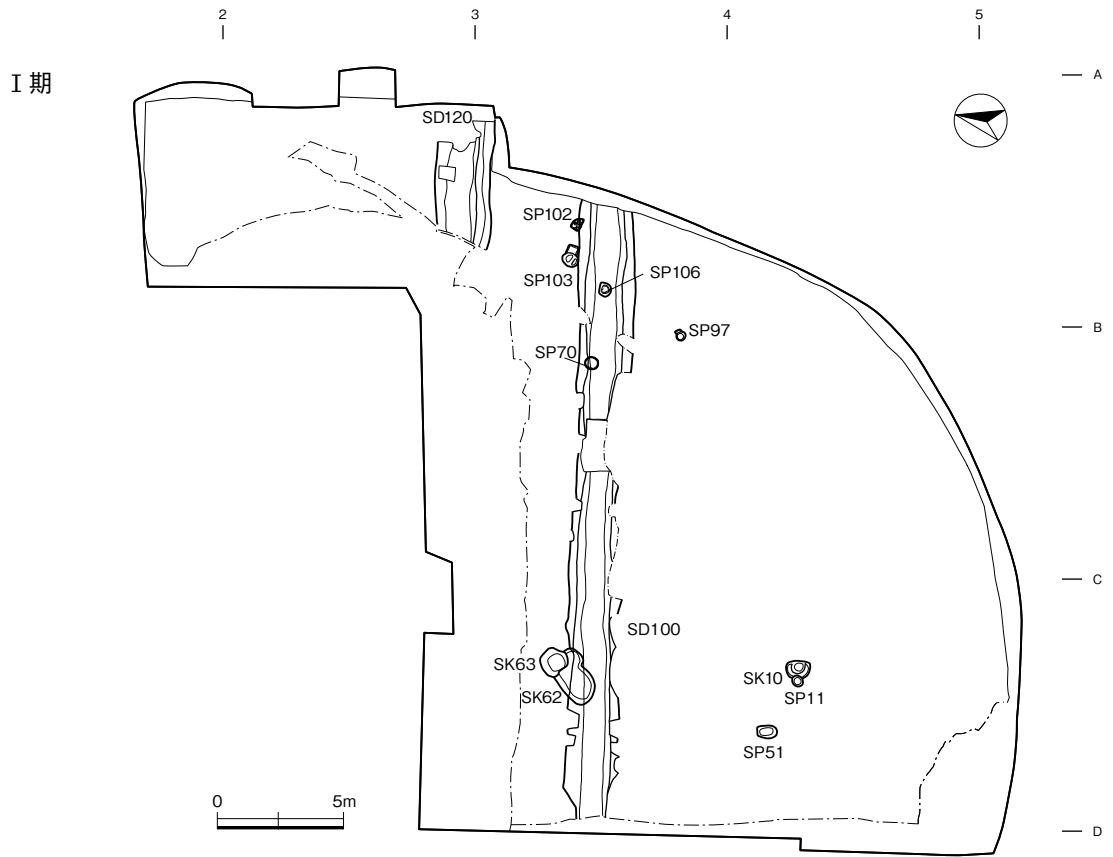
Ⅰ期 幕臣地期(下面)

遺構の数量 100 基のうち、明確に下面に比定される遺構が十数基で、上面の遺構よりかなり少ない (V-1 図)。下面は後述するように幕臣地に伴う段階で、本段階を I 期とした。こうした状況は下面における活動の頻度が低かったと換言できる。下面における明確な遺構として SD100、SD120 があるが、これらは遺構の規模、形態から江戸前期に多く確認される区画溝であろうと推定される^(註1)。この両溝は現在の本郷通りと垂直方向に構築されており、その間隔は溝中央間でおおよそ 3 間半、切り込みの上端間で 2 間を計測する。溝間には明瞭な硬化された痕跡などは確認できなかった。また、下面には SK63 など SD100 より新しい遺構群が存在することから、当該地が加賀藩邸に移行する前後、溝の埋立て、上面の構築、長屋建物建設にいたる過程が単純では無かったことが看取できる。

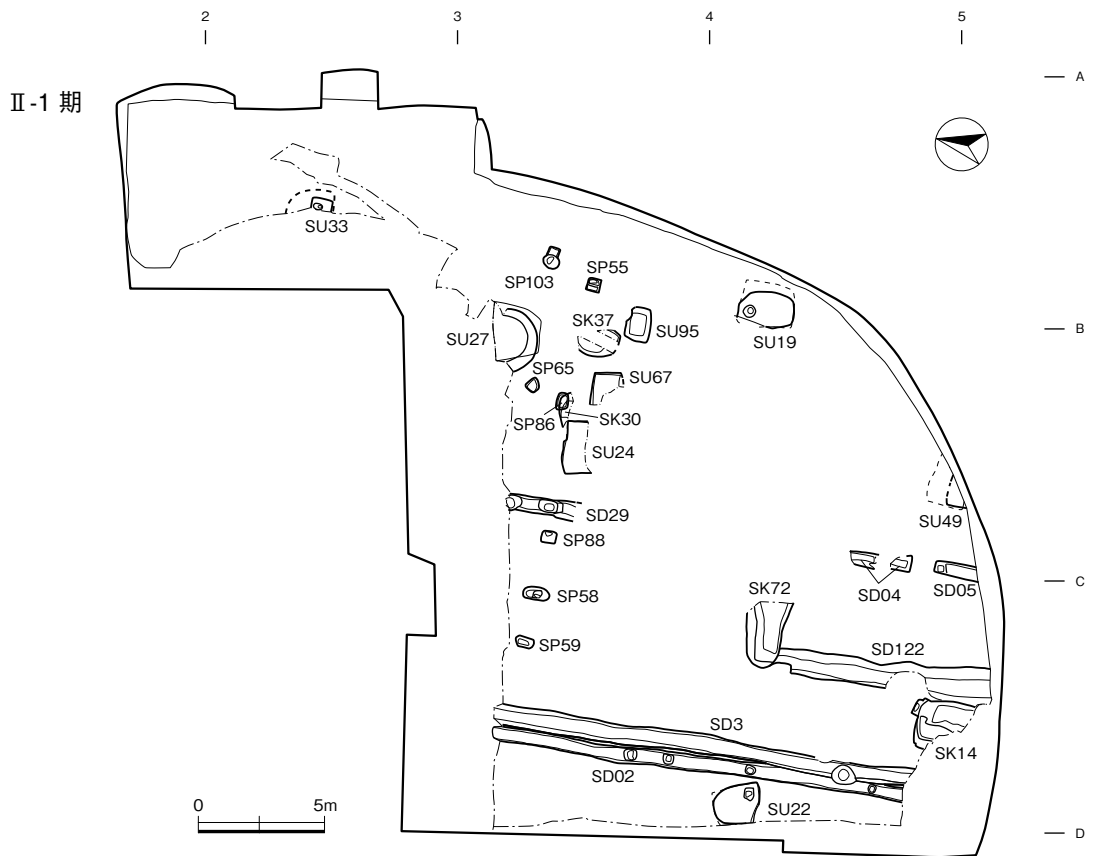
V-4 図は、臼杵市教育委員会所蔵の『寛永江戸全図』に調査区を照射したものであるが、絵図の精度の問題でおおよその位置しか示せなかった。この絵図は書かれている寺院や大名藩邸の文字情報の検討から寛永 19～20 (1642～43) 年の状況が描かれたものと推定されている (金行 2007)。調査区の位置は、湯島天神から西行する道と旧中山道が交差する現在の本郷三丁目交差点と次の町屋 (本郷四丁目町屋) 角から推定したものである。この段階の町割りは明暦の大火後のものと大きく異なっている。北に折れる本郷三丁目北角以北の中山道東側では、街道沿いに「町」とそれに接した「大森半七同心」が同一街区として描かれており、町と武家地との間に道が存在していない。これは明暦の大火前の江戸を描いた『正保年間江戸絵図』(古板江戸図集成刊行会 1958) でも同様であるが、大火直後明暦 3 (1657) 年頃を描いたとされる「江戸大絵図」(地図資料編纂会 1988) や『万治年間江戸測量図』(江戸文化資料刊行会 1970) では、町地の東側、新たに加賀藩邸となったエリアとの間に道ができています。この町割りは現在まで変化はしていない (V-5 図、V-7 図)。

本調査区は現在の本郷三丁目角から中山道東北側の街道沿い最初の街区と次の街区との間、絵図では道が描かれている付近であると推定される。この街区は、『寛永江戸全図』には「町」としか書かれていないが、後の絵図や史料から本郷四丁目と本郷五丁目にあたる場所である。また、この街区は旧中山道 (現在の本郷通り) に沿って区割りされており、両町間の道も寛永図では不鮮明で即断できないものの、以後の絵図面では街道と直角に道が描かれていることから、両町の街区や道の主軸は街道に沿ったものであると思われる。V-5 図は元禄元 (1688) 年の尊経閣文庫所蔵『武州本郷第図』、V-7 図は明治 16 (1883) 年『東京府武蔵國本郷區本郷本富士町近傍』である。これらの絵図には同様の街区が描かれており、当該地域は明暦の大火以降には大きな変化はないと判断される。

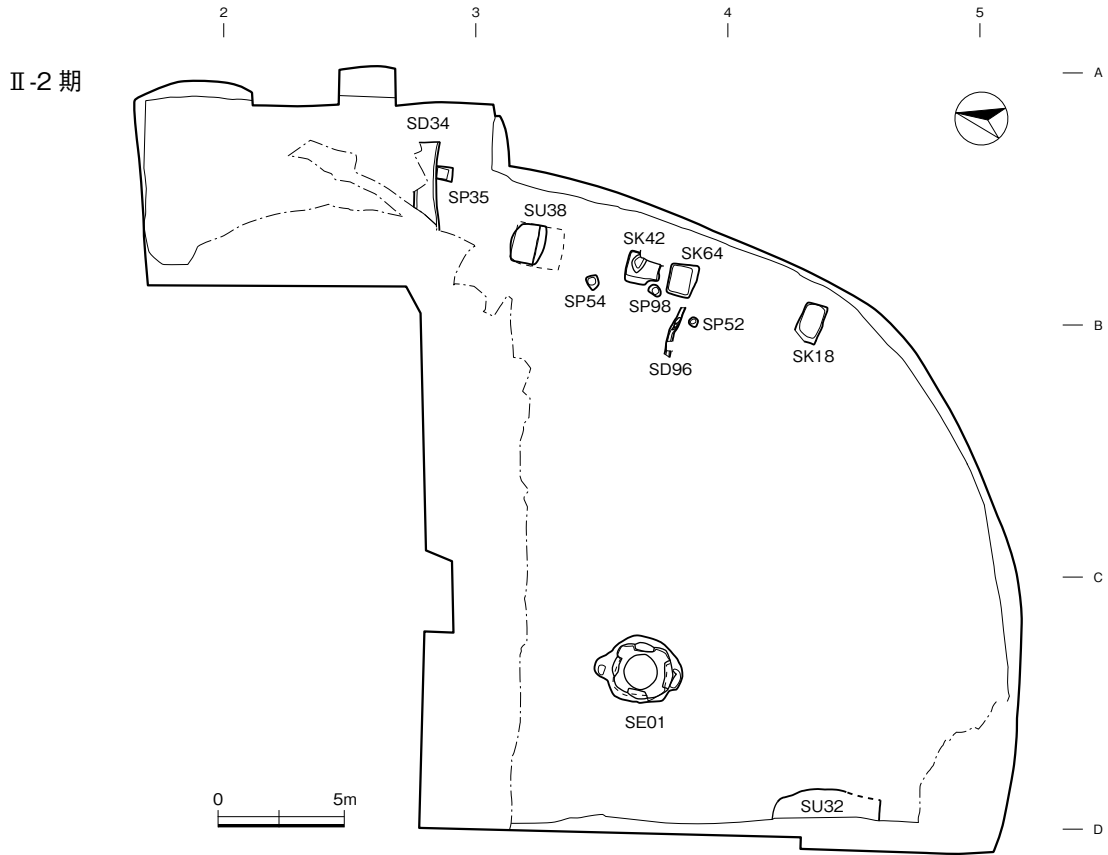
上記、周囲の状況と調査区出土遺構との対応関係を考えてみたい。SD100 と SD120 は本郷通りと垂直の主軸を持って構築されている。これらの位置は V-4 図から本郷四丁目と五丁目町屋間の境道付近と考えられる。この両溝が境溝である可能性もあると思われるが、本調査区から検出された遺構には、寛永図に描かれた町と「大森半七同心」屋敷とを区割りするこれに続く遺構や同心屋敷東側にとりつく南北方向の街路などは検出されていない。寛永図は精度の点で間尺などを整合させるには適さないが、町屋と背合わせに位置する同心屋敷を含んだ幅が重要になる。『武州本郷第図』で測距すると本郷四丁目町屋の幅はおおよそ 45m (25 間) であり、仮に町屋と同心屋敷の幅が同じ 25 間であったとすると、街道からの街区の境は 90m (50 間) となり、調査区の中に確認されてこなくてはならない。しかし、これに対応する南北方向の溝や列状のピット群などは確認されていない。これらから町屋より東側同心屋敷の方が若干幅広であった可能性が強く、中山道から寛永図に書かれた同心屋敷東の道までは 50 間 (90m) を超えていたと推定される。ただし、本郷四丁目町屋と背合わせになる同心屋敷は長方形に描かれておらず、変形した町割りとして描かれている。あるいはこれが対応する遺構が確認されない一因とも推定される。



V-1 図



V-2 図



V-3 図

大森半七は、『寛政重修諸家譜』によると、清和源氏源満仲の子頼親の流れで、江戸時代初期に当主であった大森好長の父好治の代から半七郎を名乗っている。好治は天正 18 (1590) 年に死に好長が継いでいる。慶長 19 (1614) 年武蔵国児玉郡に 300 石の拝領。その後大坂夏の陣の軍功で 200 石、元和 5 (1619) 年將軍の上洛や東照宮への供奉の功で 200 石を加増された。寛永 2 (1625) 年新墾田を含み知行 750 石の朱印を受けている。この後、寛永 6 (1629) 年御膳番、同 9 (1632) 年御使番、同 10 (1633) 年御目付から御持組頭となり、甲斐国にて 700 石の加増され、合わせて 1,470 石になった。この好長は正保元 (1645) 年に死去していることから、寛永図に描かれた「大森半七同心屋敷」は大森好長御持組同心の屋敷と思われる。

II 期 加賀藩本郷邸期 (上面)

発掘調査では大部の遺構が上面から確認されており、後述するように加賀藩邸に伴うものと推定される。本段階を II 期とした。これは上面が使用されていた時期における活動が下面より活発であった証左である。また、下面が溝の他には不整形の小土坑などであったのに対し、上面では溝の他に地下室、井戸、廃棄土坑、列状のピット群など生活に伴う明確な機能が推定できる遺構が多く確認されていることから首肯できよう。下面の遺構群との最も大きな違いは主軸方位で、上面の遺構群はやや東に振れた湯島天神から西行する現在の春日通りに沿った軸へと変化している。この変化は、17 世紀第 3 四半期の遺物群が出土している SK14、SU24 などとも該当し、当該地が加賀藩邸に組み込まれた当初から窺える。

遺物の出土は、17 世紀後半～18 世紀前葉と 18 世紀後葉～19 世紀と集中が分散されるが、前者を II-1 期、後者を II-2 期とした。これは遺構の廃棄が行われた時期が偏在しているとも換言できるが、

特に調査区東側を南北に貫く帯状の遺構分布域は、17世紀後半～18世紀前葉では若干西寄りに位置しているものの大きな変化はなく、幕末まではほぼ同じ位置に分布する状況が看取された。

・Ⅱ-1期（17世紀後半～18世紀前半）（V-2図）

前述のように17世紀後半から18世紀前半までの遺構は、Ⅰ期と比較して遺構軸が異なることが確認できる。この段階の遺構の分布状況を見ると調査区西側Dライン付近を南北に縦断する溝SD2、SD3があり、さらに東にはC4区にSD122、Cライン付近にSD4、SD5、SD29などの区画溝が確認される。地下室のように深い遺構は調査区の東側B～C区に確認されている。この地下室群は南北方向に幅を持って分布しており、2～3段階の構築、廃棄が想定される。SU22、SU24などから出土している梅鉢文の瓦はいずれも二次的な火熱を受けていることから、天和2（1682）年あるいは元禄16（1703）年と推定される火災の廃棄資料が含まれている。

史料、絵図などの情報を概観し、調査地との照射を行いたい。「松雲公夜話」には明暦3（1657）年7月9日「…近藤登之助殿向同心屋敷を、不残本郷御屋敷江御添御望之由。此所二萬歩。…（中略）…御願之所、其通に御拝領被遊候…」(『加賀藩史料』)（前田育徳会1920）とあり、明暦2（1656）年に第4代藩主前田光高の正室清泰院の死後、居住していた牛込邸の替え地として本郷邸南側を拝領した。これによって本郷邸は103,822坪の広大な面積を拝領地として受け、同所は幕末まで継続して経営される。

本郷邸の屋敷絵図は、本郷邸が拝領した元和2～3（1616～17）年から上屋敷として唱替した天和3（1683）年までのものは存在しない。最も古い絵図面はV-5図で示した『武州本郷第図』であるが、この間には上屋敷として利用する契機になった天和2年のいわゆる八百屋お七の火災で屋敷が全焼し、ここに描かれた屋敷の様子は下屋敷時代の状況を示しているとは言えない。

しかし、上屋敷時代初期の『武州本郷第図』（V-5図）と幕末期の『江戸御上屋鋪惣御絵図』（V-6,8図）をみると当該部分の土地利用は大きな変化は窺えない。屋敷南西隅から東側屋敷縁辺には長屋塀が西側へ延び、北側は中山道に沿ってやや開くように塀が巡っている。北側へ延びる塀の内側は、「九十九間」と書かれた南北に長い馬場があり、馬場の内側には南北方向の長屋建物が『武州本郷第図』では東西4列に南北2段、『江戸御上屋鋪惣御絵図』では東西3列に南北2段に配置されている。『武州本郷第図』、『江戸御上屋鋪惣御絵図』（V-8図）で詳しく見てみたい。前者には居住者と間取り、後者には間取りのみが書き込まれている。当該地域に照射した長屋建物をみると『武州本郷第図』では、東側に「侍分」、西側に長屋の中の間取りと思われる尺数が、北から「五間」、「六間」、「七間」、「十間」と記されている。また、長屋建物の中央やや西寄りに二本線が描かれ、おそらく建物部分と中庭部分との境と思われるが、どちらが建物であるとの記載はない。一方、幕末期の『江戸御上屋鋪惣御絵図』（V-8図）を見ると西側に建物が明確に描かれている。長屋の間取りも記されており、北から「五間」、「六間」、「七間」、「十間」と『武州本郷第図』と全く同じになっている。この『江戸御上屋鋪惣御絵図』は絵図の中では正確に測量されており、10間四方のメッシュが屋敷全体に描かれ、「南火之見續」と記されたこの長屋も庭を含めた幅が7間半程度（このうち建物3間、庭部分が4間半）、長屋間が4間で庭の方が奥行きのある構造になっている。東側が奥行きを多く取る構造は『武州本郷第図』と同様であり、元禄期の長屋も西側に建物が作られていたと推定される。この間、1761～71年に描かれたと推定される三井文庫所蔵『本郷御屋鋪之図』、1792～96年に描かれたとされる石川県立歴史博物館所蔵『加賀江戸本郷屋敷総絵図』をはじめ19世紀に描かれた絵図の多くに同位置に長屋が描かれ、その長さが「二十八間」あるいは「廿八間」の記載が確認される。これらから上屋敷になった天和3（1683）年以降、長屋の位置、部屋の区割りなどに大きな変化はないと推定される。

SD2、SD3 はほぼ同じ位置で重複して確認されている。これは遺構のラインが一定期間区画されている状況であったことが推定できる。加賀藩本郷邸の絵図ではこのライン付近以西に馬場が『武州本郷第図』の描かれた元禄元（1688）年から幕末まで通して確認でき、この両溝はこの馬場東側の区画溝であった可能性が高い。両溝のうち土層の観察より古い時期に廃絶したSD3は18世紀前葉の遺物が少量出土しているが、新しいSD2は遺物の出土しておらず、あるいはⅡ-2期に降る可能性もあろう。また、これに並行して南北に貫くSD5、SD4、SD29はSD3から4間半、SD2から5間（9m）隔てて確認されている。馬場と長屋建物の間は『武州本郷第図』によると「三間」と書かれており、建物の西外縁の区画とは合致しない。また、これら3遺構には所々に掘られていないブリッジがあり、このブリッジが塀や垣根状の施設がない部分であったことも考えられる。

17世紀後半の遺物が出土しているSU22、SU24段階は絵図面が存在しないので、土地利用は明確ではない。後述する馬場が作られた時期が天和2（1682）年の火災以前に可能性はあるものの断定はできない。

・Ⅱ-2期（18世紀後半～幕末）（V-3図）

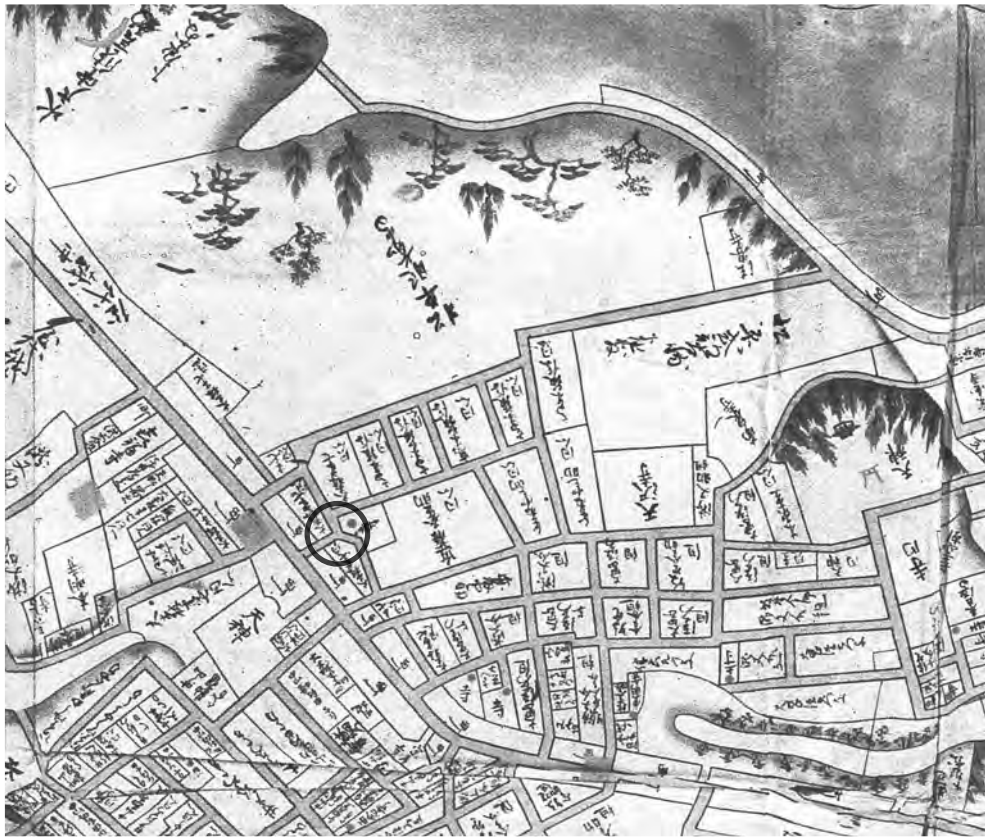
遺構の数は多くはないが、土地利用が窺える遺構が確認されている。東側には南からSK18、SK64、SK42、SU38などが列状に並んでいる。SK18とSU38は深度のある遺構で、SU38は地下室であるが、SK18もそれに相当する機能を有していたと推定される。SK42、SK64は方形を呈し、規模も大きな違いはない。また、覆土に灰や焼土を伴う点からイロリやカマド状の遺構であろうと推定される。しかし、これらは通常室内に作られる施設であるが、本地点では地下室と並んで構築されている。

西側には井戸SE1が確認されている。井戸の下部構造から井戸側、上屋、釣瓶などの施設が伴っていたと推定され、ある程度の期間の使用を意図していたことが想定される。SE1から出土した遺物は18世紀後半～19世紀初頭の製品が主体的であるが、当該期に作製年代が想定される絵図面には、長屋建物と馬場の間に井戸が描かれたものはない。また、断定はできないが、Ⅱ-1期に調査区西側に存在した馬場とを区画する溝SD2とほぼ同位置で並走する新しいSD3が継続していた可能性もある。

『江戸御上屋鋪惣御絵図』では屋敷南西縁に現在の春日通りと直交する軸で馬場が確認できる。調査区には馬場の一部と南火之見續長屋南側がかかっていると思われる（V-8図）。長屋は西側に建物、東側に庭があり、庭には便所と思われる方形の小印と小屋と思われる方形あるいは長方形の区画が確認できる。そしてこれらは調査区東側を春日通りの軸で南北に貫くように配置されていることが確認できる。『武州本郷第図』でも馬場、長屋、庭の位置などはほぼ同様である。これらから調査区東側が、遺構が列状に確認されるエリアであったと考えられる。小屋のような方形の建物は、基本的には長屋の中で長さ6間を越えるような広い面積を有する部屋に付属しており、5間以下の細かい部屋では確認できない。加賀藩邸東縁部の「東御長屋上壇」の山上会館龍岡門別館地点付近を描いた「加賀藩江戸御上屋敷長屋絵図」（大鋸コレクション）では、小屋状の建物内に「土間」、「イロリ」と書かれた施設が存在することから、使用人などが使った小屋であろうと推定される。こうした例から小屋の中に生活に使う諸施設が存在していた可能性が強く、庭部分から確認されたSK42、SK64などのイロリ状の施設は小屋内に存在した施設であったと推定される。

列状に確認された遺構群の西側には、14m程の大型遺構の空白地帯が存在するが、これは長屋建物であった位置と推定される。先述したが、庭を含めた南火之見續長屋の幅が7間半程度（このうち建物3間、庭部分が4間半）であり、調査区東の遺構群が庭部分東端のものとするなら、遺構群、空白地帯、馬場の位置関係はおおむね矛盾無いと考えられる。

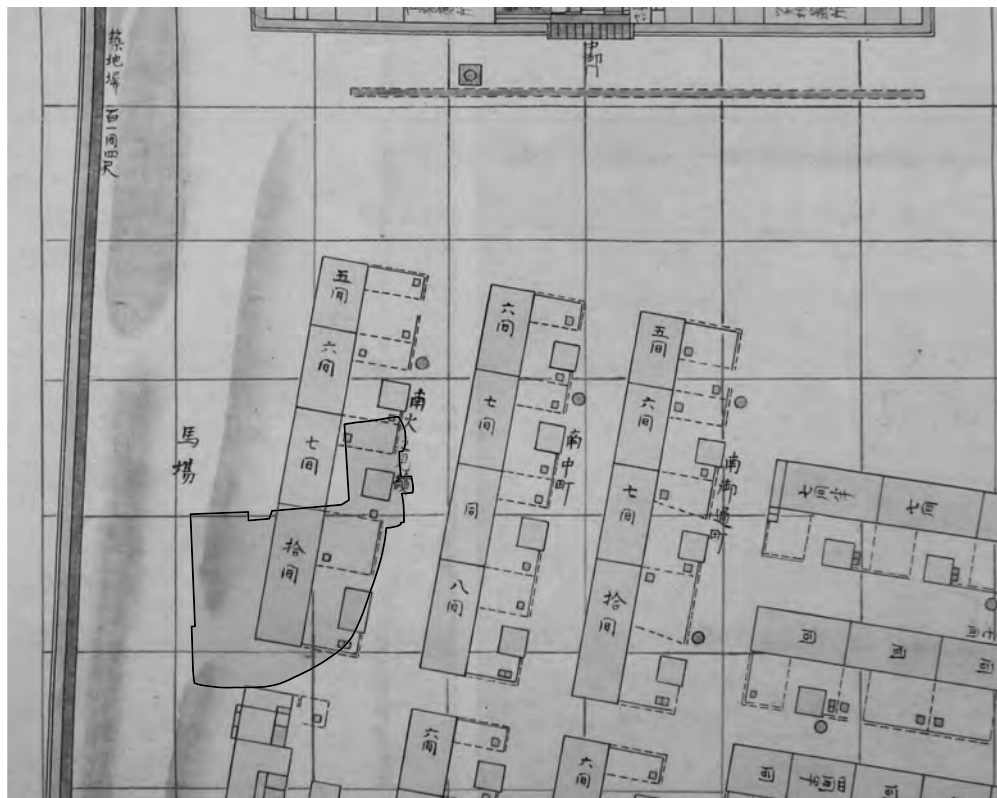
Ⅲ期 前田侯爵邸



V-4 図 『寛永江戸全図』(白杵市教育委員会所蔵)



V-5 図 『武州本郷第図』(尊経閣文庫所蔵に一部加筆)



V-8 図 『江戸御上屋鋪絵図』

発掘調査は、江戸時代加賀藩邸以前を対象に行ったため、近代以降の前田侯爵邸から現在までの調査は、Ⅱ-2期の遺構面（上面）に遺存している遺構に限定せざるを得なかった。

遺構面は2枚確認され、下の面はⅡ-2期の遺構面より約50cm上に位置する。断面を観察する限り、この面から切り込まれている遺構は非常に少ない。上の面は下の面より約1m上に確認された。これはレベル的に後述する懐徳館に伴う生活面と推定される。懐徳館レンガ基礎の最も高いレベルはおよそ22.5m付近であり、これと土層柱状図（Ⅱ-2図）で示した「前田邸生活面（懐徳館）」としたレベルとほぼ同じである。これは現存する懐徳館洋館アプローチと庭園とを区画する弧状の石塀の基礎レベルとも合致している。

明治元（1868）年に本郷邸が類焼する。このときの火災は、総合研究棟（文・経・教・社研）地点の調査でも確認され（東京大学埋蔵文化財調査室2002）、溶姫御守殿を含む殿舎がほぼ全焼している。当主前田慶寧は東京府に本郷邸の一部を私邸として使うことを願い出、12,600坪が認められた。これ以降、大正15（1926）年に駒場の農学部と代々木演習林との交換によって東京帝国大学用地となるまで、前田家の邸地として使用された。

明治16（1883）年『東京府武蔵國本郷區本郷本富士町近傍』（V-7図）の絵図には、前田侯爵邸の内部が描かれている。江戸時代の加賀藩本郷邸南西部の一角、現在の春日門より東、赤門会館より南側部分である。邸内は北から侯爵邸みられる大きな建物と庭園、小型でほぼ同様の作りの18棟の建物群、「畑及桃」と書かれた緑樹帯の大きく3ブロックで構成されている様子が看取できる。調査区はこのうち「畑及桃」と書かれた緑樹帯に位置している。これはⅢ期下の面から切り込まれている遺構の少ない調査成果と合致している。

・懐徳館について

調査区北東部から出土したレンガ基礎はその位置から明治40年に建設された懐徳館洋館の基礎と推定された。確認された基礎は後述するように洋館南西端の一部であり、建物全体の様子は復元できなかった。レンガ基礎の詳細は第三章を参照されたいが、基部にコンクリートとその上に1.8mのレンガを積み上げていた。学内調査で確認された法学部4号館・文学部3号館地点出土旧図書館基礎(東京大学遺跡調査室1990)、薬学部総合研究棟地点出土薬局基礎(東京大学埋蔵文化財調査室2004)などの台地上に位置する東京帝国大学に伴う校舎の基礎と対比すると規模も大きく堅固に造られていることが確認される。調査区内では懐徳館洋館に伴う配管などが出土している。後述するようにこれらは、冷水、温水の供給、下水の排水の管である。

東京大学で校舎新築などに対応して、学内調査が行われる以前の1982年に総合研究博物館東側に現存する理学部研究温室建設が行われた。温室は、懐徳館洋館の位置とほぼ同じであり、この建築時に懐徳館洋館の基礎は削平を受けている(V-9図)。図示した写真には洋館南側にあった庭への階段基礎や洋館の南東、南西隅などが鮮明に写っており、北端部を除き洋館の基礎のほとんどは失われたと推定される。

懐徳館の詳細や歴史的経緯は、既にいくつかの報告例が存在している(日本建築学会1908、東京帝国大学庶務課1935、東京大学事務局庶務部庶務課1982、藤井恵介1994、木下直之2000など)。詳細はこれらを参照されたいが、これらによると懐徳館は、明治天皇の行幸を仰ぐ為に建設された和館、洋館、庭園を指す。天皇の行幸は15代当主前田利嗣の宿願であり、次代前田利為が明治35(1902)年12月これの実現のために計画を起こし、明治36年1月地鎮祭を執り行い、明治37年の日露戦争の中断を挟んで明治38年に和館、明治40年に竣工した。

洋館は、建築費用約19万5千円を費やし、総建坪214坪1合9才、上階、下階、地階の三層建築である。上階は広間を中心に奥から右回りに図書室、書斎、婦人客室、夫人室、便所、閑室、寝室、浴室、表階段、裏階段、従者室に南側庭に面してバルコニーが作られている。下階も広間を中心に同じように食堂、客室、小客室、便所、玄関、脱帽室、応接室、表階段、裏階段、配膳室に上階と同様に南側にテラスと庭へと続く階段が付けられている。また、地階は喫煙室、轉球室、厨房、包丁詰所、食器洗場、皿置場、食料置場、石炭置場、機械室、倉庫などがあった。各部屋には冷水や発熱器を用いて温めた温水を配管を通じて配水している。この配管は調査時に確認されており、個別の管の特定はできなかったが部屋の壁内部に鉄管が多く確認されている。洋館の設計は海軍技師渡辺讓が行い、工事は赤石真が担当した。

洋館内部の装飾は、家具食器などを合わせて11万円であり、大きな金額を費やしている状況が窺える。木下氏は特に西洋絵画の収集には困難と配慮を要していたことを指摘しており、黒田清輝や野口駿尾画伯に依頼し、林忠正がヨーロッパで収集した油絵のコレクション23枚を3万円もの価格にて購入している。

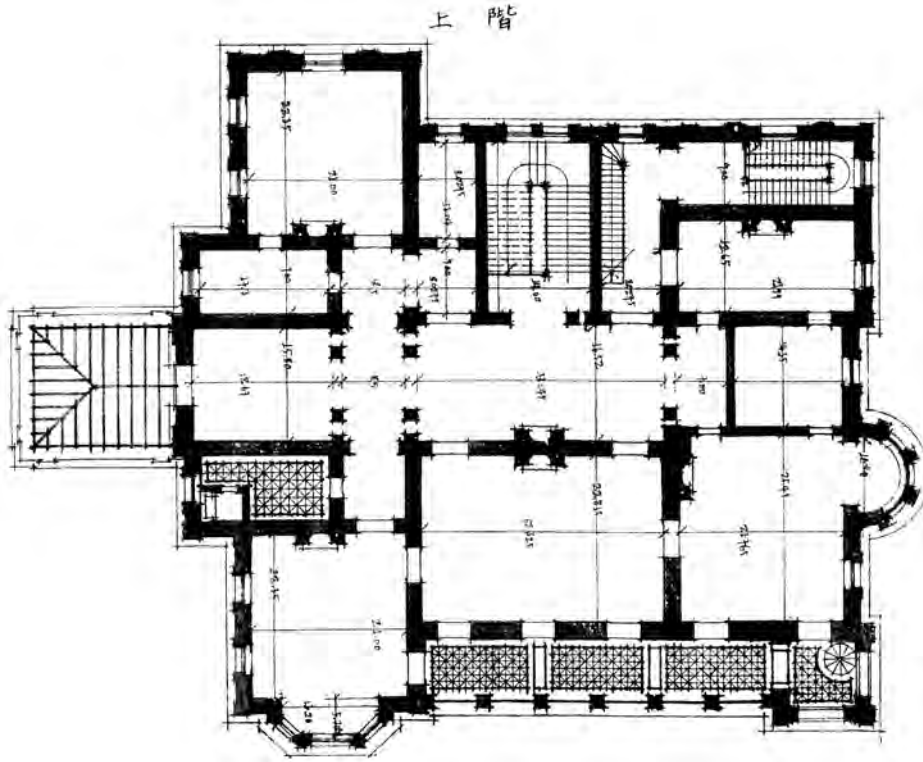
明治43(1910)年1月に天皇行幸の内意を受け、庭園の整備が行われた。庭園は前田家の庭師を勤めてきた伊藤彦右衛門が設計、施工を執り行った。1月28日造園に着手、完成まで1日数十人から数百人、延べ1万9千人の人員を動員、総工費6万円余りをかけて完成した。また、当日のため新たに能舞台の建築を行った。建築は、北沢虎三が行い、明治43(1910)年2月に工を起こし、119日総工費2万1千2百円をかけて5月30日に竣工した。この能舞台は行幸啓後の11月に取り壊されている。

明治天皇の行幸は明治43年7月8日に行われ、午前11時過ぎに前田邸に到着し、下賜・献を執り行い、昼食、書画の天覧、観能、親族の拝謁、琵琶の演奏、晩餐の後に午後7時前に還幸した。次い

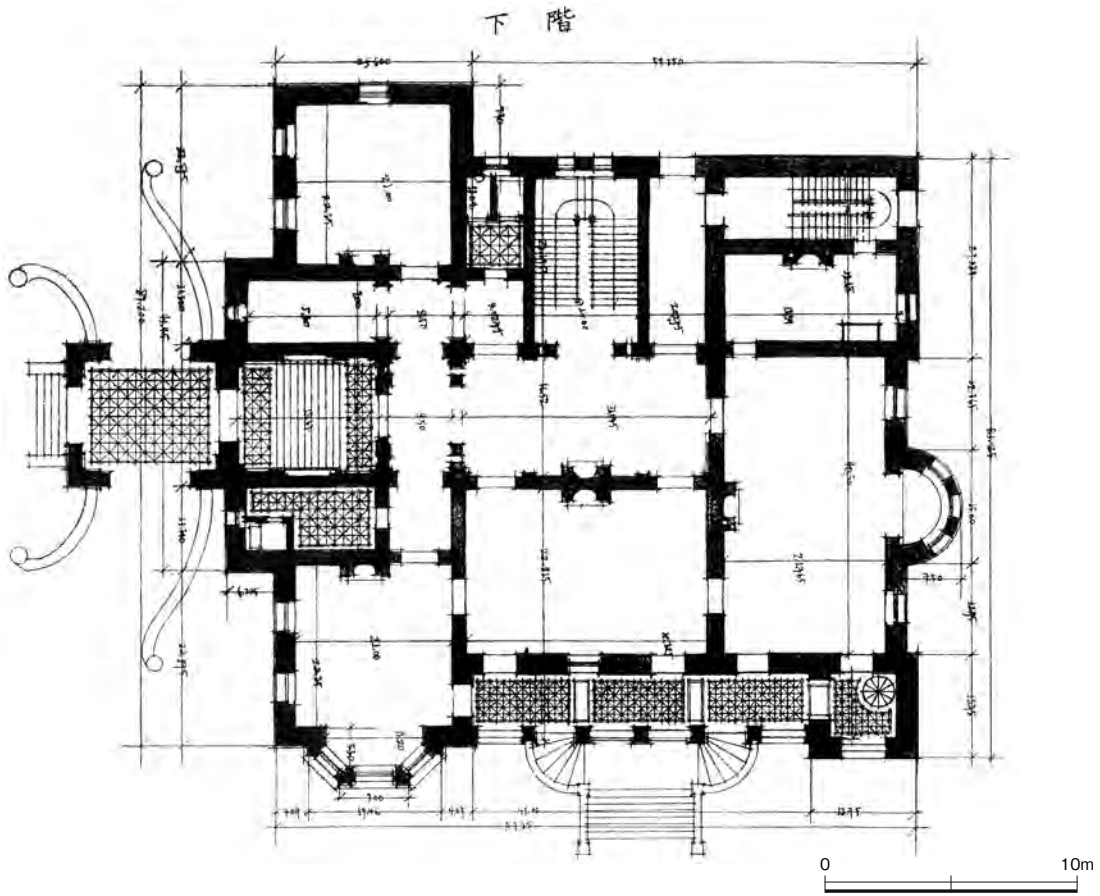


V-9 図 懷德館洋館基礎

階上



階下



V-10 図 前田邸見取り図(1)

【引用・参考文献】

- 江戸文化資料刊行会 1970 万治年間江戸測量図
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその時代」『貿易陶磁研究』No.2
- 香取祐一 2004 「加賀藩本郷邸表長屋の変遷」『東京大学構内遺跡調査研究年報4』東京大学埋蔵文化財調査室
- 金行信輔 2007 『寛永江戸全図』之潮
- 木下直之 2000 「前田侯爵家の西洋館－天皇を迎える邸－」『加賀殿再訪－東京大学本郷キャンパスの遺跡－』
東京大学総合研究博物館
- 続群書類従完成会 1964 『新訂 寛政重修諸家譜』
- 古板江戸図集成刊行会 1958 『古板江戸図集成』
- 後藤宏樹 2006 「江戸の上下水と堀－江戸城外郭を中心に－」『第19回大会 江戸の上 水・下水』江戸遺跡研究会
- 鈴木直章 1989 「遺跡の層序と地質学的調査・分析」『理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室
- 地図資料編纂会 1988 『江戸－東京市街地図集成』柏書房
- 東京大学遺跡調査室 1989 『理学部7号館地点』
- 東京大学遺跡調査室 1990a 『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1990b 『医学部附属病院地点』
- 東京大学事務局庶務部庶務課 1982 『懐徳館の由来』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 『東京大学構内遺跡調査研究年報1』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報2』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学構内遺跡調査研究年報3』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 『東京大学構内遺跡調査研究年報4』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005a 『医学部附属病院外来診療棟地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005b 『工学部1号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006a 『工学部14号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006b 『東京大学構内遺跡調査研究年報5』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2008 『東京大学構内遺跡調査研究年報6』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2009 『浅野地区I』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011a 『教育学部教育研究棟地点・IML地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011b 『東京大学構内遺跡調査研究年報7』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012 『東京大学構内遺跡調査研究年報8』
- 東京帝国大学庶務課 1935 『懐徳館の由来』
- 成瀬晃司 2008 「Ⅲ章 白山御殿の惣囲いについて」『東京大学構内遺跡調査研究年報6』東京大学埋蔵文化財調査室
- 日本建築学会 1908 「巻末附図説明 前田侯爵邸建築工事概要」『建築雑誌』263
- 橋本真紀夫 2009 「東京大学浅野地区の方形周溝墓における土壌分析」『浅野地区I』東京大学埋蔵文化財調査室
- 藤井恵介 1994 「本郷前田侯爵邸と東京大学」『東京大学総合研究資料館ニュース』32 東京大学総合研究資料館
- 堀内秀樹 1994 「総合研究資料館増築に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要」『東京大学総合研究資料館ニュース』32 東京大学総合研究資料館
- 本郷區役所 1937 『本郷區史』

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき そうごうけんきゅうはくぶつかんしんかんちてん							
書名	東京大学本郷構内の遺跡 総合研究博物館新館地点							
副書名								
巻次	11							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	堀内 秀樹 (編)、小林 照子 (編)、阿部 常樹							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒 153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒 153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成 24 年 5 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇' "	東経 〇' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきょうだいがくほんごうこうない 東京大学本郷構内 の遺跡 (本郷台遺跡群) そうごうけんきゅうはくぶつかん 総合研究博物館 しんかん 新館 ちてん 地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうくほんごう 文京区本郷 ちやうめ ほん 7丁目3番1 こう 号	13105	47	35° 42' 30"	139° 45' 40.	平成6年 2月14日～ 4月8日	670㎡	総合研究 博物館新 館新営の ための事 前調査
所収地点名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
総合研究博物館新館 地点	武家屋敷(～ 明暦3年幕 臣地、明暦 3年～加賀 藩本郷邸) 前田侯爵邸	近世 近代	溝、井戸、地下室、 土坑、ピット列(近 世)、 洋館基礎(近代)	陶磁器、土器、金属 製品、石製品、瓦、 ガラス製品、自然遺 物				

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 11

東京大学本郷構内の遺跡

総合研究博物館新館地点

2012年5月31日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場4-6-1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印刷 (有)平電子印刷所
